

平成23年度

安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書



明科遺跡群古殿屋敷（第1次）

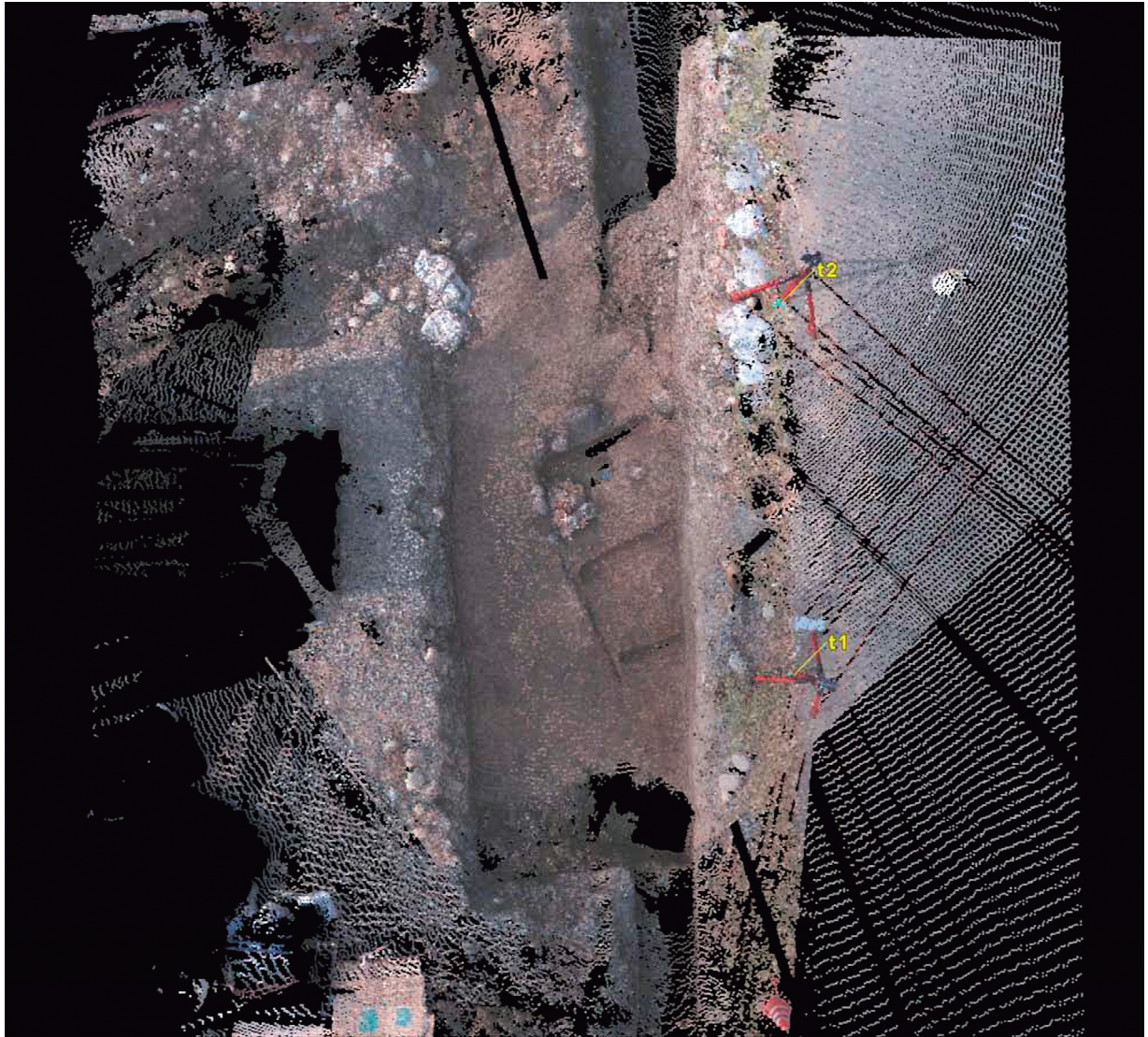
明科遺跡群栄町遺跡（第3次）

2013. 3

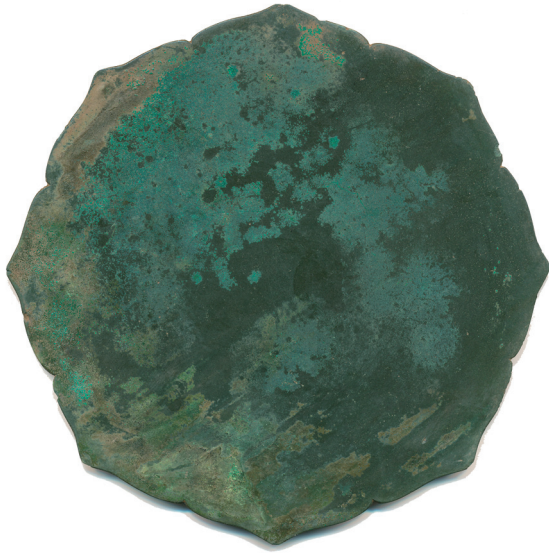
安曇野市教育委員会



古殿屋敷 SK1全景（上が西）



遺構三次元測量



鏡面



鏡背

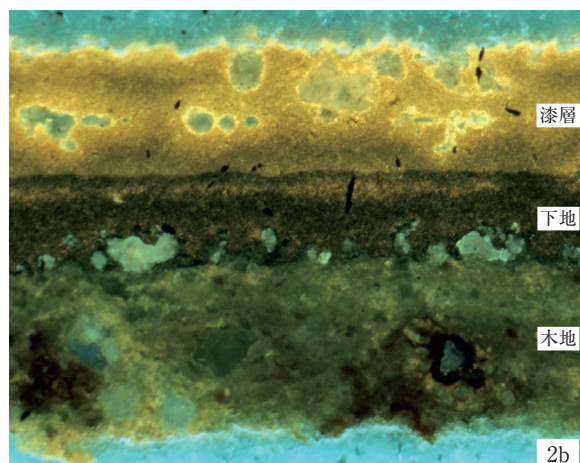
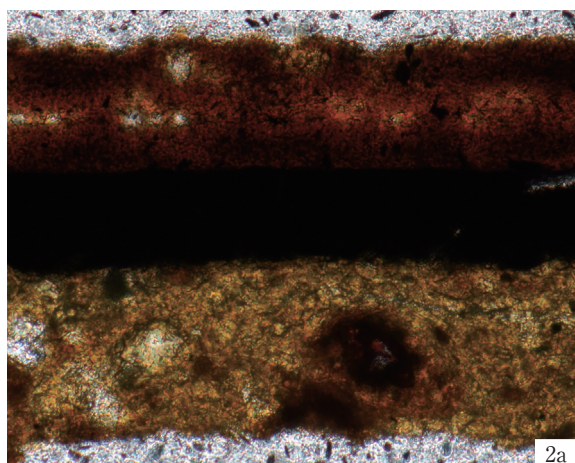
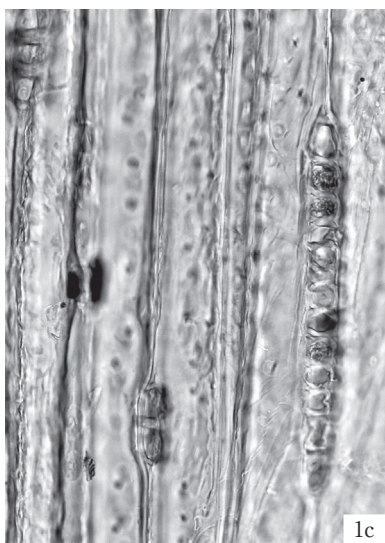
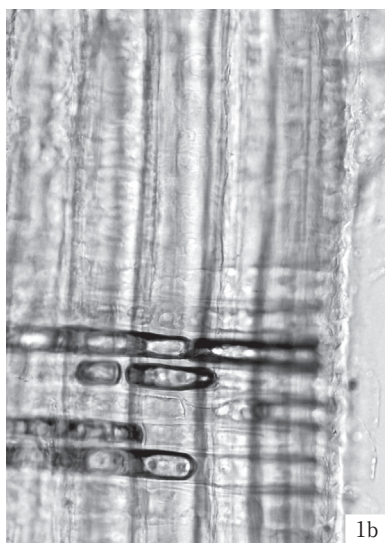
八稜鏡



木材表裏



古殿屋敷 SK1出土遺物



1. サワラ (木片) a: 木口、b: 柁目、c: 板目
 2. 漆塗膜断面 (塗膜片) a: 透過光、b: 落射蛍光

100 μ m : 1a

100 μ m : 1b、1c、2b

木材・漆薄片



栄町遺跡遺構検出状況（南から）



栄町遺跡完掘状況（南から）



栄町遺跡空撮（上が西）



栄町遺跡空撮（南東から）



栄町遺跡 SB1カマド出土土器



栄町遺跡 SB7覆土 4層上部出土須恵器

序

現在、安曇野市では約400箇所の埋蔵文化財包蔵地の存在が知られています。ここには、集落跡のような遺跡だけでなく、古墳や中世の山城・館跡なども含まれています。これらの遺跡には住宅地や市街地に立地するものも多く、日々開発事業との調整が行われています。これは、現代の人々の生活と、先人たちの生活の痕跡を守ることのバランスが、現代を生きる私たちにとって重要であるからです。

安曇野市では平成23年度に明科総合支所建設工事に先立ち発掘調査を実施しました。この場所は以前から明科遺跡群栄町遺跡として知られており、旧明科町時代にも周辺の調査が行われています。今回、発掘調査を実施した付近は明治時代末に官営製材所がおかれた場所でもあります。この製材所は火災によって焼失した記録がありますが、今回の調査ではこの火災の痕跡と推定される焼土なども観察されました。このことは、写真や記録のある時代であっても考古学的な調査の対象になりうるという好例です。

また、本書掲載の調査のうち明科遺跡群古殿屋敷からは、平安時代の墓から青銅製の八稜鏡や陶器類が出土しました。八稜鏡や緑釉陶器が完全な形で出土したのは市内で初めてのことです。前述の栄町遺跡の発掘と併せて明科地域の古代がまたひとつ明らかになったといえます。

最後になりますが、本書をまとめるにあたり、多くの諸氏、諸機関にご協力とご指導を賜りました。この場をかりて、厚く御礼申し上げます。本書掲載の調査成果が多くの市民に活用され、広く安曇野の歴史・文化解明に役立つことを祈念し序とさせていただきます。

平成25年（2013）3月

安曇野市教育委員会
教育長 丸山武人

例 言

- 1 本書は長野県安曇野市^{ながのけんあづみのし}で平成23年度に実施された埋蔵文化財保護事業及び明科遺跡群古殿屋敷^{あかしな いせきぐんふるとのやしき}（以下「古殿屋敷」とする。）（第1次）発掘調査、明科遺跡群栄町遺跡^{あかしな いせきぐんさかえちやう いせき}（以下「栄町遺跡」とする。）（第3次）発掘調査報告書である。
- 2 本書掲載の調査は、安曇野市教育委員会が実施した。調査体制は各章の通りである。
- 3 本書の編集は安曇野市教育委員会事務局が行った。執筆は土屋和章が担当し、山下泰永が統括した。「第3章 4 遺跡の古環境」については鳥羽嘉彦氏による詳細な観察記録を掲載した。また、自然科学分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に業務委託した。
- 4 本書で使用した主な引用・参考文献は巻末に一括して掲載した。ただし、業務委託した自然科学分析については各分析の文末に引用文献を掲載している。
- 5 本書掲載の調査に関する出土遺物及び事務書類、記録類は安曇野市教育委員会が保管している。
- 6 調査全般にわたり以下の方々からご指導・ご協力いただきました。記して感謝いたします。（敬称略・五十音順）

大澤 慶哲、桐原 健、笹本 正治、島田 哲男、鳥羽 英継、鳥羽 嘉彦、長野県教育委員会、長野県立歴史館、原 明芳、藤松 慎一郎、水沢 教子、百瀬 新治、山田 真一、有限会社岩渕組、吉田 恵二

凡 例

- 1 発掘調査及び整理作業に際し、遺跡略号として遺跡名のアルファベットと調査年度（西暦2011年）の組み合わせである次の標記を使用した。
明科遺跡群古殿屋敷（第1次）：FTY11 明科遺跡群栄町遺跡（第3次）：SC11
- 2 調査及び本書での遺構名は、次の略号を使用している。
SB：竪穴建物跡・竪穴状遺構 SD：溝状遺構 SF：焼土遺構 SK：土坑 ST：掘立柱建物跡
P：ピット
- 3 本書実測図で遺物は次のように表現した。また、縮尺は各図に示した。
土師器：断面無地 須恵器：断面黒塗 灰釉陶器：断面トーン（濃）
緑釉陶器：断面トーン（薄） 黒色処理：トーン（薄）
- 4 土層の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。

目 次

序

例言・凡例

目次・挿図目次・表目次

第1章 平成23年度埋蔵文化財保護事業	1
1 埋蔵文化財保護事業の概要	1
2 試掘調査等	6
第2章 古殿屋敷（第1次）発掘調査	9
1 調査の契機と経過	9
2 遺跡の位置と環境	10
3 調査の方法と成果	14
4 遺構と遺物	18
5 自然科学分析	23
6 調査の総括	26
写真図版	27
第3章 栄町遺跡（第3次）発掘調査	30
1 調査の契機と経過	30
2 遺跡の位置と環境	33
3 調査の方法と成果	40
4 遺跡の古環境	40
5 遺構と遺物	44
6 自然科学分析	89
7 調査の総括	95
写真図版	101

引用・参考文献

報告書抄録

挿図目次

第1図	平成23年度発掘調査等位置図	2	第32図	SB3・4・5出土遺物	55
第2図	追堀遺跡試掘位置図	6	第33図	SB6遺構図	57
第3図	穂高古墳群 A7号墳試掘位置図	6	第34図	SB6出土遺物	58
第4図	野辺沢遺跡試掘位置図	7	第35図	SB7遺構図	59
第5図	北才の神遺跡試掘位置図	7	第36図	SB7出土遺物 (その1)	60
第6図	法蔵寺館跡発掘位置図	8	第37図	SB7出土遺物 (その2)	61
第7図	古殿屋敷付近の遺跡	12	第38図	SB8遺構図	62
第8図	発掘調査位置図	13	第39図	SB8出土遺物	63
第9図	基本層序	14	第40図	SB9遺構図	64
第10図	調査区全体図	15	第41図	SB9出土遺物 (その1)	65
第11図	SK1	16	第42図	SB9出土遺物 (その2)	66
第12図	SK1遺物集中区	17	第43図	SB10遺構図	67
第13図	瑞花双鳥八稜鏡	19	第44図	SB10出土遺物	68
第14図	八稜鏡エックス線写真	20	第45図	SB10・11出土遺物	69
第15図	木材	20	第46図	SB11遺構図	70
第16図	SK1出土土器	21	第47図	SB12遺構図	71
第17図	SK1出土坏類口径・器高分布	22	第48図	SB12出土遺物 (その1)	72
第18図	FT-IR スペクトル	25	第49図	SB12出土遺物 (その2)	73
第19図	栄町遺跡付近の遺跡	34	第50図	SB14遺構図	75
第20図	発掘調査位置図	35	第51図	SB15遺構図	75
第21図	調査区全体図	37	第52図	SB14・15、SK2・3出土遺物	76
第22図	明科製材所敷地図	39	第53図	ST1遺構図	77
第23図	基本層序	41	第54図	ST2遺構図	78
第24図	集落内の環境	43	第55図	ST3遺構図	79
第25図	SB1遺構図	47	第56図	ST4遺構図	80
第26図	SB1出土遺物 (その1)	48	第57図	ST5遺構図	81
第27図	SB1出土遺物 (その2)	49	第58図	ST6遺構図	82
第28図	SB2遺構図	50	第59図	レンガ構造物遺構図	83
第29図	SB2出土遺物	51	第60図	炭化材(1)	93
第30図	SB3遺構図	52	第61図	炭化材(2)	94
第31図	SB4・5遺構図	54			

表目次

第1表	平成23年度発掘調査等一覧	4	第8表	栄町遺跡出土土器観察表	85
第2表	古殿屋敷付近の遺跡	12	第9表	栄町遺跡石製品・土製品観察表	88
第3表	古殿屋敷出土土器観察表	21	第10表	放射性炭素年代測定及び暦年較正 結果	90
第4表	栄町遺跡付近の遺跡	34	第11表	樹種同定結果	91
第5表	栄町遺跡発掘調査記録	36	第12表	栄町遺跡出土土器遺構別集計表	96
第6表	竪穴建物跡内の礫の石材	43	第13表	遺構間接合土器	99
第7表	栄町遺跡遺構観察表	85			

第1章 平成23年度埋蔵文化財保護事業

1 埋蔵文化財保護事業の概要

事務局の体制

平成23年度の安曇野市における埋蔵文化財保護事業は、教育委員会事務局文化課文化財保護係が担った。体制は次のとおりである。

事務局 安曇野市教育委員会事務局 文化課

原野 和徳（文化課長）、那須野 雅好（文化財保護係長）、逸見 大悟、土屋 和章（文化財保護係）

地理的環境と遺跡の立地

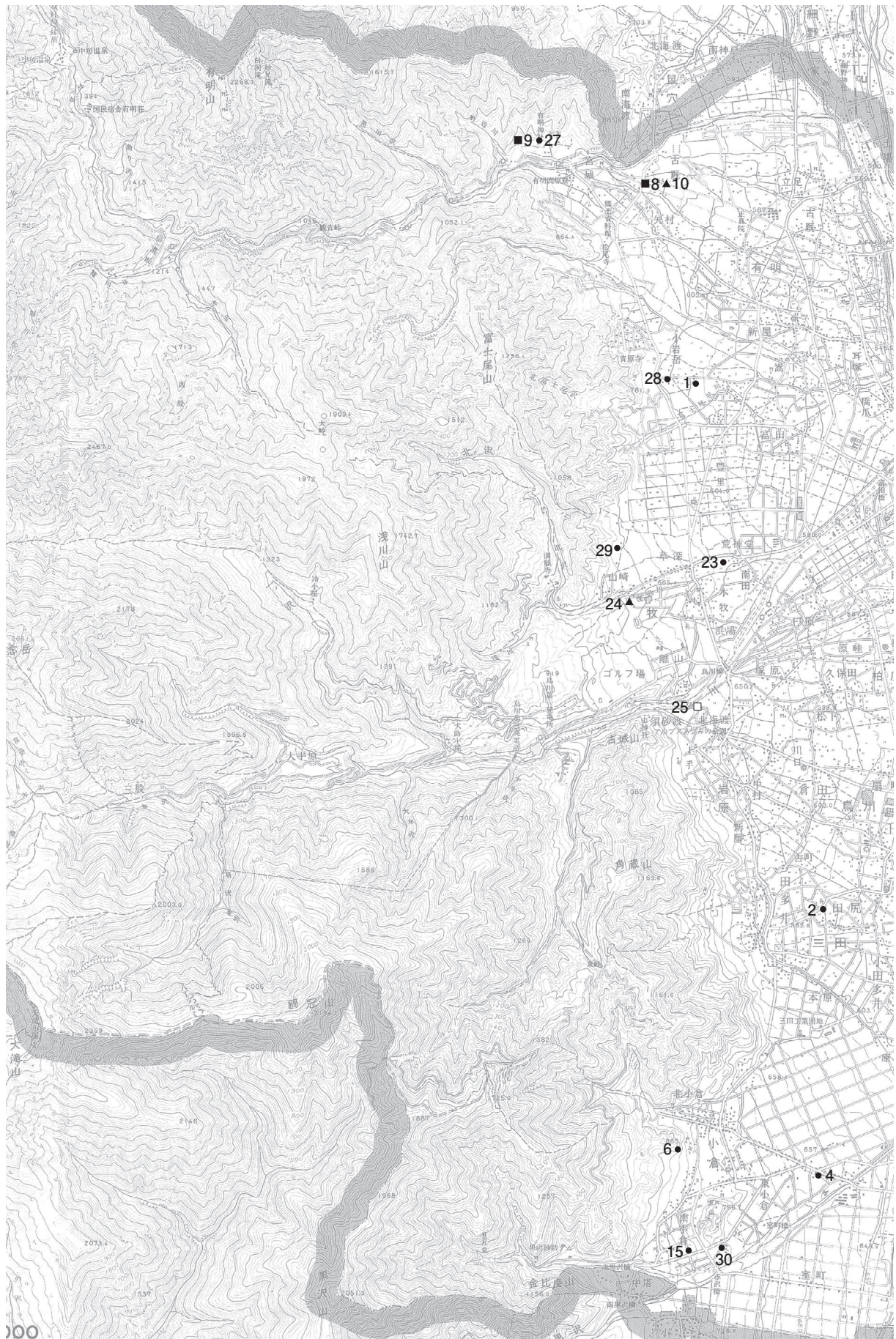
安曇野市は平成17年（2005）10月1日に豊科町・穂高町・三郷村・堀金村・明科町の5町村が合併して誕生した市で、長野県のほぼ中央部に位置し、北は大町市、松川村、池田町、生坂村、筑北村、南は松本市に隣接する。地形的には松本盆地の中ほどにあり、西は飛騨山脈、東は筑摩山地と接する。松本盆地は構造性の盆地で、縁辺部から流れるいくつもの河川が運搬した堆積物により形成されている。

安曇野市内に所在する遺跡は現在約400箇所が周知であり、時代としては縄文時代早期から現代に至る。縄文時代の遺跡は、主として北アルプス山麓の扇状地扇頂付近及び犀川以東の河岸段丘上に多く立地しており、過去の調査からは縄文中期に隆盛を極めたことがわかる。弥生時代になると遺跡数は減少し、集落の立地も扇状地扇端へ移る。生業形態の変化が遺跡立地の変化に影響している可能性が示唆され、この集落立地は基本的に現代まで踏襲されている。安曇野市では前・中期の古墳は現在までに確認されておらず、後期の群集墳が北アルプス山麓や明科地域に分布する。奈良時代以降は、前代までの立地を踏襲するように犀川以西の扇端と犀川以東の河岸段丘上に集落が営まれるなか、明科地域では明科廃寺と呼称される古代寺院の存在が確認されている。また、豊科田沢の山間部一帯から隣接する松本市域にかけて須恵器窯群が築かれている。

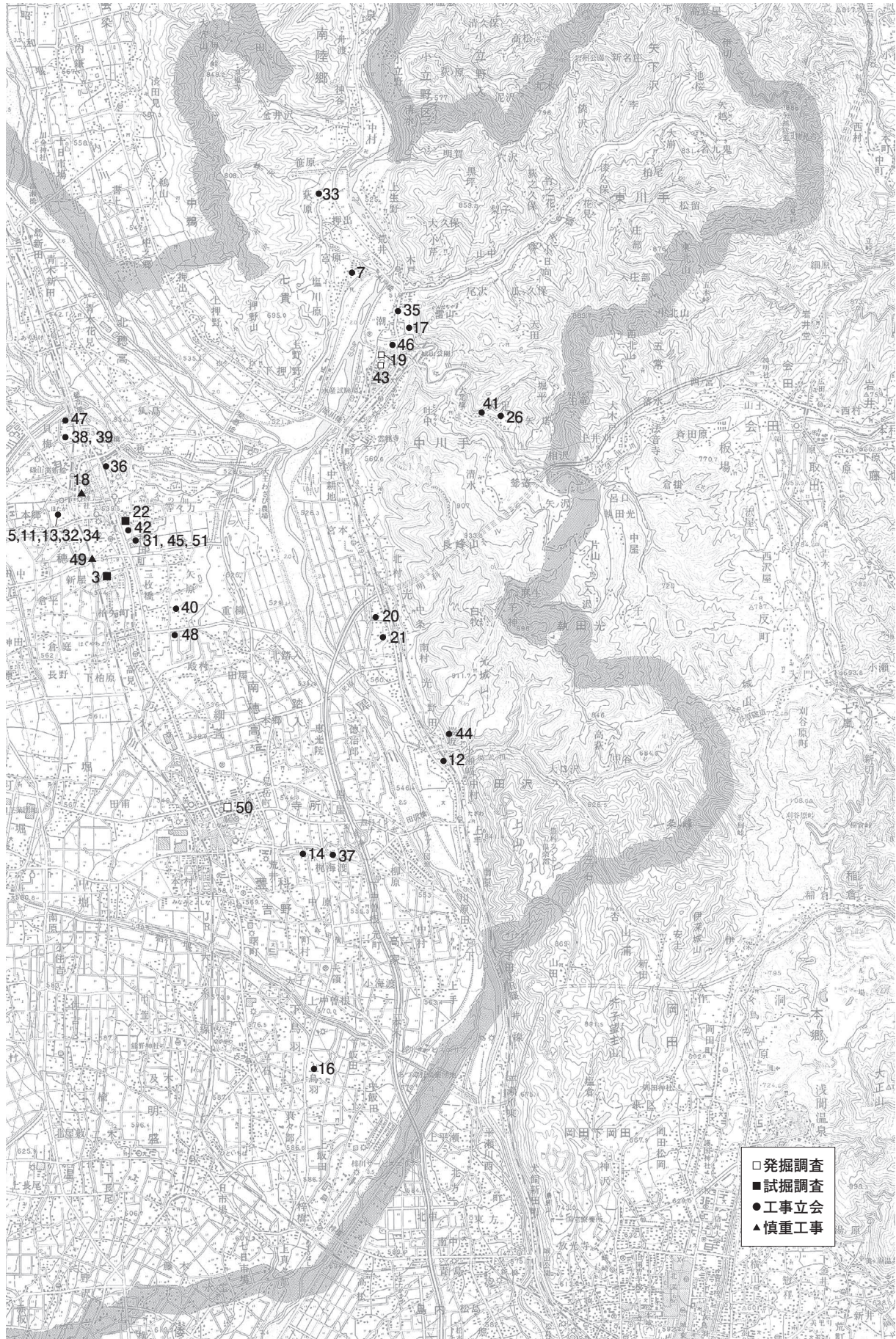
平成23年度の概要

平成23年度の安曇野市における埋蔵文化財保護措置の一覧は第1表のとおりである。安曇野市教育委員会の実施した発掘調査等は合計50件で、内訳は発掘調査3件、試掘調査4件、工事立会39件、慎重工事4件となっている。それぞれの位置は第1図に示す。試掘調査の概要は次項で取り上げた。

また、安曇野市教育委員会が調査主体となった埋蔵文化財保護事業のほかに、國學院大學文学部考古学研究室によって穂高古墳群 F9号墳の学術発掘が実施されている（吉田・中村編2012）。



第1図 平成23年度発掘調査等位置図 (1/75,000)



第1表 平成23年度発掘調査等一覧

No.	調査	遺跡	所在地	工事目的等	調査日_自	調査日_至
● 1	工事立会	小岩嶽下木戸遺跡	穂高有明 3121番 8	個人住宅	20110401	20110401
● 2	工事立会	なかじま遺跡	堀金三田 5235番	個人住宅	20110322	20110406
■ 3	試掘	追堀遺跡	穂高柏原 1700番 7 外 2 筆	宅地造成	20110407	20110407
● 4	工事立会	東小倉遺跡	三郷小倉 3927番	個人住宅	20110412	20110412
● 5	工事立会	宮脇遺跡	穂高 10110番 7	個人住宅	20110412	20110412
● 6	工事立会	遺跡外	三郷小倉 3360番 1 付近	公園造成	20110412	20110412
● 7	工事立会	みどりヶ丘遺跡	明科七貴 7327番	個人住宅	20110418	20110418
■ 8	試掘	穂高古墳群 A7号墳	穂高有明 7348番 1 外	道路	20110513	20110513
■ 9	試掘	野辺沢遺跡	穂高有明 7020番 1 外	その他開発	20110601	20110601
▲ 10	慎重工事	穂高古墳群 A7号墳	穂高有明 7348番38	道路	20110609	20110609
● 11	工事立会	宮脇遺跡	穂高 10110番19	個人住宅	20110610	20110610
● 12	工事立会	小瀬幅遺跡	豊科田沢 4895番	個人住宅	20110614	20110614
● 13	工事立会	宮脇遺跡	穂高 10108番 6	個人住宅	20110617	20110617
● 14	工事立会	梶海渡遺跡	豊科 3837番 8	個人住宅	20110621	20110621
● 15	工事立会	南松原遺跡	三郷小倉 5900番 3	個人住宅	20110627	20110627
● 16	工事立会	鳥羽遺跡	豊科 152番 2 外 2 筆	個人住宅	20110708	20110708
● 17	工事立会	新屋遺跡	明科東川手 638番 1	その他の建物	20110629	20110711
▲ 18	慎重工事	穂高神社境内遺跡	穂高 5964番 1	ガス・水道・電気等	20110713	20110713
□ 19	発掘調査	古殿屋敷	明科中川手 4232番 1	その他開発	20110705	20110715
● 20	工事立会	北村遺跡	明科光 544番外 1 筆	その他開発	20110725	20110725
● 21	工事立会	中条遺跡	明科光 803番 3	個人住宅	20110801	20110801
■ 22	試掘	北才の神遺跡	穂高 2535番 1 外 2 筆	店舗	20110808	20110808
● 23	工事立会	他谷遺跡	穂高牧 990番 7 外 1 筆	個人住宅	20110810	20110810
▲ 24	慎重工事	新林遺跡	穂高牧 1864番10	個人住宅	20110823	20110823
□ 25	発掘調査	穂高古墳群 F9号墳	穂高柏原 3653番	学術研究	20110820	20110829
● 26	工事立会	中沢古屋敷	明科中川手 6500番外 3 筆	その他の建物	20110906	20110906
● 27	工事立会	野辺沢遺跡	穂高有明 7020番 1	その他開発	20110902	20110914
● 28	工事立会	小岩嶽下木戸遺跡	穂高有明 3043番 1 先外	その他開発	20110914	20110914
● 29	工事立会	寺島畑遺跡	穂高牧 1652番16	個人住宅	20110926	20110926
● 30	工事立会	南松原遺跡	三郷小倉 6412番 1 外 3 筆	工場	20111026	20111026
● 31	工事立会	北才の神遺跡	穂高 2494番21	個人住宅	20111028	20111028
● 32	工事立会	宮脇遺跡	穂高 10104番 2	個人住宅	20111107	20111107
● 33	工事立会	荻原古屋敷跡	明科七貴 9779番 3 外 1 筆	個人住宅	20111108	20111108
● 34	工事立会	宮脇遺跡	穂高 10108番 3 外 1 筆	個人住宅	20111110	20111110
● 35	工事立会	浦田遺跡	明科東川手 680番 7	個人住宅	20111111	20111111
● 36	工事立会	等々力町巾上巾下遺跡	穂高 4572番 7	その他開発	20111121	20111121
● 37	工事立会	上木戸遺跡	豊科南穂高 302番 5 先外	道路	20111201	20111201
● 38	工事立会	貝梅道下遺跡	穂高 5307番 8 外 1 筆	個人住宅	20111206	20111206
● 39	工事立会	貝梅道下遺跡	穂高 5307番 8 外 4 筆	個人住宅	20111206	20111206
● 40	工事立会	正島遺跡	穂高 1049番13	個人住宅	20111214	20111214
● 41	工事立会	中沢古屋敷	明科中川手 6678番 1 外 6 筆	道路	20111214	20111214
● 42	工事立会	北才の神遺跡	穂高 2535番 1 外 2 筆	店舗	20111212	20111216

No.	調査	遺跡	所在地	工事目的等	調査日_自	調査日_至
□ 43	発掘調査	栄町遺跡	明科中川手 6824番38外6筆	その他の建物	20110818	20111222
● 44	工事立会	町田遺跡	豊科田沢 4674番外6筆	その他開発	20120117	20120117
● 45	工事立会	北才の神遺跡	穂高 2494番13	個人住宅	20120119	20120119
● 46	工事立会	潮神明宮前遺跡	明科東川手 520番3外10筆	道路	20111206	20120124
● 47	工事立会	貝梅道下遺跡	穂高 5009番1	集合住宅	20120124	20120131
● 48	工事立会	馬場街道遺跡	穂高 753番6	宅地造成	20110328	20120213
▲ 49	慎重工事	南原遺跡	穂高 6893番14先	鉄道	20120213	20120213
□ 50	発掘調査	法蔵寺館跡	豊科 5716番1外2筆	公園造成	20120302	20120302
● 51	工事立会	北才の神遺跡	穂高 2497番1外2筆	宅地造成、個人住宅	20101020	20120330

2 試掘調査等

おつほり 追堀遺跡 (第1表■3)

所在地	安曇野市穂高柏原1700番7外2筆
調査期間	平成23年(2011)4月7日
調査面積	9㎡
調査契機	宅地造成
概要	<p>今回の調査では宅地造成予定地に試掘トレンチを3箇所設定し、土層および遺構・遺物の検出を試みた。その結果、流れ込みによると考えられる土師器1点が、地表近くで確認されたが、この他に遺構等は存在せず地表下100~140cm付近で河床礫が一面に堆積していることが判明した。したがって本位置の開発にかかる本調査の必要はないと考えられる。</p>



第2図 追堀遺跡試掘位置図(1/2,500)

ほたかこふんぐん 穂高古墳群 A7号墳 (県塚) (第1表■8)

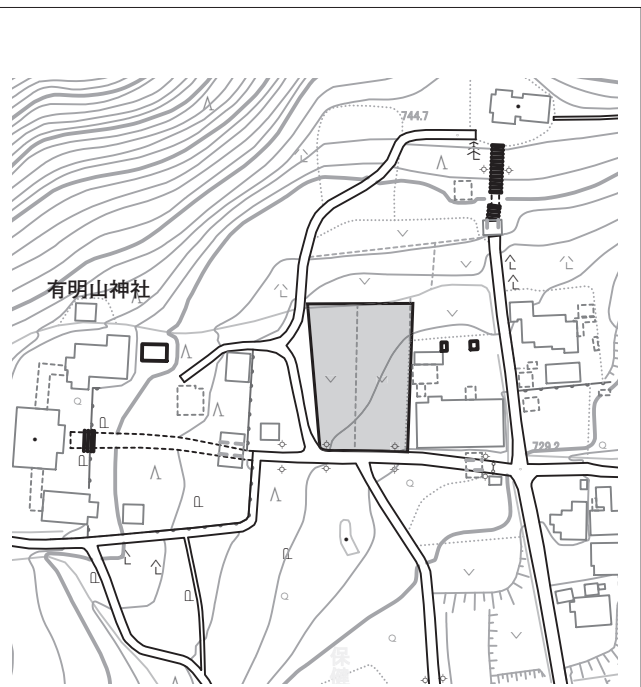
所在地	安曇野市穂高有明7348番1外
調査期間	平成23年(2011)5月13日
調査面積	31㎡
調査契機	道路、公園造成
概要	<p>今回の調査では道路・公園造成予定地に試掘トレンチを7箇所設定し、土層および遺構・遺物の検出を試みた。墳丘西側のAトレンチでは墳端の潜りこみを確認している。また、墳丘西側には径50cm以上の自然礫が多く、道路建設箇所に古墳関連遺構等が存在しないことが確認できた。この結果、道路部分については本調査の必要はないと考えられる。また、民間の公園予定地は今後掘削がなされるようであれば今回の試掘結果に基づく保護協議が必要である。</p>



第3図 穂高古墳群 A7号墳試掘位置図(1/2,500)

の べ さ わ
野辺沢遺跡 (第1表■9)

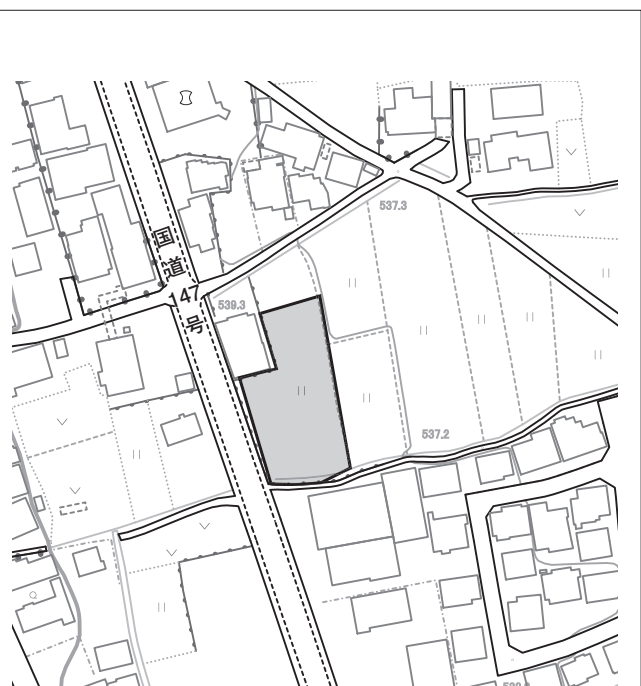
所在地	安曇野市穂高有明7020番1外
調査期間	平成23年(2011)6月1日
調査面積	16㎡
調査契機	その他開発(駐車場)
概要	<p>今回の調査では駐車場造成予定地に試掘トレンチを4箇所設定し、土層確認及び遺構・遺物の検出を試みた。この結果、開発予定地内南東のDトレンチ地表下150cm付近で時期不明の落ち込みが確認されたものの遺物は出土しなかった。ただし、付近から灰陶陶器片・土師器の小片が表面採集されたため周辺に古代の遺構等が存在する可能性がある。今回計画されているような、ほとんど掘削を伴わない駐車場造成で埋蔵文化財に影響を与える可能性は少ないと判断された。</p>



第4図 野辺沢遺跡試掘位置図 (1/2,500)

き た さ い か み
北才の神遺跡 (第1表■22)

所在地	安曇野市穂高2535番1の一部外2筆
調査期間	平成23年(2011)8月8日
調査面積	71㎡
調査契機	店舗
概要	<p>今回の調査では開発予定地に試掘トレンチを4箇所設定し、土層および遺構・遺物の検出を試みた。店舗建物計画位置のA、Bトレンチで3層(10YR3/4暗褐色シルト質粘土)から、駐車場計画位置西側のD地点で5層(10YR4/3黄褐色粘土質シルト)から少量の土器が出土している。周囲に遺構等の掘り込みは確認できなかった。これら土器類の出土深度はいずれも現地地表下100cm程度の位置である。特に南側で遺物の分布が濃いと考えられる。このため、この深度まで達する掘削を行う開発の場合は、保護協議が必要である。</p>

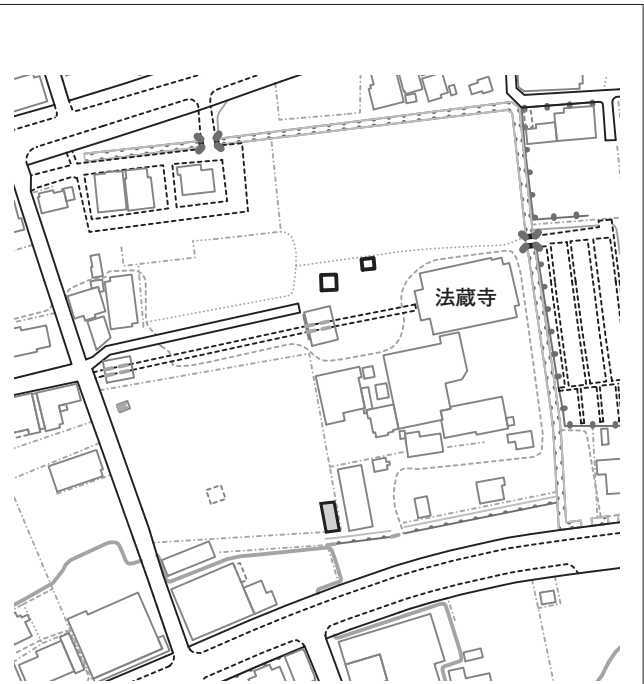


第5図 北才の神遺跡試掘位置図 (1/2,500)

ほうぞうじ やかたあと

法蔵寺館跡 (第1表□50)

所在地	安曇野市豊科5716番1外2筆
調査期間	平成24年(2012)3月2日
調査面積	5㎡
調査契機	公園造成
概要	<p>今回の調査では公園造成での掘削予定地に調査区を設定し、遺構・遺物の検出を試みた。この結果、開発予定深度である地表下約1m付近まではガラスや瓦片を多く含む近代以降の造成土であったが、一部分下方に3層としたしまりの強いシルト層が確認できた。この層は炭化物が若干量混入しており、礫はほとんど見られない。3層は近世以前にさかのぼる文化層となる可能性がある。これ以深は掘削しないため、今回の施工では埋蔵文化財は影響を受けない。</p>



第6図 法蔵寺館跡発掘位置図 (1/2,500)

第2章 古殿屋敷（第1次）発掘調査

1 調査の契機と経過

調査の概要

古殿屋敷（第1次）発掘調査

所在地	<small>ながのけんあづみのしあかしなながわて</small> 長野県安曇野市明科中川手4232番1
調査面積	24㎡
調査原因	その他開発（排水路）
発掘作業	平成23年7月5日～7月15日
整理作業	平成23年7月16日～平成25年3月31日

調査の契機と経過

この調査は安曇野市明科総合支所地域支援課による排水路布設にかかる緊急発掘調査で、事業主体者は安曇野市長宮澤宗弘氏である。今回の調査地は近年、安曇野市役所明科総合支所の駐車場として利用されていた。ここは排水に難があったため排水路を布設する目的で今回の開発事業が計画された。工事に伴う掘削計画は、延長28.4m、幅約1.2m、深度1mの計画で、浸透枘設置箇所のみ幅1.2m、深度1.25mとなるものである。

今回の開発地西の隣接地では平成22年（2010）に試掘調査を実施しており、このとき地表下約1m付近で古墳時代中期の遺構・遺物が確認されているため（安曇野市教育委員会2012、以下「教委」とする。）、今回の開発事業においても埋蔵文化財にある程度の影響を与える可能性を視野にいれ担当部署と保護協議を実施した。この結果、掘削面積が狭小であることから工事立会を念頭におき、平成23年（2011）5月31日付け「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知」（文化財保護法第94条第1項）が提出され6月6日付け安曇野市教育委員会の意見書を付して長野県教育委員会教育長あて進達された。これに対し、6月9日付け「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」で長野県教育委員会教育長から、この計画についての埋蔵文化財保護措置を工事立会とする旨の通知があったため、この通知に基づき施工にあわせて7月5日の午後から工事立会を開始した。調査地内南から排水路布設位置を掘削開始したが、予定の半分ほど掘削した時点で、微細な炭化物が混入するシルト層に遺構の可能性の高い堆積層を確認したため、明科総合支所地域支援課担当者及び施工業者と協議を実施、慎重に施工を進めながら平面形を検出することを目的として遺構であるか否かの確認を行った。部分的に拡幅して表土を除去しこの平面形を確認したところ、遺構である可能性が極めて高く工事によって破壊を免れない状況であることが判明したため、長野県教育委員会事務局文化財・生涯学習課と急遽保護協議を実施し、保護措置を記録保存に変更して同日から発掘調査を開始した。現場作業は7月15日まで行い、保存処理・整理作業は7月18日から平成25年（2013）3月まで断続的に実施し、本書を発行して全事業を終了した。

調査体制

調査主体 安曇野市教育委員会

調査担当者 那須野 雅好（文化課文化財保護係長、～平成24年9月）、山下 泰永（文化課文化財保護係長、平成24年10月～）、土屋 和章（文化課文化財保護係）

作業参加者 北林 節子、細尾 みよ子、松田 洋輔

事務局 安曇野市教育委員会事務局 文化課

原野 和徳（文化課長、平成23年度）、三沢 良彦（文化課長、平成24年度）

那須野 雅好（文化財保護係長、～平成24年9月）、山下 泰永（文化財保護係長、平成24年10月～）、逸見 大悟、土屋 和章（文化財保護係）

発掘作業・整理作業の経過

古殿屋敷（第1次）発掘調査における現場作業は、平成23年（2011）7月5日（火）から7月15日（金）にかけて実施し、調査面積は24㎡である。調査経過の詳細は調査日誌抄として記述する。現場作業に続いて、出土遺物の保存処理、遺物整理を平成23年（2011）7月18日（月）から開始し、平成25年（2013）3月まで断続的に継続した。

調査日誌抄

平成23年（2011）

- | | |
|---|---|
| 7月5日（火） 13:00から工事立会。電柱北で遺構検出。竪穴建物跡の可能性があるので必要最低限で拡張・精査、灰釉陶器・土師器・青銅鏡が出土する。県教委と電話で協議し、施工による埋蔵文化財への影響が深刻で破壊が不可避であるため、調査を急遽記録保存に切り替える。シートで養生。 | 氏による現地指導。 |
| 7月6日（水） 精査。遺構検出図、遺物出土状況図面作成開始。青銅鏡取り上げ。 | 7月11日（月） 週末雨天だったため、午前中いっぱい排水、現場復旧。午後は調査区外形実測。 |
| 7月7日（木） 遺物出土状況図面作成。 | 7月12日（火） 県教委平林彰主任指導主事による現地指導。遺構精査。夕方夕立で調査中止。 |
| 7月8日（金） 桐原健氏、笹本正治氏、原明芳 | 7月13日（水） 昨日の夕立で現場が水没したため、ほぼ一日現場復旧。夕方写真撮影。 |
| | 7月14日（木） 写真撮影。午後、三次元測量。 |
| | 7月15日（金） 写真撮影。測量確認後、遺物取り上げ。現場撤収 |

2 遺跡の位置と環境

地理的環境

古殿屋敷は長野県安曇野市明科中川手の明科地区に所在する。安曇野市明科地域は、犀川・穂高川・高瀬川の三川が合流する地点を有する松本盆地東縁辺の最低地であり、東方には山地が広がる。標高は海拔500～900mとなっており、大部分を占める低地性の山地と、犀川及び支流谷底部の低地からなっ

ている。古殿屋敷の所在する明科地籍は北を会田川^{あいだがわ}、西を犀川^{さいがわ}に画される南北約1 km・東西約0.5kmの河岸段丘上に展開しており、一帯は古殿屋敷のほか栄町遺跡^{さかえちよう}、龍門淵遺跡^{りゆうもんぶち}、県町遺跡^{あがたち}、明科廃寺、上郷遺跡等が密集して明科遺跡群を形成している。今回の発掘調査地はこの段丘面の北端に位置し、会田川に落ち込む段丘崖に臨む標高約530mの地点である。

歴史的環境

古殿屋敷の所在する安曇野市明科地域は松本盆地東縁部の北側とその東方に広がる山地からなっている。犀川によって形成された河岸段丘上では豊科田沢地区から明科南陸郷地区^{みなみりくこう}まで遺跡が断続的に確認されており、山間部には古墳や中世の山城などが築かれている。

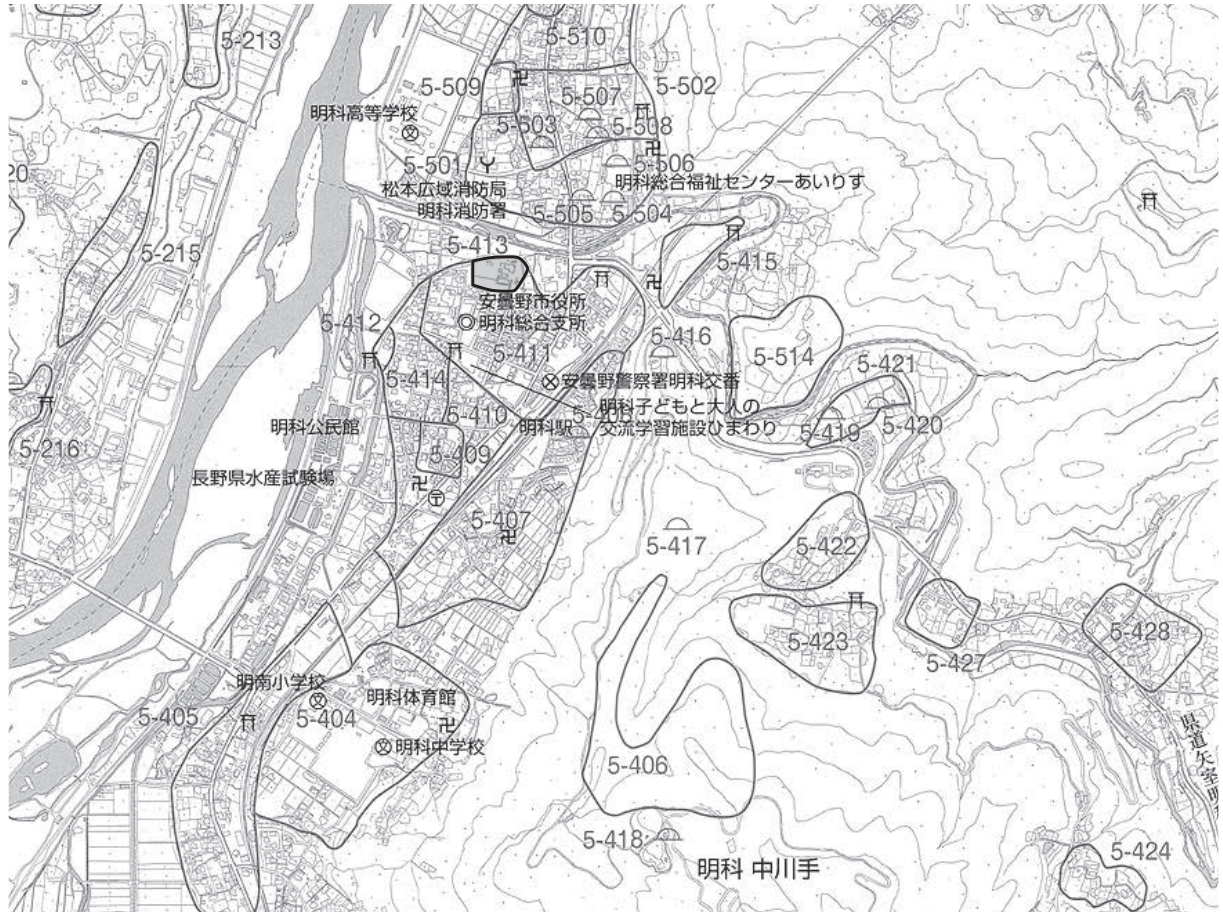
現在までに安曇野市内で旧石器時代の遺跡が発掘された例はないが、明科中川手の吐中遺跡^{とつちゆう}で昭和31年（1956）にオオツノシカの化石が不時発見された記録がある。確実に人々の生活を確認できるのは縄文時代以降で、明科地域ではこや城遺跡^{じよう}や上手屋敷遺跡^{わでやしき}などで縄文早期の押型文土器片、ほうろく屋敷遺跡で絡条体圧痕文土器が出土している。ほうろく屋敷遺跡は明科南陸郷に所在し集落が前・中期から後期まで継続する。明科町教育委員会による第1～4次の発掘調査によって石器製作址の可能性があると指摘されている（明科町教委2001）。また、明科光の北村遺跡^{ひかるきたむら}では、長野自動車道建設に先立つ発掘調査で中期後葉から後期にかかる時期の土壌墓から多量の人骨が確認された（長野県埋蔵文化財センター1993、以下「埋文センター」とする。）。晩期になると明科七貴の荒井遺跡^{ななきあらい}で浮線文が施された氷Ⅰ式段階の鉢形土器が採集されている（明科町史編纂会1984）。

弥生時代になると、ほうろく屋敷遺跡では再葬墓4群16基とそれに伴う土器30個体あまりが出土している（明科町教委1991）。また、犀川左岸段丘上のみどりヶ丘遺跡からは宅地造成に伴い発掘調査がなされて弥生中期の土器・石器が多量に出土している（太田・河西1966）。このとき集石遺構とされる礫群の中から多量の土器・石器が確認されており、変形工字文や磨消縄文が施文される土器群に太型蛤刃石斧や石庖丁が伴う。

明科地域では古墳時代後期の古墳が確認されている。特に潮地籍^{うしお}に分布する複数の古墳は潮古墳群としてまとまりがあり、発掘調査によって7～8世紀初頭に比定されている（明科町教委2005）。この時代の集落の様相は不明確な部分が多いが、潮地籍からは土師器壺が採集されており未発掘部分に古墳時代集落が存在する可能性がある。会田川より南の明科中川手では、昭和53年（1978）当時の明科町役場議会棟建設時に実施した栄町遺跡の発掘調査で6世紀後半に比定される住居跡が発掘されている（明科町史編纂会1984）。この住居跡は一辺5 mほどで直径15cm程度の川原礫を一面に敷き詰めた特異な遺構である。

奈良時代になると明科中川手で7世紀後半創建と考えられる寺院跡が確認されており、所在地から明科廃寺と呼ばれる。明科廃寺では平成11年（1999）に行われた発掘調査によって掘立柱建物跡3棟、布掘り基礎を持つ掘立柱建物跡1棟などに伴って多量の瓦が出土した（明科町教委2000）。昭和28年（1953）の発掘調査と併せて、古代瓦^{しび}のほか鴟尾や瓦塔が確認され県内で最も古い時期の寺院のひとつとして注目される。明科廃寺の造営期間については未だ詳らかでないが、補修瓦の様相などから平安時

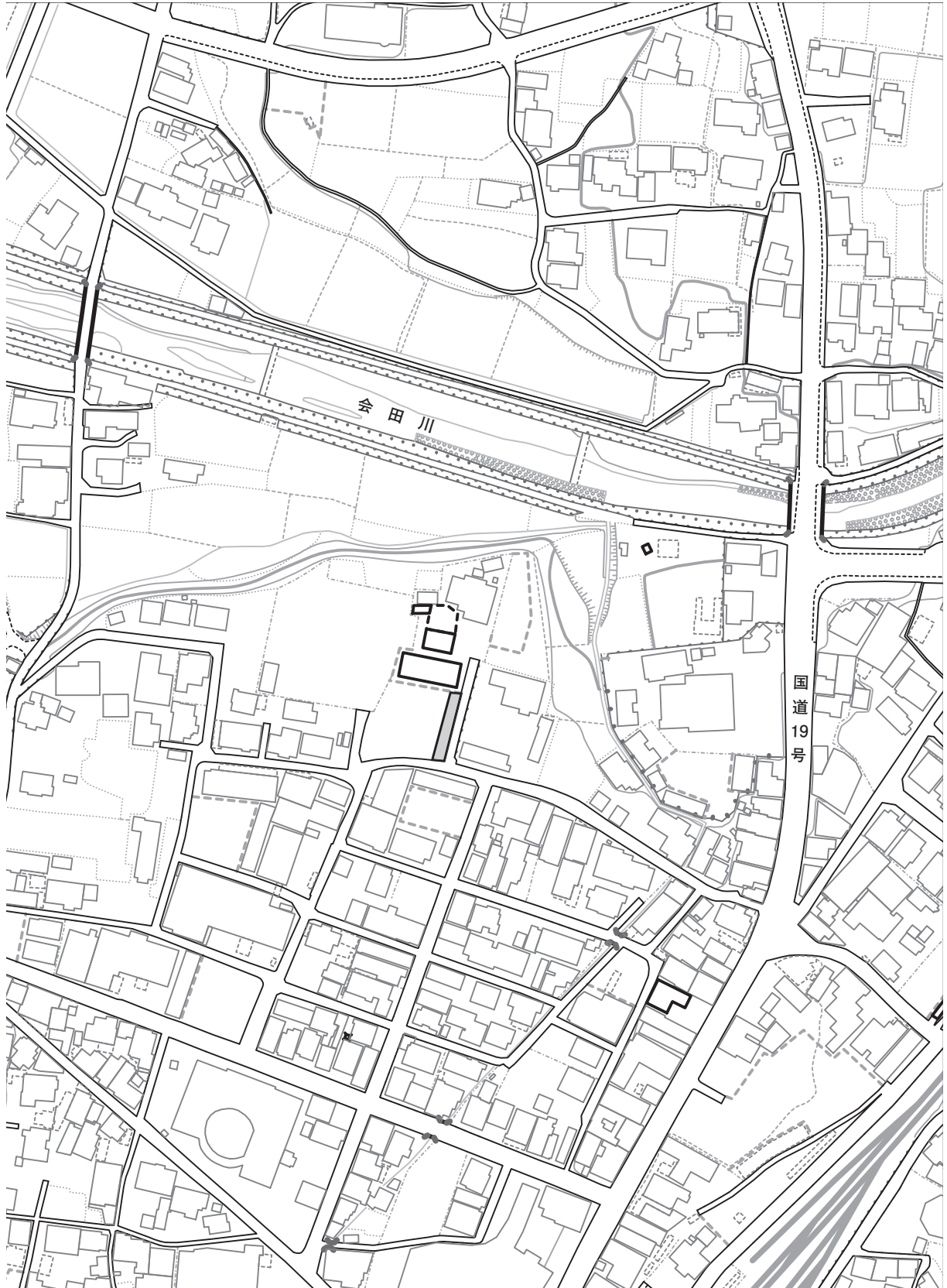
第2章 古殿屋敷（第1次）発掘調査



第7図 古殿屋敷付近の遺跡（1/17,500）

第2表 古殿屋敷付近の遺跡

番号	遺跡名	主な時代	種別	番号	遺跡名	主な時代	種別
5-213	孫五郎屋敷	縄文	散布地	5-422	吐中遺跡	縄文	散布地
5-215	上野遺跡	縄文・古代・中世・近世	散布地	5-423	城下遺跡	縄文	散布地
5-216	やしき遺跡	縄文・古代・中世・近世	散布地	5-424	海渡遺跡	中世	城館跡
5-404	上手屋敷遺跡	縄文・古代・中世・近世	集落跡	5-425	光久寺	中世	社寺跡
5-405	町屋敷遺跡	中世・近世	集落跡	5-426	清水古屋敷	中世	城館跡
5-406	塔ノ原城址	中世・近世	城館跡	5-427	平上ノ段館	中世	城館跡
5-407	明科遺跡群上郷遺跡	縄文・古代	散布地	5-428	中沢古屋敷	中世	城館跡
5-408	明科遺跡群上郷古墳	古墳	古墳	5-501	潮遺跡群潮神明宮前遺跡	古代	集落跡
5-409	明科遺跡群明科廃寺	古代	社寺跡	5-502	潮遺跡群新屋遺跡	古代	散布地
5-410	明科遺跡群県町遺跡	古代	集落跡	5-503	金山塚1号墳	古墳	古墳
5-411	明科遺跡群栄町遺跡	古代	集落跡	5-504	金山塚2号墳	古墳	古墳
5-412	明科遺跡群龍門淵遺跡	弥生・古墳	その他（祭祀）	5-505	金山塚3号墳	古墳	古墳
5-413	明科遺跡群古殿屋敷	古墳・平安・中世・近世	城館跡	5-506	金山塚4号墳	古墳	古墳
5-414	明科遺跡群本町遺跡	弥生・古代	集落跡	5-507	金山塚5号墳	古墳	古墳
5-415	こや城	縄文・古代・中世・近世	集落跡・城館跡	5-508	お経塚古墳	古墳	古墳
5-416	能念寺1号墳	古墳	古墳	5-509	潮遺跡群古屋敷遺跡	古代・中世・近世	城館跡
5-417	能念寺2号墳	古墳	古墳	5-510	潮遺跡群浦田遺跡	古代・中世・近世	散布地
5-418	能念寺3号墳	古墳	古墳	5-511	潮遺跡群古殿屋敷	中世・近世	城館跡
5-419	武士平遺跡	古墳・中世・近世	散布地	5-512	潮遺跡群塩田若宮遺跡	縄文・古代	集落跡
5-420	武士平1号墳	古墳	古墳	5-513	潮遺跡群三五山遺跡	縄文	散布地
5-421	武士平2号墳	古墳	古墳	5-514	潮遺跡群茶白山遺跡	縄文・中世・近世	城館跡・散布地



第8図 発掘調査位置図（1／2,500）

代までは同地で存続していたものと考えられている。奈良・平安時代は明科地域全域で集落が確認される時期でもあり、開発が広範囲に及んでいったといえる。

明科地域には中世の城館跡が多く残されており、このうち、こや城遺跡、茶臼山遺跡、^{ちやうすやま} 上手屋敷遺跡、^{わ で やしき} 塔ノ原城址^{とうのはらじょうし}などで遺物の出土がある。このうち塔原氏居館跡^{とうのはらし}とされる上手屋敷遺跡は平成元年（1989）と平成15年（2003）に発掘調査が実施され、内耳土器や青磁碗のほか安山岩製の宝篋印塔相輪などが出土した（明科町編纂会1984、明科町教委2004）。

古殿屋敷の概要

古殿屋敷は現在住宅地となっており、今回まで本格的な発掘調査が実施されたことはなかった。字名由来等から中近世の城館として遺跡台帳に登録されていたが、現況では堀及び土塁等の区画施設を確認することはできず、近年は開発事業の際に工事立会等で埋蔵文化財の存否を観察する程度であった。

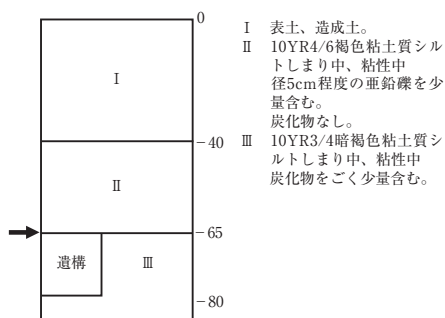
平成22年度には本遺跡において開発事業が計画され、埋蔵文化財の存在状況が不明確であったため試掘調査を実施、この結果地表下約1 m付近から古墳時代中期の土器及び遺構の存在が確認された（安曇野市教委2012）。保護協議の結果、このとき計画された開発事業による掘削範囲及び深度では遺構に影響を与えないことが確認され、記録保存のための調査は不要で現状保存となっている。

3 調査の方法と成果

発掘調査

排水路布設に伴う工事立会の際に遺構が確認され、工事での掘削によって埋蔵文化財への影響が不可避であるため、安曇野市明科総合支所地域支援課及び施工業者、長野県教育委員会事務局文化財・生涯学習課文化財係と協議を実施し確認された遺構の範囲について発掘調査を実施して遺跡の記録保存をはかる方向となった。

本調査は平成23年（2011）7月5日から7月15日にかけて実施した。工事立会から記録保存に急遽変更した調査であったため、任意の基準点を設け記録をとりながら精査し、後日測量業者によって現場観測、三次元レーザー測量を実施した。表土除去については、排水路布設のために稼動していた重機を用いて遺構面直上までの造成土・堆積土を除去し、遺構検出を人力で行った。遺構精査は、4分割して掘り下げを行った。遺物の取り上げは遺構内にまとまって埋納された状態であったため簡易遺方測量によ



第9図 基本層序

って記録して取り上げた。遺構測量は任意に設定した基準点をもとに20分の1、10分の1の縮尺で調査員・作業員が現場実測を行っている。記録写真は現場・整理ともに主としてデジタルカメラを使用した。

なお、調査時に設定した任意の基準点 T1・T2については、後日国家座標を求めた。

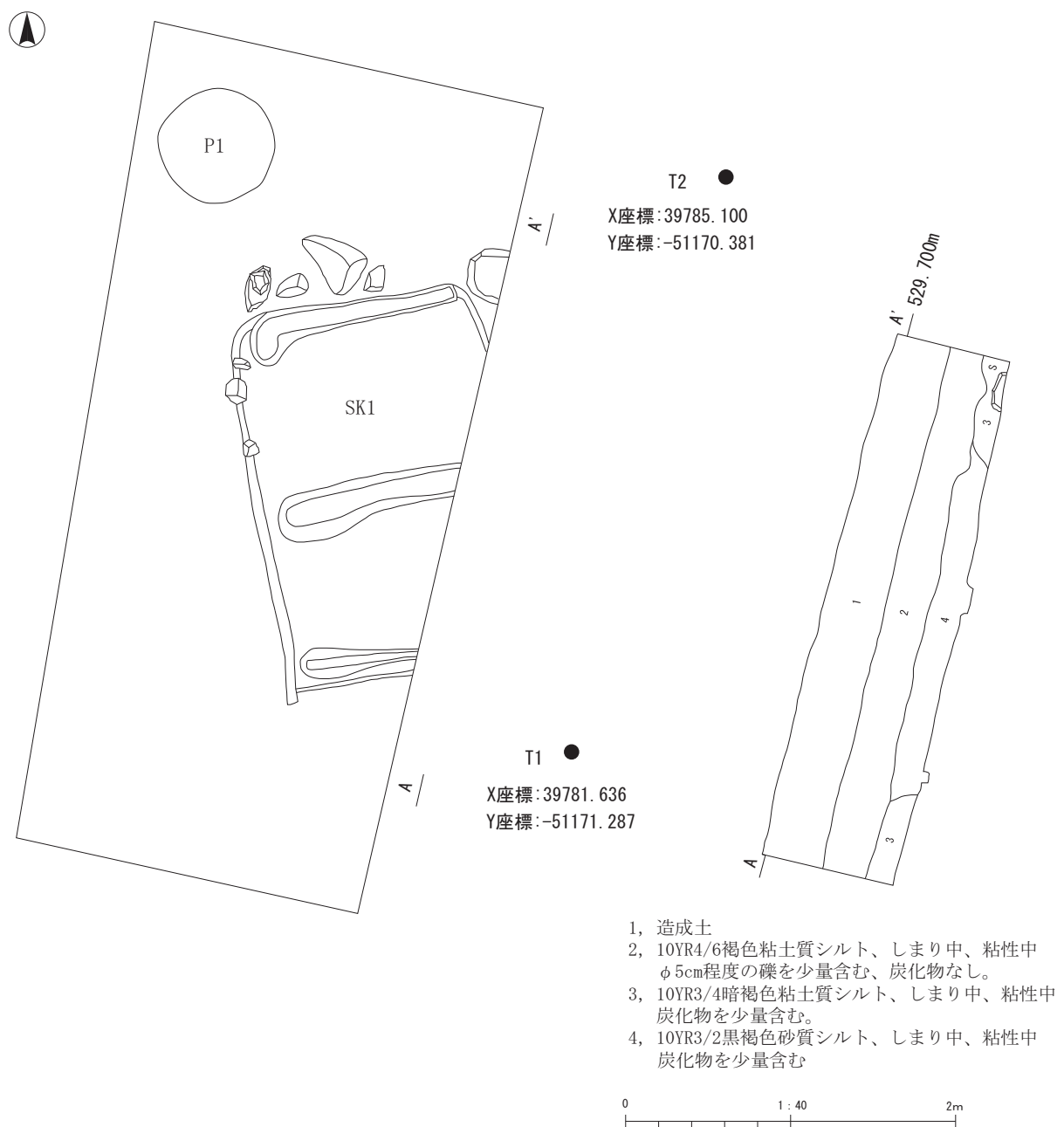
T1 : (X=39781.636 Y = -51171.287)

T2 : (X=39785.100 Y = -51170.381)

層序

古殿屋敷（第1次）発掘調査の基本層序は第9図に示したとおりである。今回の調査地は調査時に駐車場として利用されており、地表面から40cm程度まではⅠ層とした造成土であった。この下にはⅡ層として褐色粘土質シルト層が堆積しており、さらに下位にⅢ層として暗褐色粘土質シルト層が観察された。今回精査した木棺墓はこのⅢ層上面で検出した。

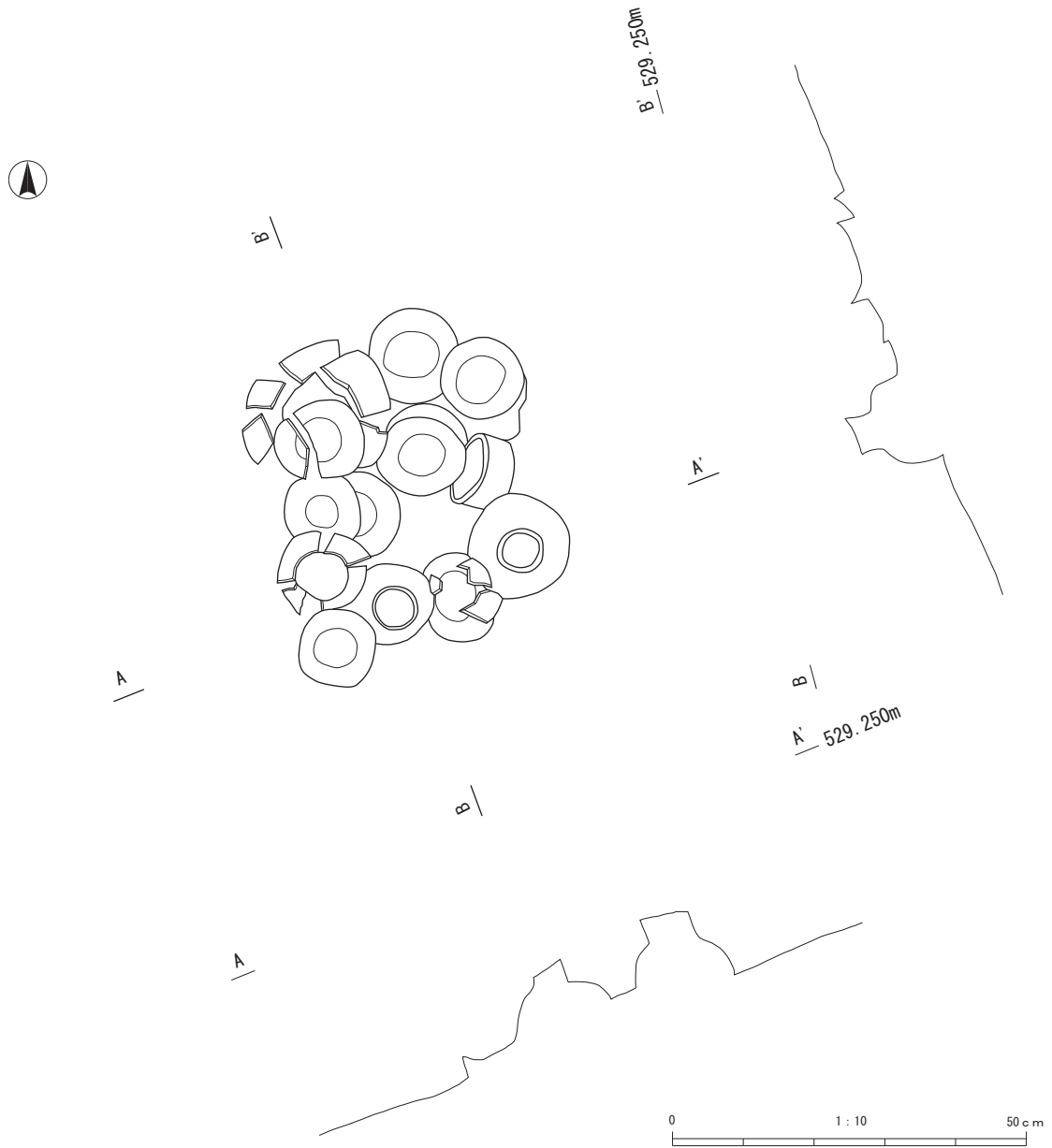
調査地東側は道路を挟んで落差の小さな急崖となっており、調査前は人工的な地形の可能性が高いと考えていたが、調査における土層観察の結果、自然地形が残存していることがわかった。



第10図 調査区全体図



第11図 SK1



第12図 SK1遺物集中区

4 遺構と遺物

今回の調査で確認された遺構は平安時代の木棺墓とピットである。このうち木棺墓は今回の施工による破壊が不可避であるため、緊急的に記録保存を実施した。また、ピットは今回の工事で破壊される可能性がないため、掘削せずに現状保存として埋め戻した。

SK1

今回の調査の契機となったのは平安時代に比定される木棺墓である。工事立会時にこの遺構の南西隅を検出したため、精査したことで明らかになった。遺構確認面はⅡ層形成以前にある程度の削平をうけていると考えられる。床面までの堆積土の厚さは10cm程度であり、実際の掘り込みはもっと深かったと想定されるためである。

平面形は長方形を呈し長軸2.3m、短軸1.6mを測り、長軸方向はN 8° Wを指す。SK1西南隅は木棺の側面板と小口面の板材を組み合わせたと考えられる痕跡が確認され、側面の材に小口面の材が支えられる形となることが確認できた。

また、遺構外北側には大小9個ほどの角礫が確認できた。この遺構の所在地が洪水などの河川作用による堆積を受けた痕跡がないこと、礫面が摩滅しておらず大きさも方向も一様でないこと等から人為的に設置された或いは人為的に設置された後で僅かに移動した可能性が高いと考えられる。

層序は全1層を確認した。この層は黒褐色砂質シルト層で炭化物を少量含む。前記のとおり層厚は10cm程度であり木棺墓としては浅いため、Ⅱ層堆積時以前にある程度の削平があったと考えられる。なお、この層では部分的にごく微量の骨片も観察されたが、微小であることに加え土壌化しており採取することができなかった。

遺構完掘状況については第11図のとおりである。4層を除去したところ、底面には長軸に直行する形で3箇所筋状に深く段がついていることがわかった。それぞれの幅は20cm前後であり、北中南とほぼ等分に確認されたことから、木棺墓の下で棺を支える枕木の痕跡の可能性が高い。

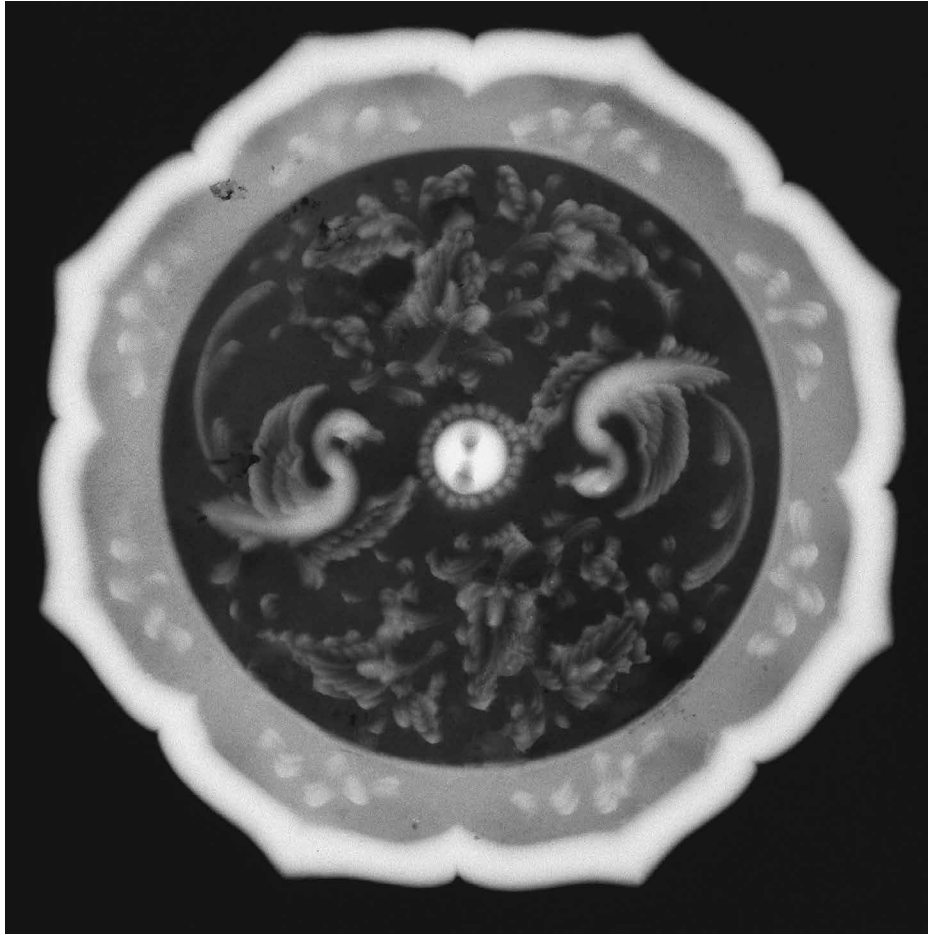
遺物は遺構プラン西端に沿って、北端から約30cm付近に陶器・土器類が集中して埋納されていた。これに加え、北端から約40cm付近の遺構中軸線上に青銅製の八稜鏡が鏡面を上にする形で埋納されていた。土器類は全部で15個体確認され、一辺約50cmの正方形に収まる出土範囲である。このことから、当初は何らかの有機質の容器に納められていた可能性が示唆される。八稜鏡取り上げ時には、下に向いていた鏡背に密着して漆が塗布されたサワラの板が出土した。また、この周囲には漆膜が土中に多く混入していたため、土壌ごと現場から採取し保存処理施設にて漆膜を土壌から選別した。板材は青銅鏡と圧着していたため鏡背の文様が陰刻された状態である。

SK1から出土した八稜鏡は径12.0cm、縁厚0.5cm、紐厚0.5cm、重量161.5gを測る。前記のとおり、この八稜鏡の鏡背には漆膜の付着したサワラの板が密着した状態で出土しており、漆塗りの箱等に格納されて埋葬された可能性が高い。外面は八稜形を呈し、鏡面は平坦である。鏡背の約半分を緑青が覆っているが、全体的に文様は鮮明であった。内区は上下に瑞花を配し、双鳥を内側に向かって点対称に対



0 1:1 5cm

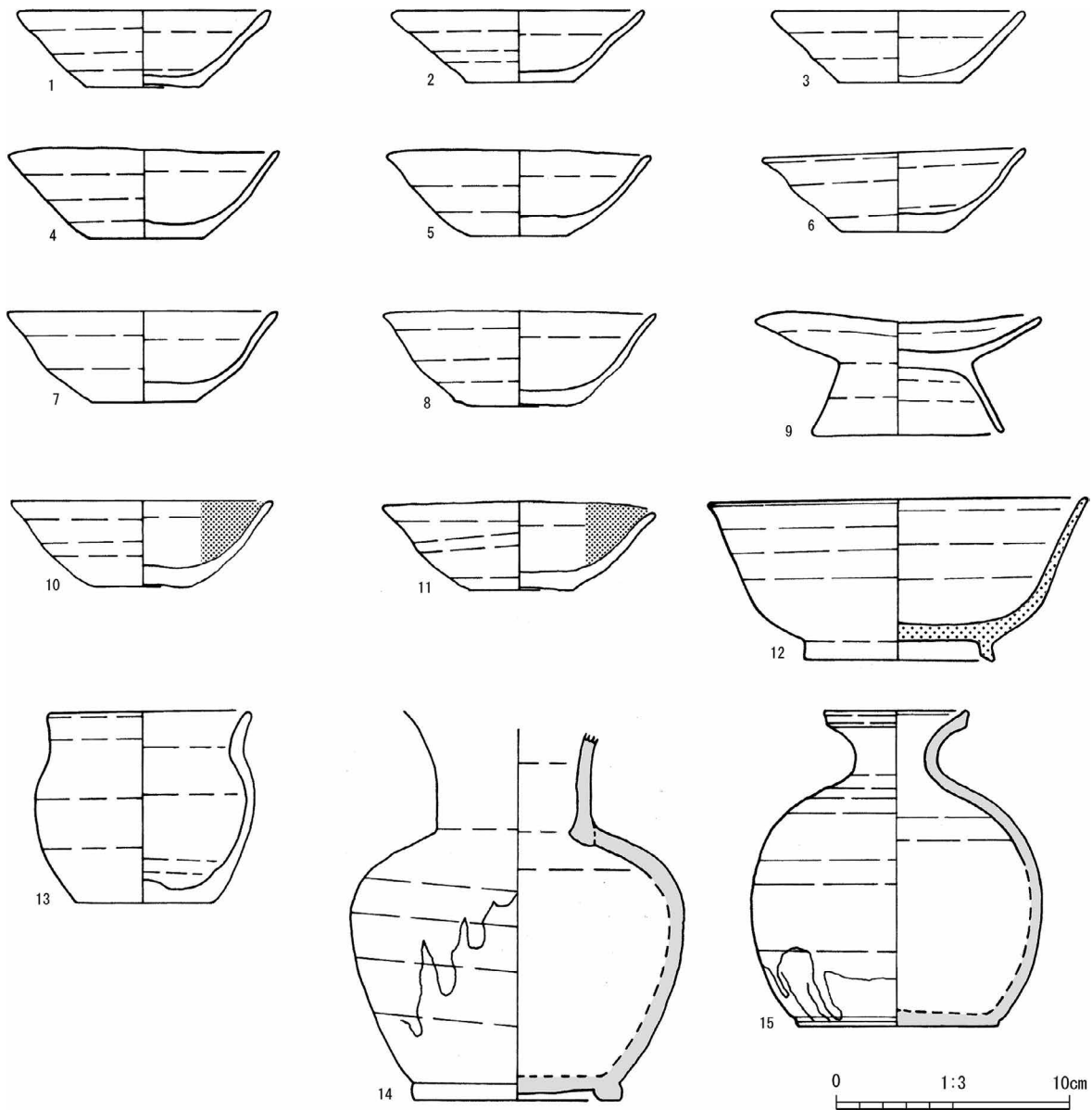
第13図 瑞花双鳥八稜鏡



第14図 八稜鏡エックス線写真（100%）



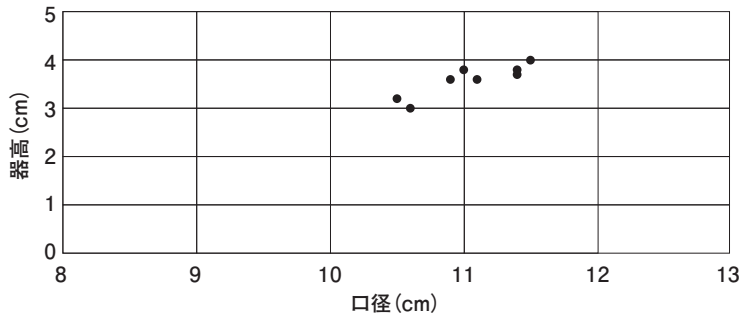
第15図 木材（67%）



第16図 SK1出土土器

第3表 古殿屋敷出土土器観察表

No.	遺構名	種別	器種	残存部位	口径 (cm)	頸部径 (cm)	最大径 (cm)	最大径 部位	底径 (cm)	器高 (cm)	技法の特徴		
											外面調整	内面調整	底部
1	SK1	土師器	坏	口縁～底部	10.5	-	10.5	口縁	4.8	3.2	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り
2	SK1	土師器	坏	口縁～底部	10.6	-	10.6	口縁	4.6	3.0	ロクロナデ	不明	回転糸切り
3	SK1	土師器	坏	口縁～底部	10.6	-	10.6	口縁	5.2	3.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り
4	SK1	土師器	坏	口縁～底部	11.0	-	11.0	口縁	4.6	3.8	ロクロナデ	不明	糸切り
5	SK1	土師器	坏	口縁～底部	11.1	-	11.1	口縁	4.2	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り
6	SK1	土師器	坏	口縁～底部	11.4	-	11.4	口縁	4.3	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
7	SK1	土師器	坏	口縁～底部	11.4	-	11.4	口縁	4.4	3.8	不明	不明	不明
8	SK1	土師器	坏	口縁～底部	11.5	-	11.5	口縁	4.6	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り
9	SK1	土師器	盤	口縁～底部	12.0	5.6	12.0	口縁	8.1	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ
10	SK1	黒色土器	坏	口縁～底部	10.9	-	10.9	口縁	4.0	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り
11	SK1	黒色土器	坏	口縁～底部	11.4	-	11.4	口縁	4.4	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り
12	SK1	緑釉陶器	椀	口縁～底部	16.0	-	16.0	口縁	8.0	6.9	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り
13	SK1	土師器	小型甕	口縁～底部	8.6	8.2	9.2	体部	5.8	8.1	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り
14	SK1	灰釉陶器	広口瓶	頸部～底部	不明	6.4	14.0	体部	8.8	(16.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り+ナデ
15	SK1	灰釉陶器	小瓶	口縁～底部	6.0	3.4	12.2	体部	8.4	13.3	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り



第17図 SK1出土坏類口径・器高分布

峙させている。このことから本鏡は瑞花双鳥八稜鏡と呼ぶことができる。紐孔の穿孔方向は八稜形及び文様のいずれの軸にも合致しないこと、内区文様に比較して外区文様が不鮮明なことから、本鏡では踏み返しが行われたことが判明した。

本遺構から出土した土器類は土師器坏、盤、小型甕、黒色土器 A 坏、灰釉陶器瓶類、緑釉陶器碗から構成される。このうち坏類について、口径・器高の法量分布を第17図に示した。坏10個体について、口径は11.0cm前後1cm、器高は3.0~4.0cmの範囲に分布し定型的であるといえる。土師器及び黒色土器の坏類はロクロ成形され、調整は基本的にロクロナデである。黒色土器の内面はヘラミガキはなされず、ロクロナデで調整される。また、土師器・黒色土器 A とともに底部には糸切りの痕跡が確認できる。

盤は土師器で口径12.0cm、器高5.0cmを測る。吉田川西遺跡ではSB94段階の出現とされる（長野県埋文センター1989）。この器形は大小二つの法量が認められるが出現期には不安定であるとされる。古殿屋敷の盤は坏部が浅く、高台が高い器形である。

小型甕はロクロ成形で調整にロクロナデを残す。口径8.6cm、器高8.1cmで口縁部は軽く外反し底部に糸切り痕跡が残る。

灰釉陶器の瓶類は2点が埋納されていた。14は広口瓶で口縁部は施工の際に欠損している。この土器が本遺構確認の端緒となったものである。このため口径は不明だが残存する器高は16.7cm、底径は8.8cmを測り、高台の内側には回転糸切り後にナデ調整を施したことが観察できる。ロクロ成形の頸部から胴部にかけて釉がかかる。15は小瓶で口径6.0cm、底径8.4cm、器高13.3cmを測る。水平方向に丁寧なロクロ目が観察でき、頸部から胴部にかけて釉がかかる。底部にはヘラ切りの痕跡が観察できる。

緑釉陶器は口径16.0cm、器高6.9cm、底径8.0cmで器形は体部下半がやや張る碗形を呈す。胎土はやや灰色がかかった白色で焼成は軟質で、器面はロクロナデのみで調整されている。釉はあまり濃くない緑色の色調で艶があるが、剥げやすく内外面ともに剥落が顕著である。施釉は器のほぼ全体に及んでいるが、底部裏面の付け高台内側のみ生地が見え回転糸切り痕跡が見えている。全体的に磨耗しており、特に高台端部は激しい。このことから、実際に使用された器である可能性が高い。このような特徴をもつ緑釉陶器は吉田川西遺跡での分類でc類となる。

以上の特徴から、本遺構出土土器群の編年的位置は吉田川西遺跡 SB94段階（松本平古代10期）と考えられる。

5 自然科学分析

古殿屋敷（第1次）発掘調査では、青銅鏡を納めたと考えられる木質容器の材及びこの材に付着していた塗膜を採取し、自然科学的手法によって樹種同定及び赤外分光分析、薄片作製・観察を実施した。

明科遺跡群古殿屋敷出土遺物の自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

1 試料

試料は、明科遺跡群古殿屋敷の発掘調査で検出された平安時代（10世紀後半）の墓坑の可能性のある遺構より出土した銅鏡を納めた箱材と、箱材に伴って出土した塗膜片である。本分析では箱材に利用された木材の樹種、塗膜片の漆の判定および塗膜構造の検討を目的として、自然科学分析を実施した。

分析に供した試料は、箱材として採取された複数の木片試料より選択した木片1点（長さ5cm、幅5mm、厚さ2mm程度）と、塗膜片が混じる灰色泥（湿重約47g）から水洗選別により抽出した塗膜片1点（第18図）である。

2 分析方法

(1) 樹種同定

試料の木取りを観察した上で、剃刀を用いて木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本と比較して種類を同定する。木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）や Richter 他（2006）を参考にする。

(2) 赤外分光分析

a) 赤外線分光分析の原理

有機物を構成している分子は、炭素や酸素、水素などの原子が様々な形で結合している。この結合した原子間は絶えず振動しているが、電磁波のようなエネルギーを受けることにより、その振動の振幅は増大する。この振幅の増大は、その結合の種類によって、ある特定の波長の電磁波を受けたときに突然大きくなる性質がある。この時に、電磁波のエネルギーは結合の振動に使われて（すなわち吸収されて）、その物質を透過した後の電磁波の強度は弱くなる。

有機物を構成している分子における結合の場合は、電磁波の中でも赤外線の領域に入る波長を吸収する性質を有するものが多い。そこで、赤外線の波長領域において波長を連続的に変えながら物質を透過させた場合、さまざまな結合を有する分子では、様々な波長において、赤外線の吸収が発生し、いわゆる赤外線吸収スペクトルを得ることができる。通常、このスペクトルは、横軸に波数（波長の逆数 cm^{-1} で示す）、縦軸に吸光度（ABS）を取った曲線で表されることが多い。したがって、既知の物質において、どの波長でどの程度の吸収が起こるかを調べ、その赤外線吸収スペクトルのパターンを定性的

に標準化し、これと未知物質の赤外線吸収スペクトルのパターンとを定性的に比較することにより、未知物質を同定することも可能である（山田，1986）。

b) 赤外線吸収スペクトルの測定

微量採取した被膜物質をダイヤモンドエクスプレスにより加圧成型した後、顕微 FT-IR 装置（サーモエレクトロン（株）製 Nicolet Avatar 370, Nicolet Centaurus）を利用し、測定を実施した。なお、赤外線吸収スペクトルの測定は、作成した試料を鏡下で観察しながら測定位置を絞り込み、アパーチャでマスキングした後、透過法で測定した。得られたスペクトルはベースライン補正などのデータ処理を施した後、吸光度（ABS）で表示している。測定条件及び各種補正処理の詳細については、FT-IR スペクトルと共に図中に併記している。

(3) 薄片作製・観察

塗膜片を合成樹脂で包埋し、樹脂を固化させる。塗膜片の断面が出るように切断し、切断面を研磨する。研磨面をスライドガラスに接着した後、反対側も切断と研磨を行ってプレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡、落射蛍光顕微鏡、偏光顕微鏡で構造や混和物を観察する。

3 結果

(1) 樹種同定

箱材に由来する木片は、針葉樹のサワラに同定された。以下に、同定された分類群の解剖学的特徴等を記す。

・サワラ (*Chamaecyparis pisifera* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～スギ型で、1分野に1-3個。放射組織は単列、1-10細胞高。

(2) 赤外分光分析

FT-IR スペクトルを第18図に示す。また、第18図には比較資料として漆と炭化材の実測スペクトルを併記した。塗膜片の赤外線吸収特性は、 3400cm^{-1} 付近の幅広い吸収帯のほか、 2930cm^{-1} 、 2860cm^{-1} 、 1590cm^{-1} 、 1420cm^{-1} 、 1080cm^{-1} 付近の強い吸収帯、および 1700cm^{-1} 、 1310cm^{-1} 、 1280cm^{-1} 付近の吸収帯によって特徴付けられる。

(3) 薄片作製・観察

木地の上には、下地（約 $40\mu\text{m}$ ）と1層の漆層（約 $60\mu\text{m}$ ）が認められる。下地は透過光で黒色不透明、落射蛍光では微細な粒子が密集する。粒子は、植物組織は認められない。また、偏光顕微鏡に反応しないことから、少なくとも鉱物粒ではないと考えられるが、由来は不明である。下地の上には、透過光で赤褐色、落射蛍光で黄褐色の漆層が1層認められる。保存状態が悪いが、観察した範囲では混和物が認められないことから、混和物の無い透明漆と判断される。

4 考察

平安時代（10世紀後半）の墓坑とみられる遺構から出土した箱材は、針葉樹のサワラに同定された。また、分析に供した木片は、加工面とみられる平滑面が柾目であったことから、柾目板状の部材に由来する可能性がある。

箱材に利用されたサワラは、ヒノキに近い仲間であり、木理は通直で割裂性や耐水性に優れ、加工が容易である。特に分割加工が容易であることから、箱の部材に利用されたと推定される。本地域では、10世紀代の木製品について樹種を明らかにした例が少なく、長野県内においても当該期の木材利用については資料が少ない。その中で、石川条里遺跡（長野市）では、曲物や指物部材、祭祀具などにヒノキやサワラが比較的多く認められており（能城・鈴木，1997）、板状加工を施す木製品に利用されるという傾向がうかがえる。

塗膜片は、薄片観察では微細な粒子が密集する下地と混和物のない漆層が観察された。したがって、下地の混和物によって表面が黒色を呈する漆塗膜片と判断される。赤外分光分析では 3400cm^{-1} 付近の幅広い吸収帯のほか、 2930cm^{-1} 、 2860cm^{-1} 、 1590cm^{-1} 、 1420cm^{-1} 、 1080cm^{-1} 付近の強い吸収帯、および 1700cm^{-1} 、 1310cm^{-1} 、 1280cm^{-1} 付近に吸収帯を確認した。 2930cm^{-1} 、 2860cm^{-1} 付近の脂肪族飽和炭化水素に帰属する吸収帯は、漆の標準資料に認められる吸収帯であることから、薄片の観察所見を支持する。一方、その他の吸収帯では、 3400cm^{-1} 及び 1590cm^{-1} 、 1420cm^{-1} 付近の吸収が強く現れており、よく似たパターンとしては炭化材があげられる。ただし、下地の微細な粒子は、薄片観察では粒子が細かく、植物組織も全く認められなかったため、いわゆる炭粉の可能性は低い。おそらく、微細な粒子が

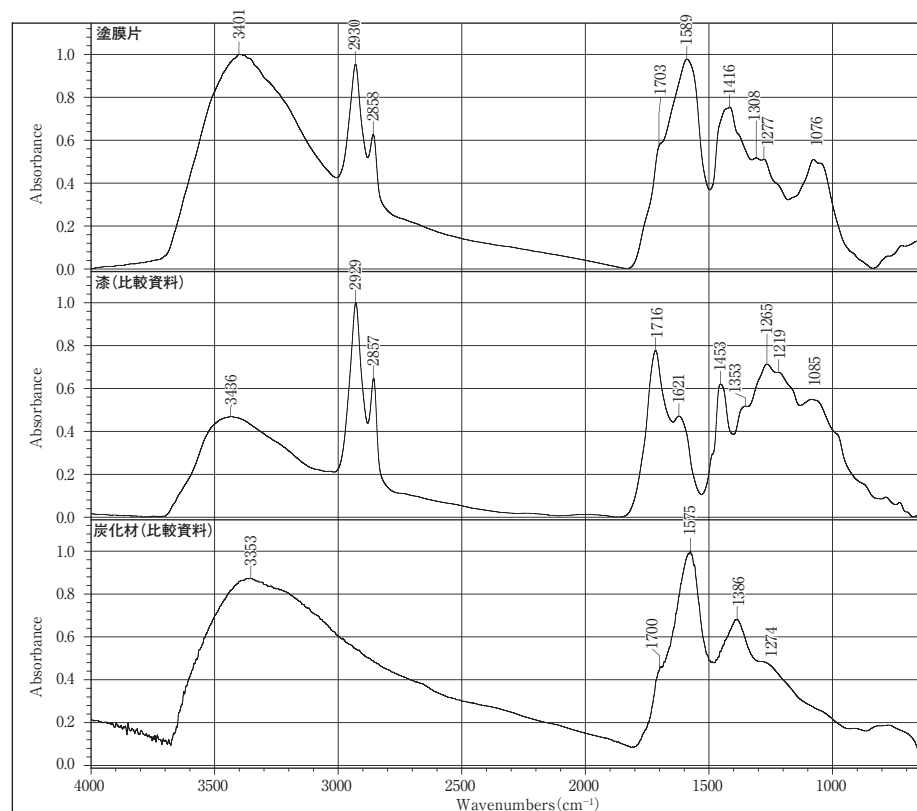
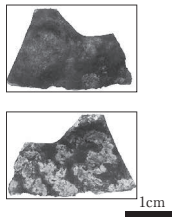
[測定情報]
サンプルスキャン回数: 64
バックグラウンドスキャン回数: 64
分解能: 4.000
サンプルゲイン: 8.0
ミラー速度: 1.8988

[光学系の構成]
検出器: MCT/A
ビームスプリッター: KBr
光源: IR

[備考]
ダイヤモンドエクスプレスを成型
顕微透過法
可変アパーチャ使用

CO₂除去(直線化)
オートベースライン補正
スムージング処理
Y軸正規化

[分析試料]



第18図 FT-IR スペクトル

炭粉以外の炭質物質（例えば油煙など）に由来する、あるいは木地の一部を反映していると考えられる。

引用文献

- 能城修一・鈴木三男，1997，石川条里遺跡出土木製品の樹種．中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 15 —長野市その3— 石川条里遺跡 第3分冊，(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書26，財団法人長野県埋蔵文化財センター，68-138.
- Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. (編)，2006，針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘（日本語版監修），海青社，70p. [Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
- 島地 謙・伊東隆夫，1982，図説木材組織．地球社，176p.
- 山田富貴子，1986，赤外線吸収スペクトル法，機器分析のてびき第1集．化学同人，1-18.

6 調査の総括

今回の調査では平安時代の木棺墓を精査した。この結果、安曇野市内では八ツ口^{やつくち}遺跡に次いで2例目となる八稜鏡と緑釉陶器をはじめとした陶器・土器類が出土した。これらは埋没時の原位置を保っていると考えられるため該期の墓制を検討する材料になると考えられる。

今回の調査の総括として明らかになった点は以下のとおりである。

- ①安曇野市明科地域で初めて平安時代の木棺墓が確認された。この木棺墓の底面下には3筋の溝状の落ち込みがあり、木棺を支えるための枕木のような材があったと考えられる。
- ②出土遺物のうち陶器・土器類は一辺50cmの正方形の範囲に納まるように分布している。このことから、木箱等の有機質容器に納められていた可能性がある。
- ③八稜鏡の鏡背からは漆が付着したサワラ材が採取されている。吉田川西遺跡等の類例から、この八稜鏡も漆塗りの木製容器に収納されていた可能性が高い。
- ④この木棺墓は出土した土器類の特徴から、松本平における古代10期（10世紀半ばに比定）と考えられる（長野県埋文センター1990）。

また、今後の課題とされる点は以下のとおりである。

- ①木棺墓としては短軸160cmとやや幅広である。人骨等の残存状況も悪く、ある程度の骨片が確認されたのみであるため、被葬者の埋葬位置や木棺墓内の配置は不明確なままとなった。この遺構が木郭木棺墓となる可能性も、類例から検討する必要がある。
- ②八稜鏡と陶器・土器類が土壌内の異なった場所に埋納されている。このことから吉田川西遺跡報告書（長野県埋文センター1989）でも指摘されるとおり埋納に際し、単純に副葬品と判断しきれない原因がある可能性も示唆される。
- ③今回確認された木棺墓を有する集落の存在がまだ明らかになっていない。調査区付近では古墳時代の遺構・遺物が確認されているが平安時代の遺構は未確認である。最も近いと考えられる周知の平安時代集落跡は会田川北岸に所在する潮遺跡群である。河川を挟んではいるものの今回の調査地点からは直線で約200mの距離である。



調査区遠景（西から）



調査区遠景（東から）



SK1（東から）



SK1（北から）



SK1 検出状況（南から）



SK1 遺物出土状況（東から）



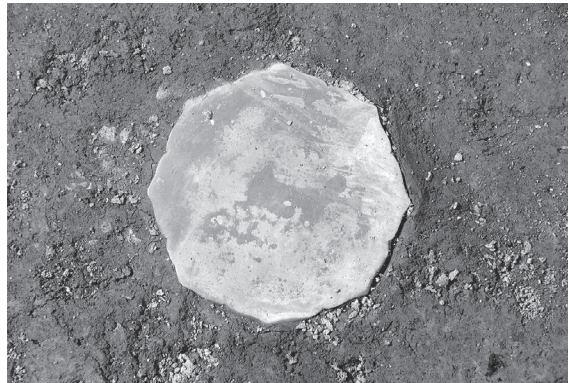
SK1 遺物出土状況（東から）



SK1 遺物出土状況（南東から）



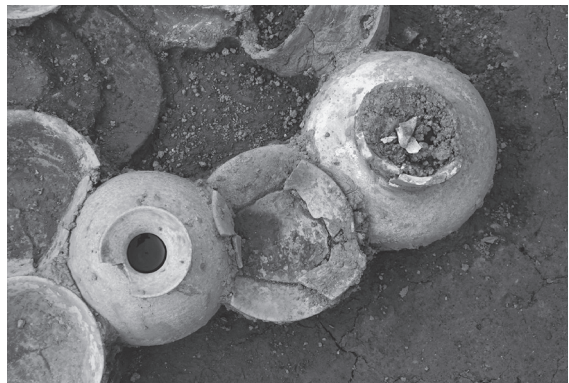
SK1 遺物出土状況（西から）



八稜鏡出土状況（南から）



SK1 遺物出土状況（南から）



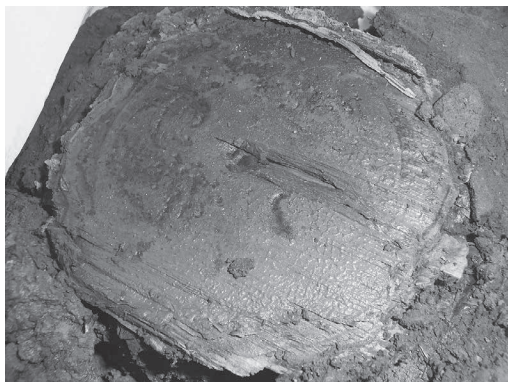
SK1 遺物出土状況（南から）



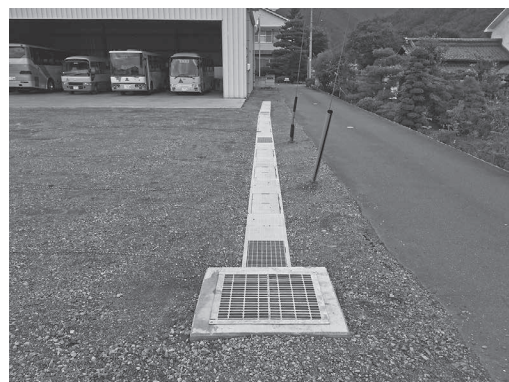
SK1 遺物出土状況（南から）



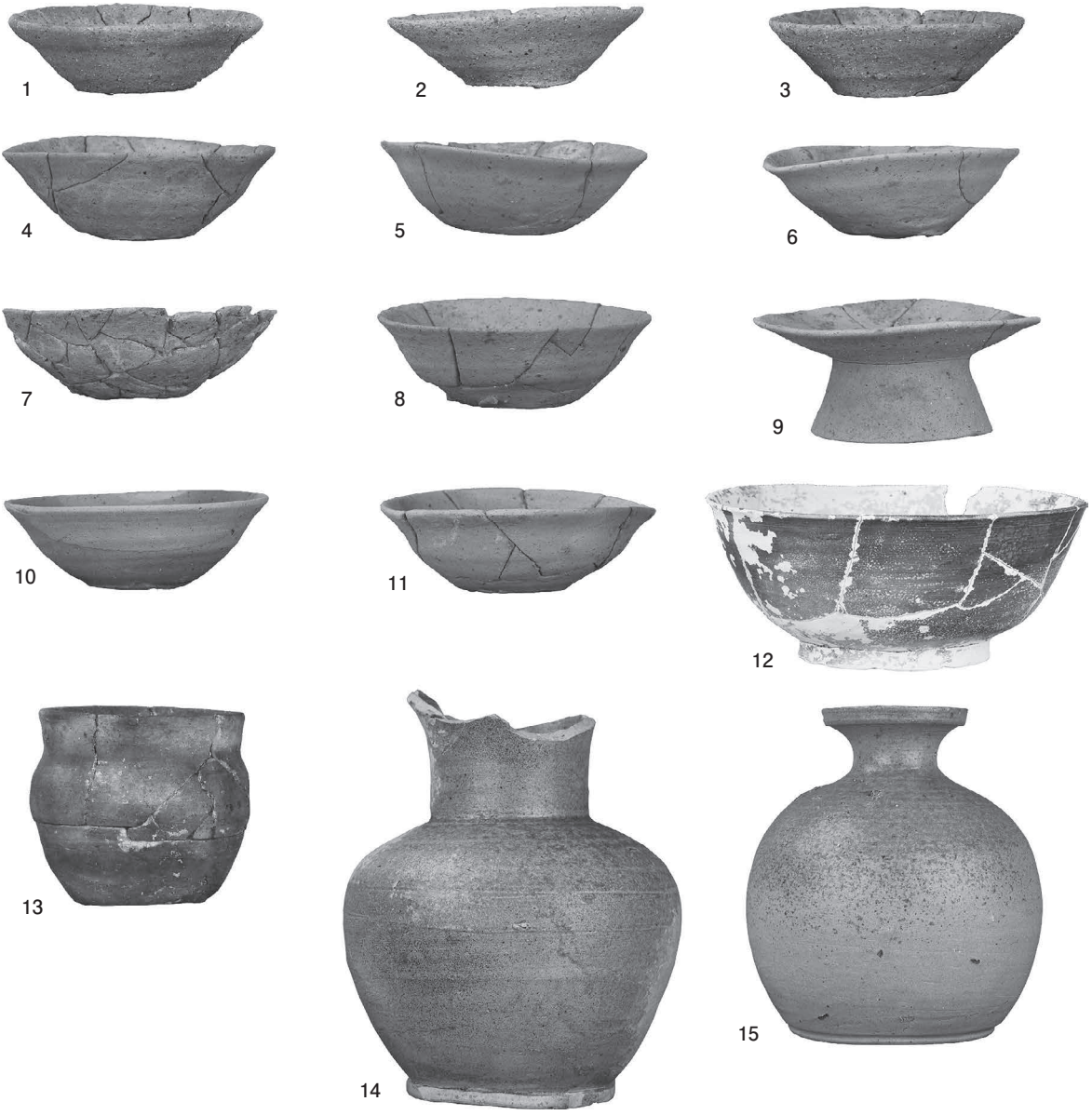
緑釉陶器出土状況（南から）



八稜鏡付着板材



施工後の現地（南から）



古殿屋敷（第1次）出土遺物

第3章 栄町遺跡（第3次）発掘調査

1 調査の契機と経過

調査の概要

栄町遺跡（第3次）発掘調査

所在地	<small>ながのけんあづみのしあかしなかがわて</small> 長野県安曇野市明科中川手6824番38外6筆
調査面積	800㎡
調査原因	その他の建物（公共施設）
発掘作業	平成23年8月18日～12月22日
整理作業	平成23年12月26日～平成25年3月31日

調査の契機と経過

この調査は安曇野市明科総合支所地域支援課による明科総合支所・明科公民館複合施設建設にかかる緊急発掘調査で、事業主体者は安曇野市長宮澤宗弘氏である。今回の調査地は明治42年（1909）から現在まで、官営製材所、製糸工場、明科町役場等の施設用地として利用されてきた。この度、老朽化した明科総合支所庁舎にかえて安曇野市明科総合支所・明科公民館複合施設を建設する運びとなり、計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地「栄町遺跡」であることから保護協議を開始した。

今回の調査区付近では昭和53年（1978）、平成13年（2001）に発掘調査を実施しており、いずれも古墳時代後期とされる集落跡が確認されている（明科町史編纂会1984、明科町教委2002）。このため、今回の開発事業においても埋蔵文化財にある程度の影響を与える可能性を視野にいれ担当部署と保護協議を実施した。この協議の結果、今回の建設工事によって埋蔵文化財への影響は不可避であることが確認されたうえで、平成23年（2011）4月6日付け「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知」（文化財保護法第94条第1項）が提出され4月11日付け安曇野市教育委員会の意見書を付して長野県教育委員会教育長あて進達された。これに対し、4月19日付け「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」で長野県教育委員会教育長から、この計画についての埋蔵文化財保護措置を記録作成のための発掘調査とする旨の通知があったため、この通知に基づき8月18日から発掘調査を開始した。

現場作業は平成23年（2011）12月22日まで行い、整理作業は12月26日から平成25年（2013）3月まで断続的に実施し、本書を発行して全事業を終了した。

調査体制

調査主体 安曇野市教育委員会

調査担当者 那須野 雅好（文化課文化財保護係長、～平成24年9月）、山下 泰永（文化課文化財保護係長、平成24年10月～）、土屋 和章（文化課文化財保護係）

調査員 今村 克

作業参加者 内川 弘一、小穴 金三郎、勝野 辰雄、北林 節子、酒井 久子、桜井 千夏、
等々力 哲男、細尾 みよ子、松田 洋輔、三上 直子

事務局 安曇野市教育委員会事務局 文化課

原野 和徳（文化課長、平成23年度）、三沢 良彦（文化課長、平成24年度）

那須野 雅好（文化財保護係長、～平成24年9月）、山下 泰永（文化財保護係長、平成24年
10月～）、逸見 大悟、土屋 和章（文化財保護係）

発掘作業・整理作業の経過

栄町遺跡（第3次）発掘調査における現場作業は、平成23年（2011）8月18日（木）から12月22日（木）にかけて実施し、調査面積は800㎡である。調査経過の詳細は調査日誌抄として記述する。現場作業に続いて、遺物整理を平成23年（2011）12月26日（月）から開始し、平成25年（2013）3月まで断続的に継続した。

調査日誌抄

平成23年（2011）

8月18日（木）	プレハブ、機材、仮囲搬入。	で終了。レンガ積み構造物を清掃。	
8月19日（金）	雨天中止。仮囲設置。	9月8日（木）	表土除去、東側で攪乱との境界を確認したため調査区東端決定。遺構検出。
8月22日（月）	雨水排水後、表土除去。検出面確認のためトレンチ調査。	9月9日（金）	遺構検出状況撮影。
8月23日（火）	雨天のため作業中止。午前、作業員ミーティング。午後は雨水排水。	9月12日（月）	測量業者による基準点測量。SB14、SB1、SB3精査。
8月24日（水）	重機で表土除去。表土近くは近現代の攪乱。攪乱下のシルト層から遺構検出。	9月13日（火）	重機でレンガ構造物を取り壊し。除去した場所でSB15を確認。SB1、SB2精査。
8月25日（木）	雨天中止。	9月14日（水）	SB1、SB2、SB14精査。グリッド杭設置。
8月26日（金）	表土除去、雨天のため午前で終了。	9月15日（木）	SB1、SB2、SB14精査。
8月29日（月）	表土除去。	9月16日（金）	SB1、SB2、SB14精査。
8月30日（火）	表土除去。検出面で遺構配置図作成開始。	9月20日（火）	台風15号による大雨で現場浸水、雨水排水。
8月31日（水）	表土除去。	9月21日（水）	台風15号の大雨で作業中止。終日雨水排水。
9月1日（木）	雨天中止。	9月22日（木）	現場復旧。断続的に降雨があり進まず。
9月2日（金）	表土除去。遺構配置図作成。	9月26日（月）	SB1、SB2精査。
9月5日（月）	雨天中止。	9月27日（火）	SB1、SB2精査。
9月6日（火）	雨水排水。表土除去。		
9月7日（水）	表土除去。遺構検出、約半分ま		

第3章 栄町遺跡（第3次）発掘調査

- 9月28日（水） SB1、SB2、SB4・5、SB14精査。
9月29日（木） SB1、SB2、SB3、SB4・5精査。
10月3日（月） SB1、SB2、SB3、SB4・5、SB6
精査。
10月4日（火） SB1、SB2、SB3、SB4・5、SB6
精査。
10月5日（水） SB1、SB2、SB3、SB4、SB6精
査。14：00に雨天中止。
10月6日（木） 雨天中止。
10月7日（金） SB1、SB2、SB3、SB6、SB7精
査。
10月11日（火） SB1、SB2、SB3、SB4・5、SB6
精査。
10月12日（水） SB1、SB2、SB4・5、SB6、SB7
精査。
10月13日（木） SB1、SB5、SB6、SB7精査。
10月14日（金） SB1、SB5、SB6、SB7精査。
10月17日（月） SB4・5、SB6、SB7精査。
10月18日（火） SB4・5、SB6、SB7、SB8精査。
10月19日（水） SB4・5、SB6、SB7精査。
10月20日（木） SB4・5、SB6、SB7、SB8精査。
10月21日（金） SB1、SB4・5、SB6、SB7、SB8
精査。
10月24日（月） SB5、SB8、SB9精査。
10月25日（火） SB5、SB8精査。
10月26日（水） SB8、SB9、SB10精査。
10月27日（木） SB5、SB8、SB9、SB10精査。
10月28日（金） SB8、SB9精査。
10月31日（月） SB9、SB10精査。
11月1日（火） SB9、SB10、SB11精査。
11月4日（金） SB5、SB9、SB10精査。
11月7日（月） SB5、SB8、SB9、SB10精査。
11月8日（火） SB5、SB9、SB10精査。
11月9日（水） SB5、SB9、SB10精査。
11月10日（木） SB9、SB10、SB12・13精査。
11月11日（金） 雨天中止。
11月14日（月） SB12、SB15精査。
11月15日（火） SB9、SB10、SB12、SB15精査。
11月16日（水） SB9、SB10、SB12精査。
11月17日（木） SB9、SB10、SB12精査。
11月18日（金） SB9、SB10、SB12精査。
11月21日（月） SB10、SB11、SB12精査。
11月22日（火） SB10、SB12精査。
11月24日（木） SB11、SD1精査。
11月25日（金） SB11、SD1精査。現地見学会準
備。
11月26日（土） 現地見学会。
11月28日（月） 空撮、写真撮影。SB12精査。
11月29日（火） SB11、SB12精査。
11月30日（水） SB11、SB12精査。
12月1日（木） SB12精査。
12月2日（金） SB12精査。現場は午前で終了。
12月5日（月） 専門者による現地指導。SB9カ
マド、SB12精査。SB1カマド焼土サンプル採
取。
12月6日（火） SB9カマド、SB12カマド精査。
測量業者により現場観測。
12月7日（水） SB9カマド、SB12カマド精査。
12月8日（木） SB9カマド、SB12カマド精査。
SB7拡張。完掘全景写真撮影。
12月9日（金） SB7拡張。現場観測。
12月12日（月） SB7拡張。作業員最終日。埋め
戻し開始。
12月13日（火） SB7拡張。現場撤収。
12月14日（水） 作業なし。埋め戻し。
12月15日（木） 道具片付け、現場撤収。
12月16日（金） コンテナハウス搬出。埋め戻し
ほぼ終了。
12月19日（月）～22日（木） 埋め戻し完了。重
機・仮囲等撤収、重機業務完了検査等。

2 遺跡の位置と環境

地理的環境

栄町遺跡は長野県安曇野市明科中川手の明科地区に所在する。安曇野市明科地域は、犀川・穂高川・高瀬川の三川が合流する地点を有する松本盆地東縁辺の最低地であり、東方には山地が広がる。標高は海拔500～900mとなっており、大部分を占める低地性の山地と、犀川及び支流谷底部の低地からなっている。栄町遺跡の所在する明科地籍は北を会田川、西を犀川に画される南北約1km・東西約0.5kmの河岸段丘上に展開しており、一帯は栄町遺跡のほか古殿屋敷、龍門淵遺跡、梶町遺跡、明科廃寺、上郷遺跡等が密集して明科遺跡群を形成している。今回の発掘調査区はこの段丘面上に所在し、会田川に落ち込む段丘崖からやや離れた標高約530mの地点である。

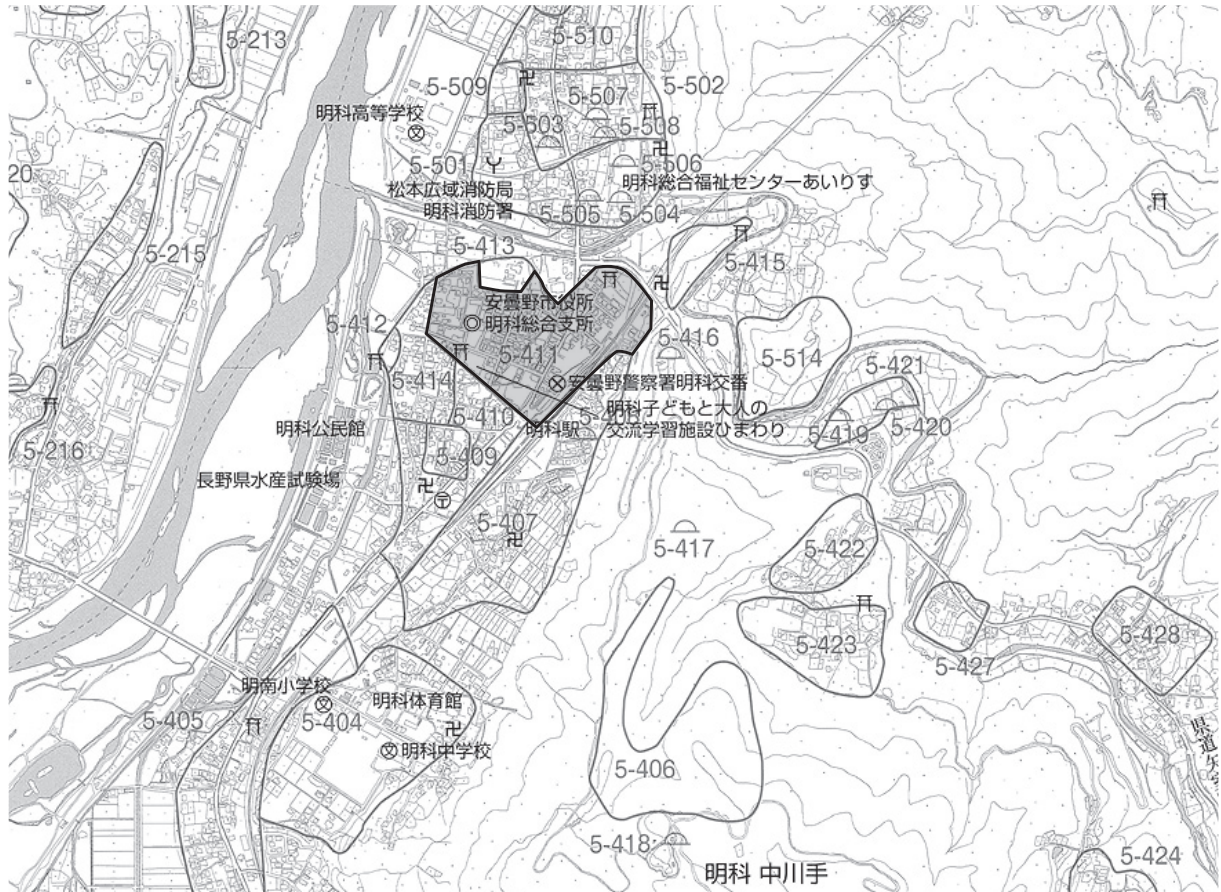
歴史的環境

栄町遺跡の所在する安曇野市明科地域は松本盆地東縁部の北側とその東方に広がる山地からなっている。犀川によって形成された河岸段丘上では豊科田沢地区から明科南陸郷地区まで遺跡が断続的に確認されており、山間部には古墳や中世の山城などが築かれている。

現在までに安曇野市内で旧石器時代の遺跡が発掘された例はないが、明科中川手の吐中遺跡で昭和31年（1956）にオオツノシカの化石が不時発見された記録がある。確実に人々の生活を確認できるのは縄文時代以降で、明科地域ではこや城遺跡や上手屋敷遺跡などで縄文早期の押型文土器片、ほうろく屋敷遺跡で絡条体圧痕文土器が出土している。ほうろく屋敷遺跡は明科南陸郷に所在し集落が前・中期から後期まで継続する。明科町教育委員会による第1～4次の発掘調査によって石器製作址の可能性があると指摘されている（明科町教委2001）。また、明科光の北村遺跡では、長野自動車道建設に先立つ発掘調査で中期後葉から後期にかかる時期の土壙墓から多量の人骨が確認された（長野県埋文センター1993）。晩期になると明科七貴の荒井遺跡で浮線文が施された水Ⅰ式段階の鉢形土器が採集されている（明科町史編纂会1984）。

弥生時代になると、ほうろく屋敷遺跡では再葬墓4群16基とそれに伴う土器30個体あまりが出土している（明科町教委1991）。また、犀川左岸段丘上のみどりヶ丘遺跡からは宅地造成に伴い発掘調査がなされて弥生中期の土器・石器が多量に出土している（太田・河西1966）。このとき集石遺構とされる礫群の中から多量の土器・石器が確認されており、変形工字文や磨消縄文が施文される土器群に大型蛤刃石斧や石庖丁が伴う。

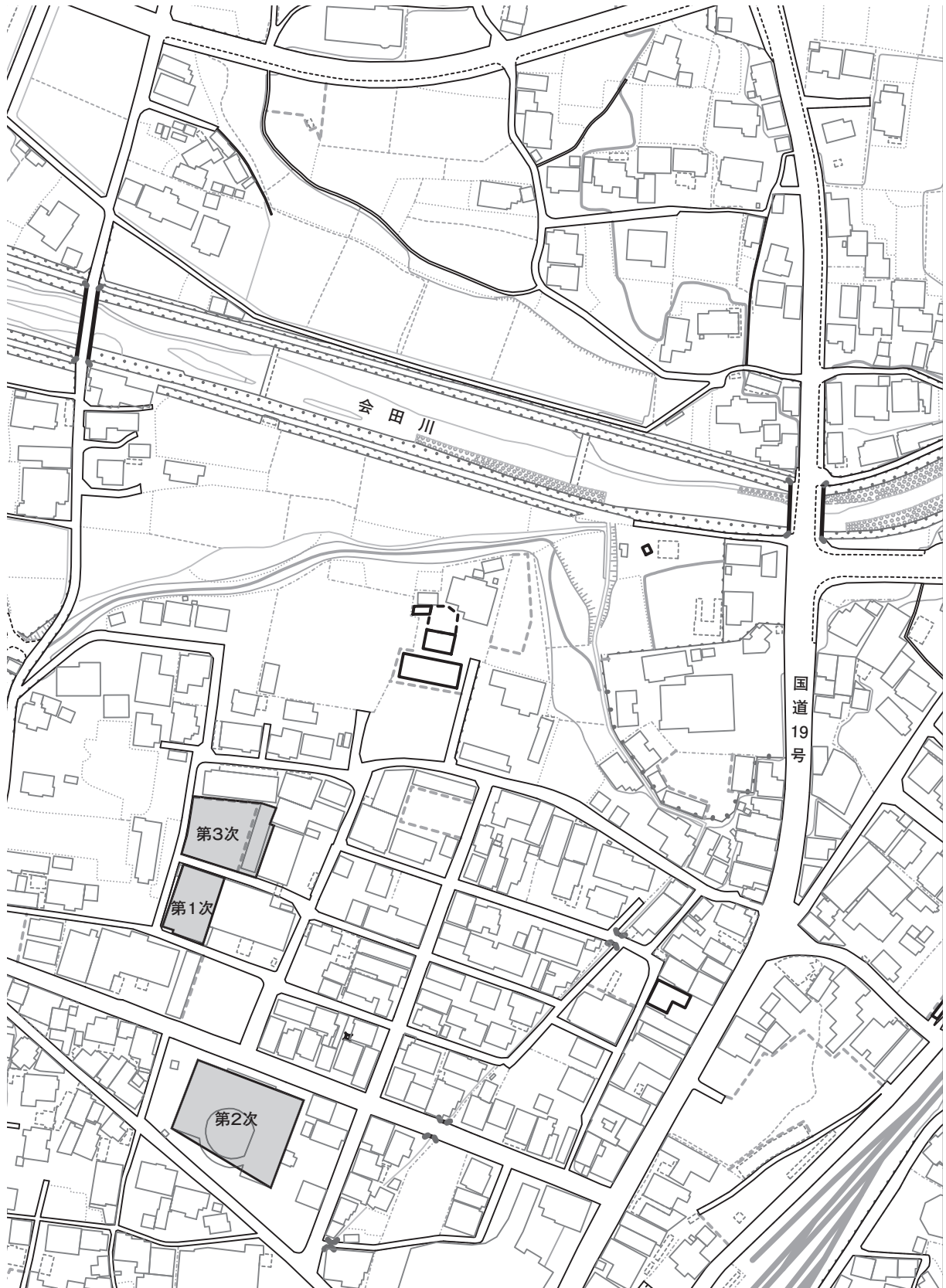
明科地域では古墳時代後期の古墳が確認されている。特に潮地籍に分布する複数の古墳は潮古墳群としてまとまりがあり、発掘調査によって7～8世紀初頭に比定されている（明科町教委2005）。この時代の集落の様相は不明確な部分が多いが、潮地籍からは土師器壺が採集されており未発掘部分に古墳時代集落が存在する可能性がある。会田川より南の明科中川手では、昭和53年（1978）の明科町役場（現在の明科総合支所）議会棟建設時に実施した栄町遺跡の発掘調査で6世紀後半に比定される住居跡



第19図 栄町遺跡付近の遺跡 (1 / 17,500)

第4表 栄町遺跡付近の遺跡

番号	遺跡名	主な時代	種別	番号	遺跡名	主な時代	種別
5-213	孫五郎屋敷	縄文	散布地	5-422	吐中遺跡	縄文	散布地
5-215	上野遺跡	縄文・古代・中世・近世	散布地	5-423	城下遺跡	縄文	散布地
5-216	やしき遺跡	縄文・古代・中世・近世	散布地	5-424	海渡遺跡	中世	城館跡
5-404	上手屋敷遺跡	縄文・古代・中世・近世	集落跡	5-425	光久寺	中世	社寺跡
5-405	町屋敷遺跡	中世・近世	集落跡	5-426	清水古屋敷	中世	城館跡
5-406	塔ノ原城址	中世・近世	城館跡	5-427	平上ノ段館	中世	城館跡
5-407	明科遺跡群上郷遺跡	縄文・古代	散布地	5-428	中沢古屋敷	中世	城館跡
5-408	明科遺跡群上郷古墳	古墳	古墳	5-501	潮遺跡群潮神明宮前遺跡	古代	集落跡
5-409	明科遺跡群明科廃寺	古代	社寺跡	5-502	潮遺跡群新屋遺跡	古代	散布地
5-410	明科遺跡群県町遺跡	古代	集落跡	5-503	金山塚1号墳	古墳	古墳
5-411	明科遺跡群栄町遺跡	古代	集落跡	5-504	金山塚2号墳	古墳	古墳
5-412	明科遺跡群龍門淵遺跡	弥生・古墳	その他(祭祀)	5-505	金山塚3号墳	古墳	古墳
5-413	明科遺跡群古殿屋敷	古墳・平安・中世・近世	城館跡	5-506	金山塚4号墳	古墳	古墳
5-414	明科遺跡群本町遺跡	弥生・古代	集落跡	5-507	金山塚5号墳	古墳	古墳
5-415	こや城	縄文・古代・中世・近世	集落跡・城館跡	5-508	お経塚古墳	古墳	古墳
5-416	能念寺1号墳	古墳	古墳	5-509	潮遺跡群古屋敷遺跡	古代・中世・近世	城館跡
5-417	能念寺2号墳	古墳	古墳	5-510	潮遺跡群浦田遺跡	古代・中世・近世	散布地
5-418	能念寺3号墳	古墳	古墳	5-511	潮遺跡群古殿屋敷	中世・近世	城館跡
5-419	武士平遺跡	古墳・中世・近世	散布地	5-512	潮遺跡群塩田若宮遺跡	縄文・古代	集落跡
5-420	武士平1号墳	古墳	古墳	5-513	潮遺跡群三五山遺跡	縄文	散布地
5-421	武士平2号墳	古墳	古墳	5-514	潮遺跡群茶臼山遺跡	縄文・中世・近世	城館跡・散布地



第20図 発掘調査位置図 (1 / 2,500)

が発掘されている（明科町史編纂会1984）。この住居跡は一辺5 mほどで直径15cm程度の川原礫を一面に敷き詰めた特異な遺構である。また、明科光の北村遺跡では古墳時代後期から奈良時代にかけての集落跡が発掘されている（長野県埋文センター1993）。

奈良時代になると明科中川手で7世紀後半創建と考えられる寺院跡が確認されており、所在地から明科廃寺と呼ばれる。明科廃寺では平成11年（1999）に行われた発掘調査によって掘立柱建物跡3棟、布掘り基礎を持つ掘立柱建物跡1棟などに伴って多量の瓦が出土した（明科町教委2000）。昭和28年（1953）の発掘調査と併せて、古代瓦のほかしび鴟尾や瓦塔が確認され県内で最も古い時期の寺院のひとつとして注目される。明科廃寺の造営期間については未だ詳らかでないが、補修瓦の様相などから平安時代までは同地で存続していたものと考えられている。奈良・平安時代は明科地域全域で集落が確認される時期でもあり、開発が広範囲に及んでいったといえる。

明科地域には中世の城館跡が多く残されており、こや城遺跡、ちやうすやま茶臼山遺跡、わでやしき上手屋敷遺跡、とうのはら塔ノ原じようし城址などで遺物の出土がある。このうちとうのはらし塔原氏居館跡とされる上手屋敷遺跡は平成元年（1989）と平成15年（2003）に発掘調査が実施され、内耳土器や青磁碗のほか安山岩製の宝篋印塔相輪などが出土した（明科町史編纂会1984、明科町教委2004）。

栄町遺跡の概要

栄町遺跡では今回までに3次にわたる発掘調査が実施されている。これらの調査結果から、この付近一帯には古墳時代後期を中心とする集落跡が展開したことが判明してきた。

第5表 栄町遺跡発掘調査記録

調査次	調査年	調査原因	遺構・遺物の概要	文献
第1次	昭和53年	公共施設建設（明科町役場庁舎議会棟）	炬をもつ礫敷住居址、土師器	明科町史編纂会1984
第2次	平成13年	公共施設建設（「子どもと大人の交流学習施設」）	竪穴建物跡4、掘立柱建物跡1、ピット、土師器	明科町教委2002
第3次	平成23年	公共施設建設（明科総合支所・公民館複合施設）	竪穴建物跡12、掘立柱建物跡6、溝跡1、ピット等、土師器、須恵器、管玉	安曇野市教委2013（本書）

明科製材所

現在の明科総合支所一帯に建設された明科製材所は、明治41年（1908）10月、農商務省長野大林区署明科製材所として起工され、明治42年5月から大正2年（1913）5月25日に焼失するまで操業された（明科町史編纂会1985）。これは、明科がアルプス一帯の国有林で伐採された材木を、烏川、高瀬川、梓川、犀川等を利用して運搬することや、明治35年に西条・松本間が開通した国鉄篠ノ井線の明科駅が近く利便性があったためと考えられる。

敷地は2.5ha余で、原動力は150馬力の蒸気機関2台、職工は工場内に60～80名おり、工場外では200余人の作業員を使用する大工場であった。

烏川、高瀬川、梓川上流の国有林で伐採された材木は筏に組んで運搬され、犀川発電所下にあった貯



第21図 調査区全体図

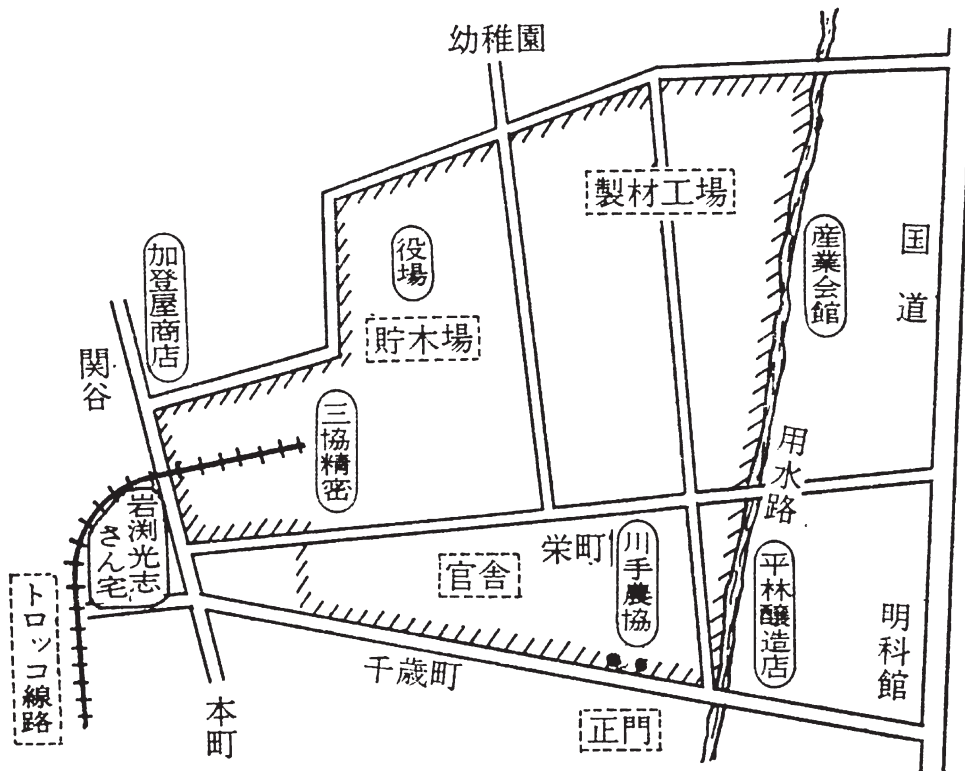
木場で水揚げされ、そこからトロッコで製材所に運搬されて場内の西に分配され積まれていた。

このように規模の大きな製材所であったが、大正2年5月24日に機関室から出火し、翌25日に全焼したため廃止となっている。今回の発掘調査で、この火災による可能性のきわめて高い焼土層が古墳時代の遺構検出面より上層で確認された。この焼土は特に調査区内北東に集中的に分布し敷地外に広がっている様相である。なお、製材所の跡地はこの火災の後、大正5年頃まで個人経営の津吹製材所が営業していたとされる。

この後、大正10年には製材所跡地に組合製糸三栄社が設立され操業を開始した。大正6年から昭和3年にかけて糸値が最好況期であり、女性工員は盛時300人超であったとされる。創立後7・8年で繭値不況期となるが、昭和24年（1949）に閉業し施設取り壊しとなるまで営業は続いた。三栄社の操業停止直前には生糸の取り扱いをやめ、施設を利用して乾燥野菜が製造されている。この頃は大陸の戦争が深刻化しており、バレイショやネギ、玉ネギが戦地へ送られた。三栄社閉止後、中川手村有地であったこの場所では建物が取り壊されしばらく空地となっていたが、中学校建設のための財源捻出等の必要性から大部分が交換等で処分された。昭和39年（1964）にこの地に明科町役場庁舎が建設され、昭和54年（1979）に増築、昭和57年に庁舎北に保健センターが建設された。

明科煉瓦工場

篠ノ井線が開通して間もない明治43年5月に明科駅東方に開設されたレンガ工場である。『明科町史 下巻』には大正2年の報告書として以下が引用されている（明科町史編纂会1985）。



第22図 明科製材所敷地図（『明科町史 下巻』p.787から転載）

- 一 原料の粘土は明科で、砂は犀川筋で採取する。
- 二 製作法は粘土八分、砂二分を混和し切り返してよくこれをこねて後、幅四寸長八寸厚さ二寸の木製箱に打ち込み、^マ于板（編者注「干板」か？）にぬく、于板にぬいた煉瓦は于場で並べ日光乾燥をする、乾燥したものを白地といい、窯に積み焼いたものが煉瓦である。
- 三 販路は中央線鉄道工事及び、南北安曇、東西筑摩、上伊那、諏訪等の建築材料として販売する。
- 四 産額は創業して日が浅いので本年は二〇万を出ず、しかし本工場においては六〇万以上製出できる。

明科煉瓦工場の製品は主として県内の製糸工場、ボイラー使用工場等に販売され大正・昭和前半を通して活況を呈した。しかしその後コンクリート、ブロック工業におされて、昭和43年頃廃止された。

今回の調査でも多くのレンガが出土しており、時代的な整合性と地理的な利便性から上記製造方法によって当地で製造され流通したものである可能性が高い。

3 調査の方法と成果

発掘調査・整理作業

公共施設建設地が周知の埋蔵文化財包蔵地内であり、過去の発掘調査結果から遺構が良好に残存している可能性が極めて高いため、まず遺構存在確認のための試掘調査を実施した。この結果、工事計画地西半分に遺構が残存していること、また、工事での掘削によって埋蔵文化財への影響が不可避であることが確認された。このため、安曇野市明科総合支所地域支援課と保護協議を実施し確認された遺構の範囲について発掘調査を実施して遺跡の記録保存をはかる方向となった。

本調査は平成23年（2011）8月18日から12月22日にかけて実施した。調査区には一辺10mのグリッドを設置し、遺構・遺物の所在はこのグリッドを基本として記載した。表土除去については、重機を用いて遺構面直上までの造成土・堆積土を除去し、遺構検出を人力で行った。遺構精査は、竪穴建物跡については4分割、それ以外の遺構については基本的に2分割して掘り下げを行っている。遺物の取り上げは遺構ごとに行ったが、必要に応じて出土位置を三次元記録した遺物もある。基準点測量等・遺構観測は業者委託とし、調査員・作業員が現場で簡易遺方測量した図面とあわせて最終的な遺構図を作成してある。記録写真は現場・整理ともに主としてデジタルカメラとフィルムカメラを併用した。

4 遺跡の古環境

鳥羽 嘉彦

地形環境

「水郷明科」とも呼ばれる安曇野市明科地域（旧東筑摩郡明科町）付近では、松本平の四方の山から流出する高瀬川、穂高川、梓川、^{ならいがわ たがわ}奈良井川、田川などの諸河川がここで合流し、犀川の流れとなって北流を始める。この地形は日本列島を縦断する糸魚川—静岡構造線沿いにある松本盆地東縁断層を境とする隆起運動と河川の浸食作用のプロセスにより形成されたもので、地盤の著しい隆起・浸食作用により、地形変化が広域的にもまた局地的にも頻繁に起こっている地域である。

犀川右岸の現在の町が広がる低位段丘は、長峰山系の山麓沿いに南北に細長く延びる河岸段丘で、上

位面にあたる上手屋敷面（標高540m 内外）と下位面にあたる明科面（標高525m 内外）に大別される。

本遺跡は明科面のほぼ中央に位置し、標高は530m を測る。明科面の形成期は縄文時代後期の約3000年前と推定されている。

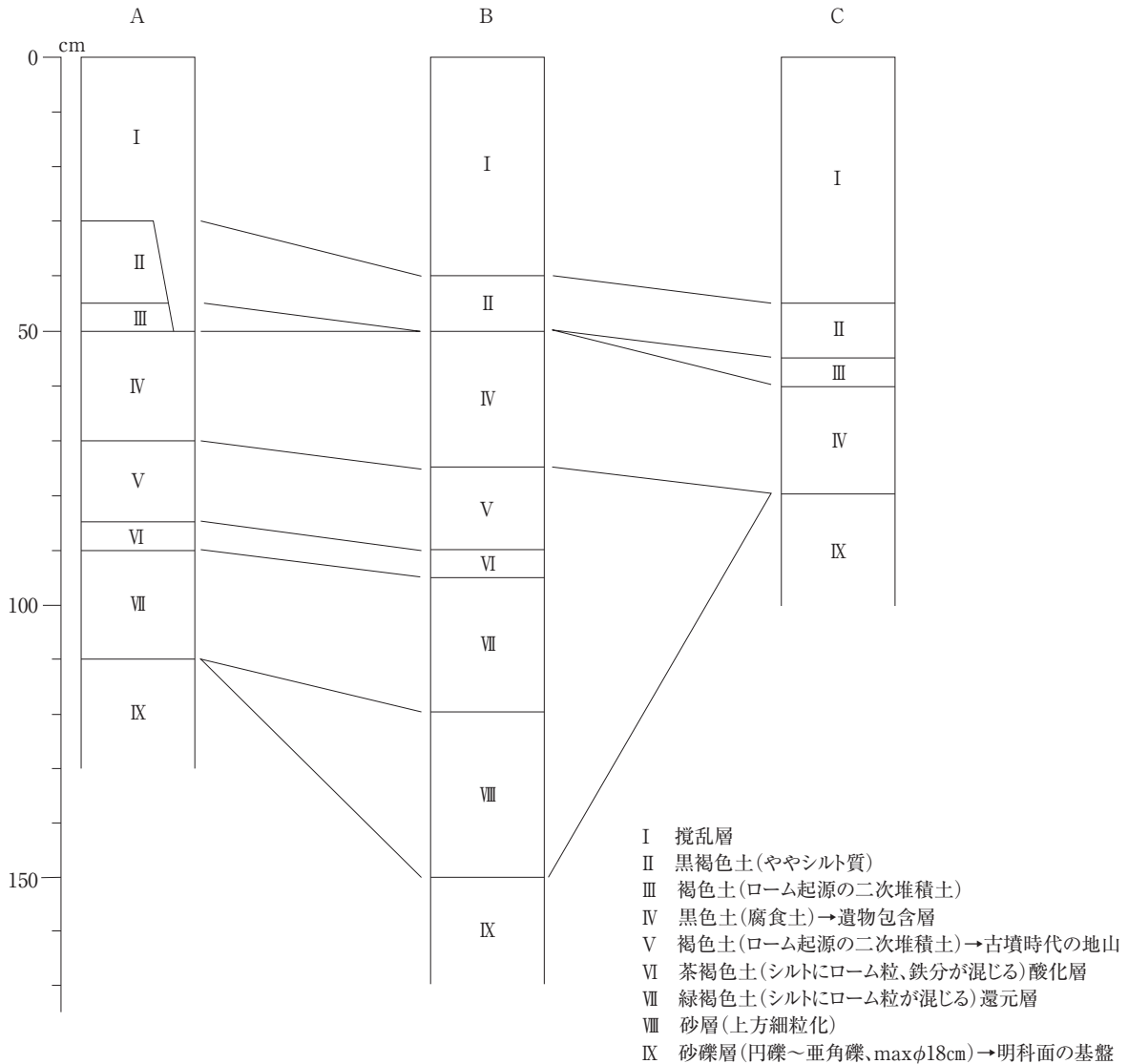
層序

遺跡の展開する明科面は、有史以来も頻繁に諸河川の氾濫や土砂の流入が起こっており、大規模な集落においては、その集落の内部においても立地環境が一樣ではなかったことがうかがえる。

第23図は、それぞれ調査区の A：北壁中央、B：西壁中央、C：南壁やや西よりの各地点における層序断面図である（断面図の位置は第24図中に示す）。

Ⅲ層、Ⅴ層は2次堆積のローム層であり、上方からの押し出しにより堆積したものである。Ⅴ層上面が本遺跡の地山であり、古墳時代の地表面として捉えられている。

Ⅳ層は腐食質の黒色土で、遺物包含層にあたる。



第23図 基本層序

Ⅵ層は鉄分を含む茶褐色を呈する酸化層、またⅦ層は逆に緑褐色を呈する還元層であり、直下の砂層の状況から判断して河川本流から離れた湿地帯、あるいは泥地帯の環境にあったものと推測される。

Ⅸ層は max φ 18cmの円礫～亜角礫から構成される砂礫層で、この上面が明科面の上面にあたる。なお、このⅨ層上面が約3000年前とすると、現在までにB地点で150cmもの堆積が見られることから、環境の変化と土砂の流入、堆積がかなり著しく行われてきたことがうかがえる。

地形環境の変遷

前項の層序断面図に基づき、当時の環境を復元してみることにする。

縄文時代後期ごろ、寒冷化によりこの付近を被覆していた水面が遠ざかると、明科面を構成する砂礫層の堆積が止まった。B地点では本層最上部の円礫が max φ 4 cmと比較的小さいこと、またこの上位に乗るⅧ層の砂層内部に上方細粒化の傾向が見られることから比較的早い速度で水が引いていったことが判読される。

その後は古墳時代までの期間、Ⅶ層やⅥ層に見られるように河川から少し離れた位置で、湿地帯、あるいは泥地帯のような環境におかれていた時期があった。

人々がこの付近に定住を始めたのは地盤が安定してきた古墳時代になってからのことである。それ以前はおそらく家を構える環境にはなかったことが上記の堆積物から容易にうかがえる。

遺物包含層であるⅣ層の黒色土は腐植土であり、古墳時代以降しばらくの間は森林に覆われた静かな環境が続いていた。その後は交通の要衝という地の利から人々の集まる場所となり、現在の明科地区の中心地に至ったものと概観されよう。

次に古墳時代における集落内の環境について考えてみる（第24図）。

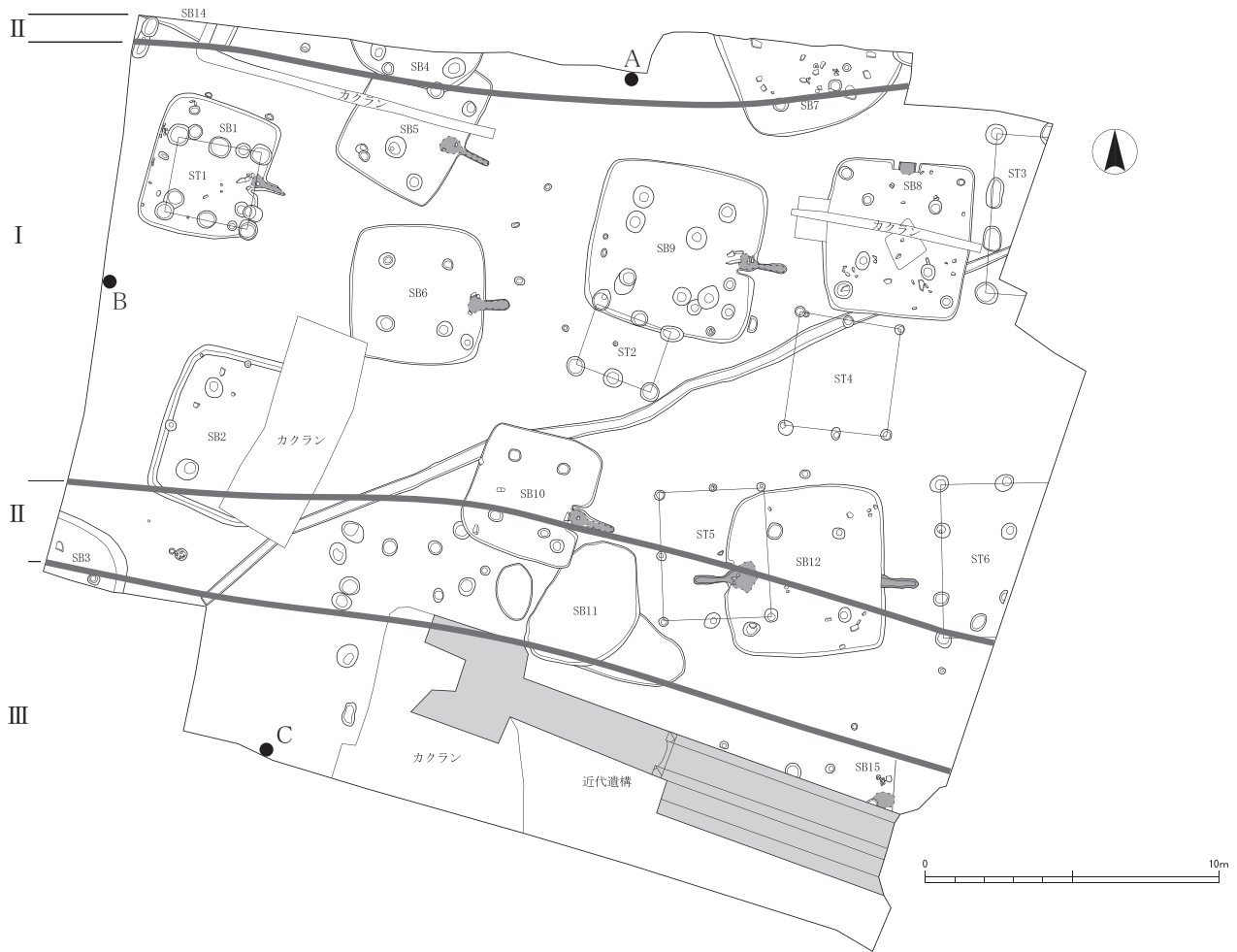
I地区ではⅨ層の砂礫層が竪穴建物内の柱穴の底にも露出していない（SB9の最も深い主柱穴底のレベルは現地表面から162cmを測る）という状況に対し、II地区ではSB7、SB10、SB11、SB12の各竪穴建物址で床面にⅨ層の砂礫層が露出している。またIII地区のC地点ではⅨ層の上にⅣ層が直接被覆し、古墳時代の地山であるⅤ層をはじめとしてその間の層をすべて欠如しているという変化が見られた。

調査区の狭い範囲内での検証のため上記の観察だけで結論付けることには多少飛躍の感を免れないが、東西方向の河川の影響によりI地区、II地区、III地区の単位で堆積環境が異なっており、古墳時代においてもエリアごとに住みやすさの違いがあり、居住域に何らかの選択肢があったことも考えられる。

搬入された礫

遺構内に出土する礫（ここで取り扱うのは拳大より大きな石）には、①竪穴建物址の構築時に当初からあったもの（竪穴を礫層へ掘り込む場合など）、②竪穴建物の構築の際使用したもの（カマドの芯材、柱穴底の平石など）、③竪穴建物内で生活に用いたもの（台石、こも石、鍛冶用など）、がある。

実際の発掘現場で出土したすべての礫に、その性格付けをあてはめることは大変困難であるが、②と③の礫について明らかなことは「何らかの意図を持って人為的に竪穴建物内へ搬入されたもの」ということである。



第24図 集落内の環境

第6表 竪穴建物跡内の礫の石材

遺構	礫岩	中粒砂岩	細粒砂岩	粘板岩	硬砂岩	ホルンフェルス	チャート	安山岩	花崗岩	花崗斑岩
SB1		1	16		1	1		2		
SB2			4							
SB3			3							
SB4										
SB5	1		5				1			
SB6			1							
SB7										
SB8		14	5			4			3	
SB9		4	6	1		1	1	1	1	1
SB10	1	3								1
SB11										
SB12		2				1			1	
SB14										
計	2	24	40	1	1	7	2	3	5	2

第6表は、各竪穴建物跡の床面直上から出土した上記の②または③に該当する礫について、用途や大きさの分類は特にせず、石材別に個数を表示したものである。

石材の種類としては、遺跡の立地する段丘を形成する石材（後背地の長峰山系に由来する石材）と犀川の川原から採取可能な石材の二種類に絞られる。ただし犀川の川原石については、前述したようにその支流である高瀬川、穂高川、梓川、奈良井川、田川などの後背地を起源としており、松本平のほぼ全域の石材を網羅している。

前者に該当する石材としては新第三系の礫岩、砂岩があり、入手の容易さから判断しても全体の4分の3を占める出土量にも納得がいくものである。古生代の粘板岩、硬砂岩、ホルンフェルス、チャートは松本平の西部及び南部に広く広がり、高瀬川、穂高川、梓川、奈良井川を起源としている。また同様に花崗岩、花崗斑岩は高瀬川、梓川を起源とし、安山岩は梓川、奈良井川を起源としてそれぞれ犀川へ運び込まれている。

竪穴建物跡ごとに礫の石材には多少のばらつきが見られ、時期別あるいは家ごとに石材の選択が行われた可能性もうかがわれるが、いずれの場合も入手の容易さから判断すれば選択するという行為に極端な傾向はなかったものと考えられる。

5 遺構と遺物

栄町遺跡（第3次）発掘調査では、竪穴建物跡13棟、掘立柱建物跡6棟、溝跡、土坑、ピット等遺構を検出し精査した。これらのうち竪穴建物跡からは比較的まとまった量の土器類が出土したため、栄町遺跡集落跡の時期決定の基準として検討材料となる。そこで、須恵器については屋代遺跡群（長野県埋文センター2000）の基準、土師器については県内で該期の良好な資料が得られている榎田遺跡（長野県埋文センター1999）の基準を参考に栄町遺跡（第3次）発掘調査における土器の器種組成の特徴を把握したい。なお、今回の調査では竪穴建物跡の切り合い関係が少なく遺構間の直接的な前後関係は得られていない反面、各建物跡から一括して良好な資料が得られている。

土器類の分類として大別した器の種類を器種とする。坏、甕、高坏などがこの分類にあたる。さらにそれぞれの器種を細別する。この段階で分類の基準となる属性には器形、整形、調整の技法等がある。

須恵器分類

坏形土器 土師器と同様に器高が口径の2分の1を下まわることを目安として鉢類と区別する。

坏A：直線的に開く体部をもつ無台の坏。体部内面の見込部に指押さえの跡が残る。底部調整にはヘラ切り、ヘラ削りが見られる。

坏B：断面箱型の体部に高台を付した形態。定型的な法量に分化する。

坏G：ヘラによる底部調整をもつ直径11.5cm以下の無台の坏。形態は坏Aに似る。

坏H：丸底で口縁部下に蓋受け部分を持ち、ここから口縁部にかけて立ち上がる形態の坏。口縁部の立ち上がりは個体差がある。古墳時代に特徴的とされる。

坏蓋 須恵器坏形土器の蓋として使用されたと考えられる器形・法量の蓋形土器。

坏蓋 A：内面にかえりを持つ蓋。

坏蓋 B：内面にかえりを持たず、口縁端部を折り曲げる蓋。

坏蓋 H：椀形の坏を伏せた形態に近い坏。

甕形土器 貯蔵具として使用されたと考えられる、甕形の土器。

甕 A：体部外面にタタキ調整がなされ、卵形の体部に長く外反する口頸部を持つ甕。

瓶形土器 平瓶や横瓶などの口頸部のみが確認されたものを一括した。

すり鉢形土器 体部下半から口縁部にかけて直線的に開く器形に厚めの円盤状の底部を付けた鉢。

土師器分類

坏形土器 口径12～16cm程度で、器高が口径の2分の1を下まわることを目安として鉢類と区別する。

A類：半球形の坏で、口縁部が内斜もしくは外反する。内外面ともミガキを施す個体が多い。しかし一部にハケ後ミガキを施す個体もある。口縁部の形態から4種に細分する。

A1：口縁部が内斜して肉厚になり、内側に面を有する。口縁端部はほとんど外反しない。

A2：口縁部は内斜して口縁端部を外につまみ出す。

A3：口縁端部を単純に外反させる。

A4：口縁部は強く外反し、口縁端部に面を持ち、端部上端を若干つまみ出す。精製品であり、内外面ともケズリ後ミガキを丁寧に行う。

B類：半球形の坏で口縁部は上方に延びるか、若干内湾する。内外面ともミガキを施す個体が多い。

榎田報告ではこの類型に時期差を設け、古墳時代中期の資料をB類、後期後葉の資料をB'類としているが、今回の調査では本類型自体から時期差を観察することができなかつたため本類型の説明に該当する坏類は統一してB類とした。

D類：須恵器の模倣形態。胴部と底部の外面境に稜を有する。口縁部は上方に向く。器高の高い形態をD1（器高×2>口径）、器高の低い形態をD2（器高×2<口径）とする。

鉢形土器 口径が坏形土器の平均値を上回る（約16cm以上）、もしくは器高が口径の2分の1以上となることを目安とする。整形技法は坏形土器と同様に内外面ミガキを基本とする。外面整形にケズリ後ミガキの例もある。黒色土器も多い。器形に安定感がなく、中間形態が非常に多いのが特徴とされる。

A類：口縁部を若干外反させる意識がある。胴部上半は外方に開くか、内湾する。

B類：口縁部が直線的に延びるものの、外反する形態もある。胴部上半は外方に開く。坏と類似した形態であるが、坏との法量差が大きい点で鉢として抽出する。

高坏形土器 坏類に脚台を有する器種である。今回の発掘調査では器形全体がわかるような残存率の高い個体は出土していない。

I類：須恵器の模倣形態。坏部の胴下部は湾曲し外面に明確な稜が見られる。坏部のみ出土したものを本類型とした。

L類：坏部と脚部の接合部が中実で、円錐形の長脚を有する例を広くまとめる。坏部の形態から3種に細分する。

L1：坏部に坏C類を有する。

L2：坏部に坏B類を有する。

L3：坏部が直線的に延びる。

甕形土器 主な用途が食物の調理に用いたと推定される容器で、外面整形がハケ中心となる場合を甕とする。しかしナデ整形や、ミガキを行う場合もある。内面整形はハケ以外にも、工具によるナデ、ケズリ、ミガキなどがある。

A類：胴部中央付近に最大径のある大～小型の球胴形態をまとめる。

B類：小型で口径15cm前後、胴最大径と口径の差が2cm以内を目安とする。口径：器高が1：1に近く、口縁が強く開いた印象を持つため、甕A類とは区別した。

C類：大型で胴部中央付近に最大径があり、胴最大径と口径の差が5～8cmの範囲を目安とする。A類より若干細い。2種に細分する。

C1：器高が29cm前後で楕円形に近い形態。

C2：器高が約30cm以上で、ラグビーボールに近い形態。

D類：長胴甕。口径15～20cmの範囲で、胴最大径と口径の差が4cm以内を目安とする。器高は39～13cmと幅広いものの、大きさの基準が各期に存在しない。整形技法は外面ハケが主体であるが、ナデ整形やミガキ整形の例も存在する。

F類：長胴甕。胴最大径は胴部上半にあり、底径が小さく、鳥帽子形の形態となる。外面の整形技法にケズリを用いるのが特徴とされる。

甌形土器 底部が存在しないか、あるいは底部に孔を持つもの。

B類：口径20～25cm、器高20cm以上を目安とする。この範囲で若干大小に分かれるが、規格性は見られない。胴部は直線的で、バケツ形の形態となる。通常は牛角状の把手を持つが、例外もある。底部は存在しない。内外面にミガキを施す個体が多い。側面底部付近に一对の孔を有する例も見られる。

C類：中～小型の甌。器高9～18cm程の範囲を目安とするもこの中で幾つかの大きさに分かれるものの、規格性は見られない。またB類との中間形態も存在する。通常は把手を持たない。底部の形態から3種に細分する。

C1：底部を持たない。

C2：底部を持ち単孔。

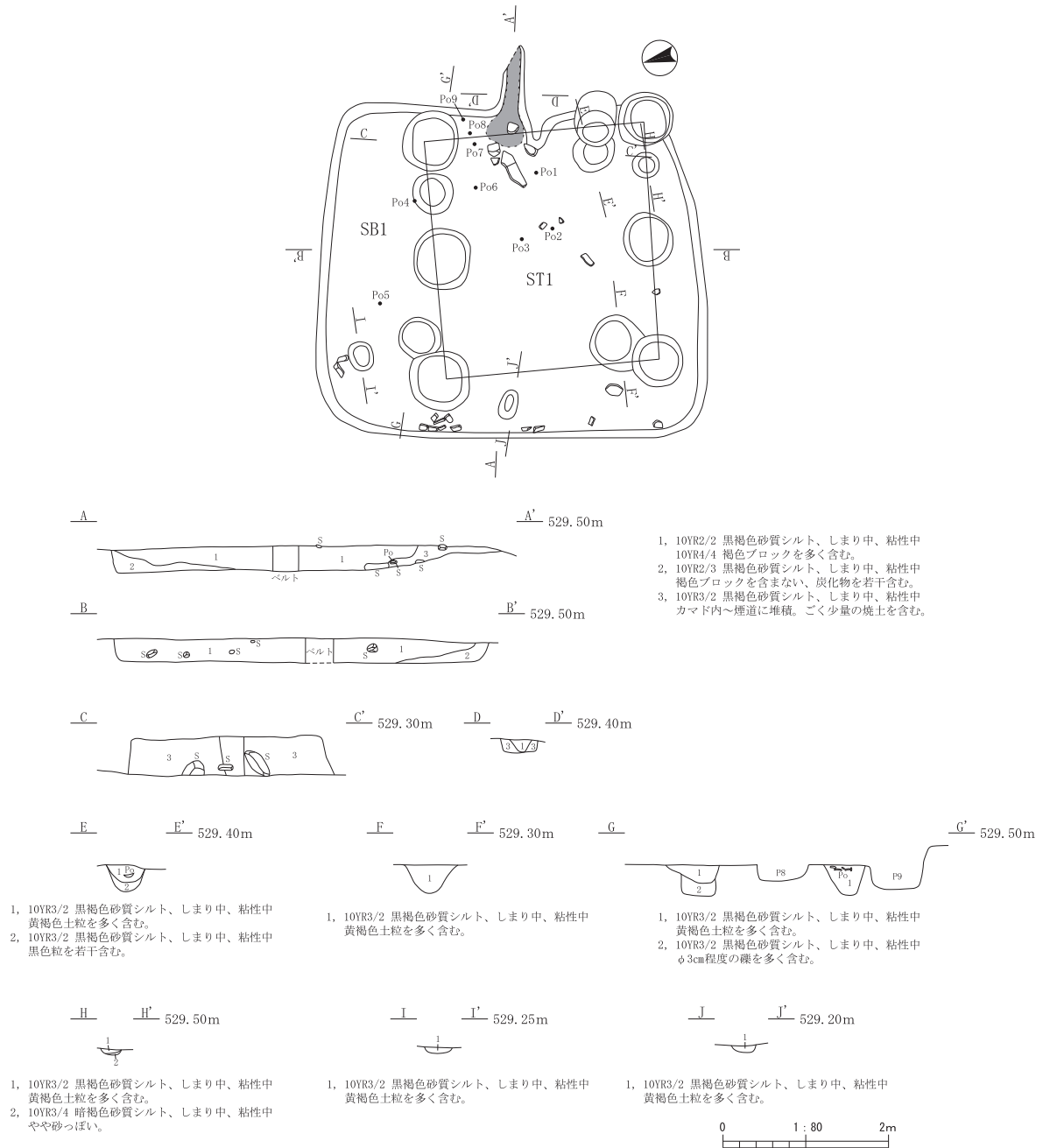
C3：底部を持ち多孔。

壺形土器 主な用途が貯蔵あるいは祭祀に用いられたと推測される容器で、外面整形がミガキ中心となる場合を壺とする。

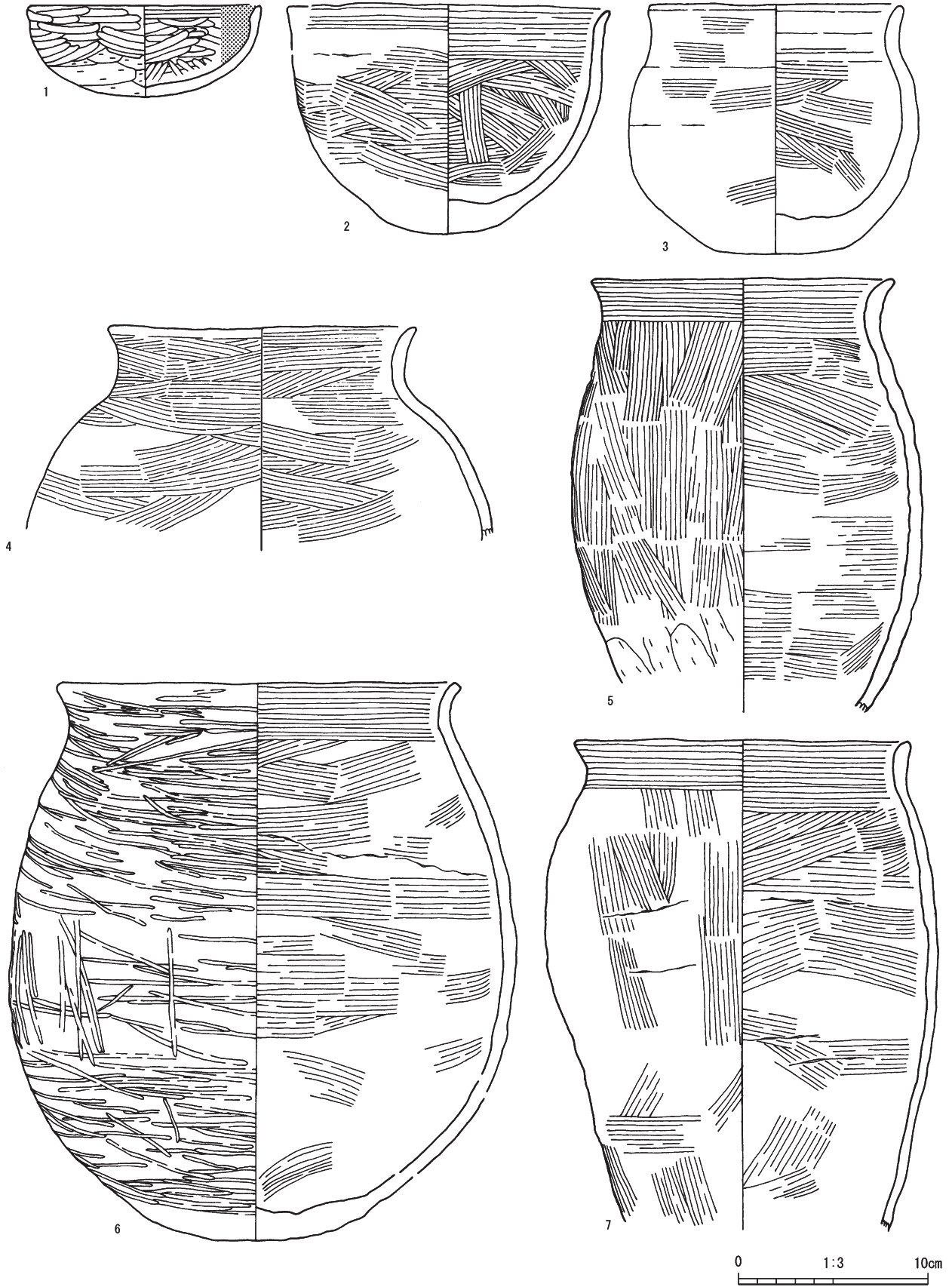
ミニチュア土器 手づくねで成形され、通常の法量より著しく小さい土器類をミニチュア土器とする。

石製品・土製品

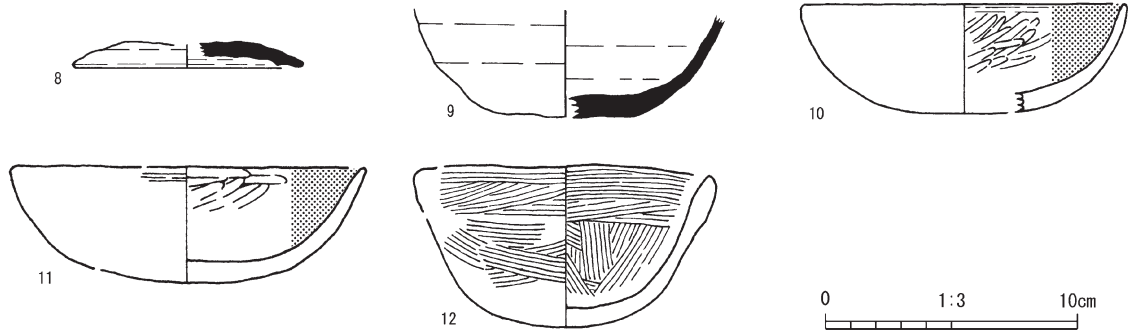
今回の発掘調査では、土器類の他に石製品・土製品が出土した。石製品としては、SB12から出土し



第25図 SB1遺構図



第26図 SB1出土遺物（その1）



第27図 SB1出土遺物（その2）

た管玉が挙げられる。また、土製品としては紡錘車や土錘が出土した。市内では矢原遺跡群で滑石製紡錘車の出土例がある。

SB1

位置 A1、B1グリッド

平面形・規模 4.0m × 4.5m でほぼ正方形を呈する。

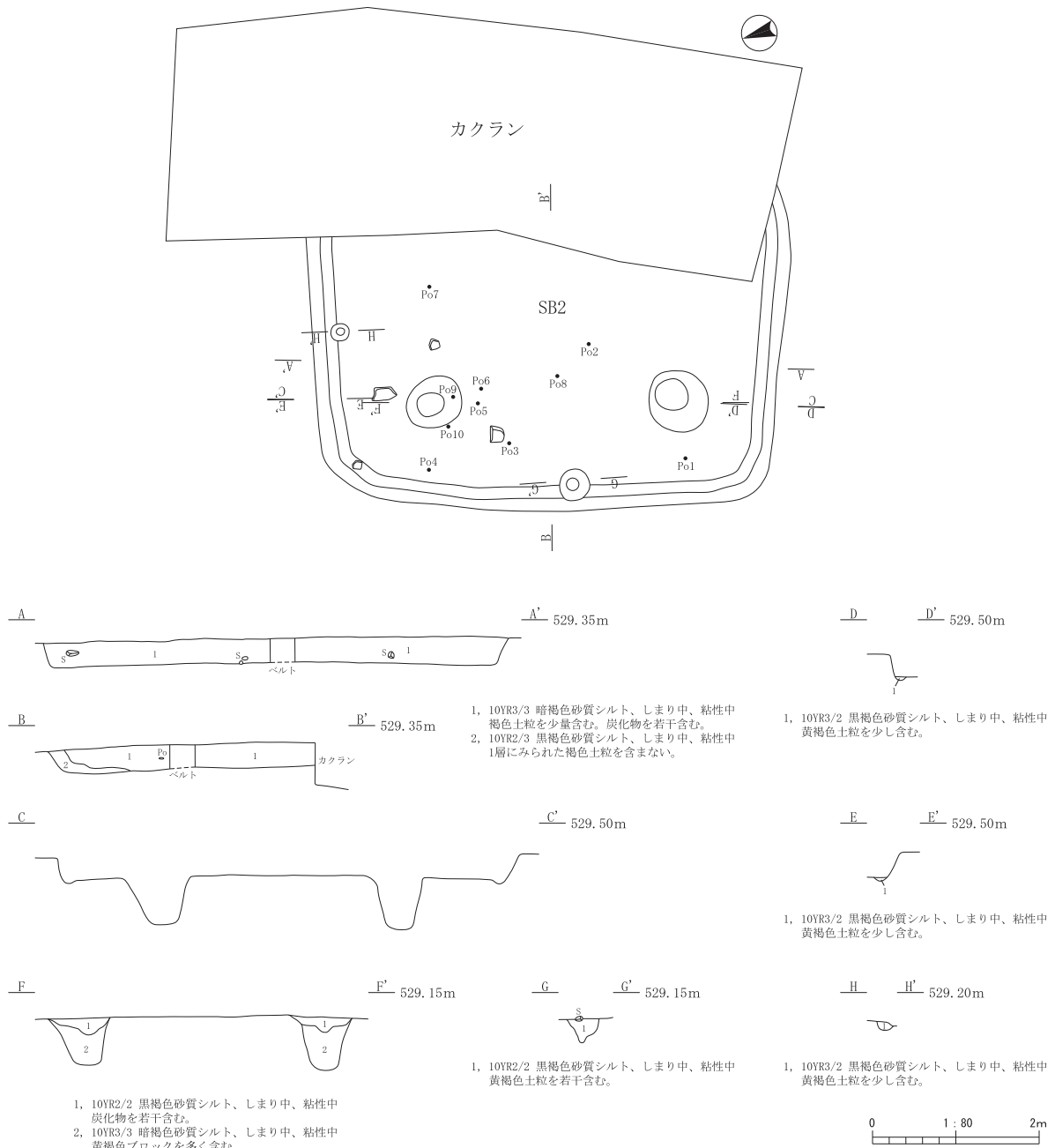
壁・堆積土 残存している壁高は約0.3mで、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は全3層を確認した。

床面 貼り床は確認されず、床面直上では特にカマド周辺に遺物が多く確認されている。本遺構は掘立柱建物跡であるST1と重複関係にあるため平面形内外には多くのピットが確認された。これらピットのうちST1を構成する遺構以外のピットがSB1の支柱穴を構成すると考えられる。

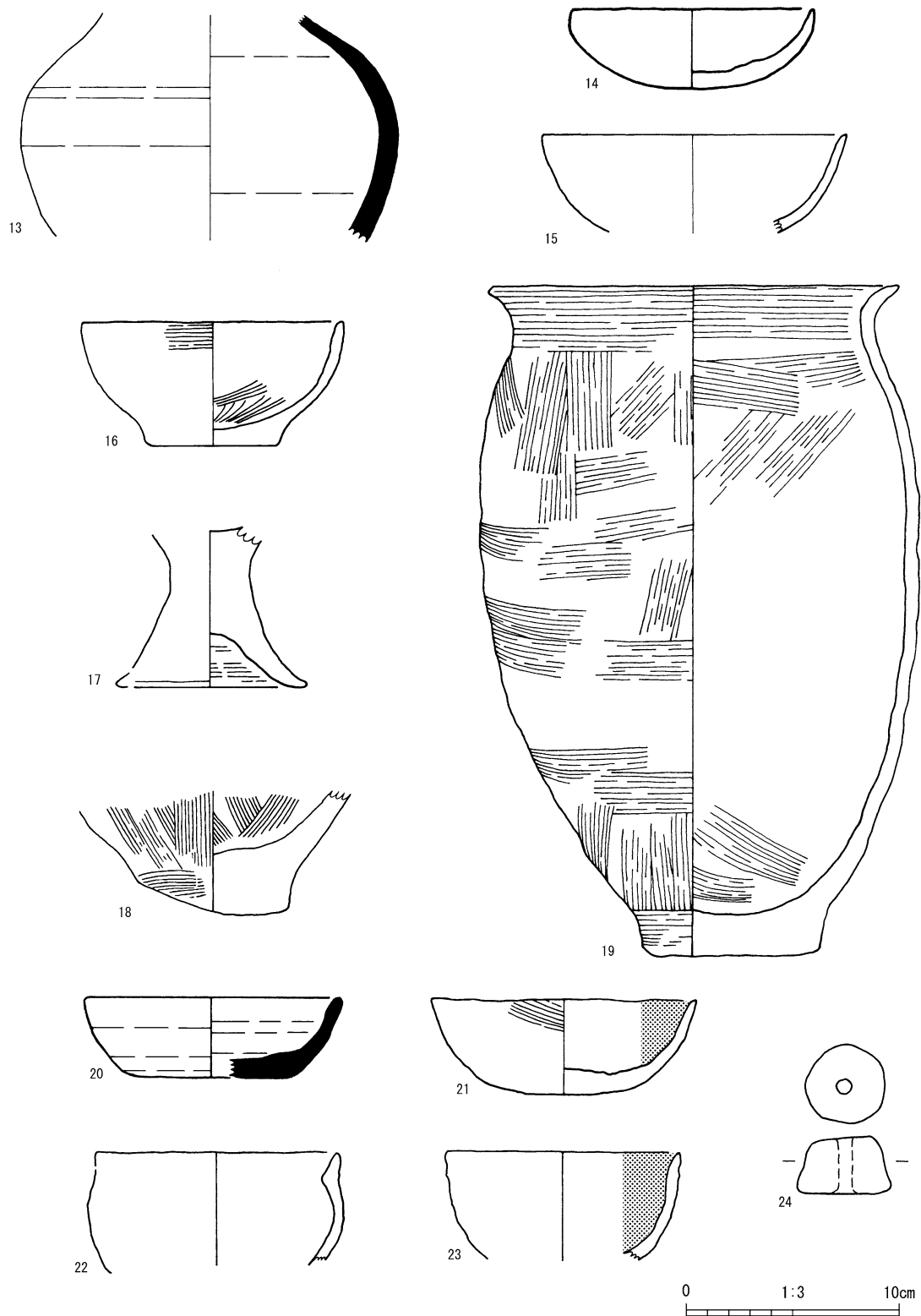
カマド 東壁中央付近に構築され、燃焼部及びその中央の支柱石の残存状況は良好であった。袖石は残存していないが、焼土の範囲及びカマド袖で確認された土器の出土位置から、その燃焼部の規模が推測できる。煙道も先端付近が明治以降の攪乱によって若干の削平を被っている以外は、概ね良好に残存しており、幅40cm、長さ170cmで煙道内にも焼土の分布が見られた。カマド袖付近及び前面からは土器類が多く出土しており、本遺構廃絶時の時期比定の検討材料である。

重複関係 本遺構に伴うピット以外に、掘立柱建物跡ST1となるピット群と切り合い関係を持つ。ST1の柱穴がSB1の壁を切っていることから、SB1が先行し、SB1廃絶・埋没後にST1が構築されたという前後関係が把握できる。

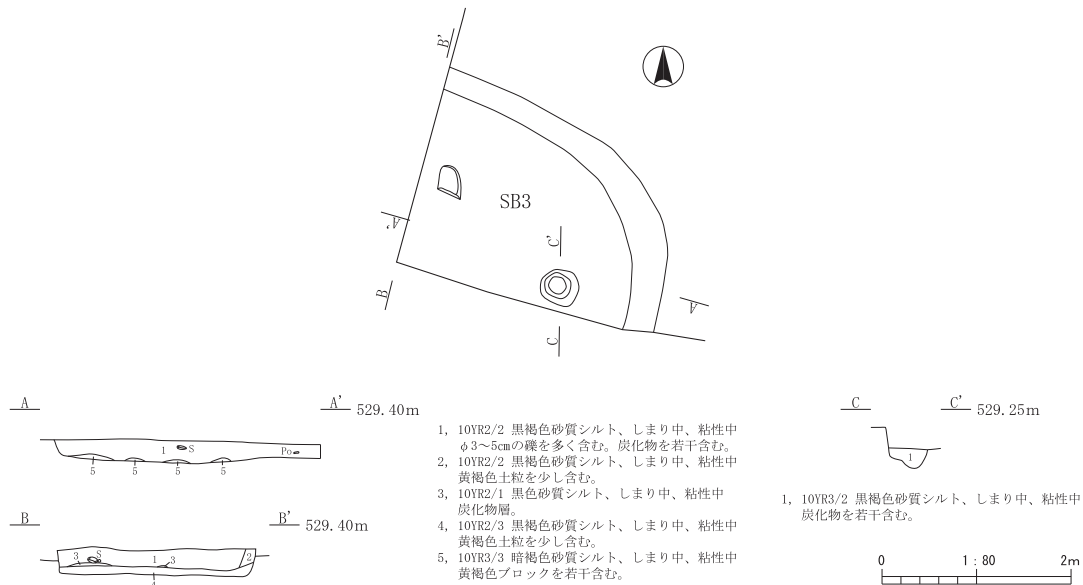
出土遺物 SB1ではカマドの前面及び袖から多くの土器が出土している。これらのセットには須恵器は存在せず、覆土から須恵器坏蓋A等が数点出土したのみであった。遺構に伴う土師器としては口縁部をやや外反させる意識をもつ坏A3を1点図化した。煮炊具としては胴部が張る形の甕と長胴の甕が相伴している。ここに、小型の甕が加わり本遺構の土器組成となっている。



第28図 SB2遺構図



第29図 SB2出土遺物



第30図 SB3遺構図

SB2

位置 B1、B2、C1グリッド

平面形・規模 (3.2m) × 5.5m と約半分が残存していないが、ほぼ正方形を呈すると推定される。

壁・堆積土 残存している壁高は約0.3mで、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は全2層を確認し、外周に周溝を有する。

床面 貼り床は確認されておらず、遺構中央付近の床直上で土器類が多く出土した。また、径約80cmの主柱穴を2箇所確認している。また、遺構外周下場に沿って周溝、ピットが確認された。

カマド 確認していない。本遺構の東半分が近代の攪乱によって残存しておらず、この範囲にカマドが存在した可能性が高い。

重複関係 本遺構と重複関係にある遺構はない。

出土遺物 床直上からは、須恵器壺の胴部破片の他、土師器坏B、鉢、高坏、長胴の甕が出土している。坏Bは法量に差異がみられる。甕は成形時の歪みが著しく口径と底径の中心がずれている。調整は内外面ともナデ調整である。また覆土からは須恵器坏Aのほか土師器坏B、土製紡錘車が出土した。

SB3

位置 C1グリッド

平面形・規模 (2.8) m × (2.2) m が残存し、方形と推定される。

壁・堆積土 残存している壁高は約0.2mで、なだらかに立ち上がる。覆土は全5層を確認し、4層上に壁際堆積土である2層が堆積する。

床面 黄褐色土ブロックを含む5層が貼り床になると考えられる。

カマド 確認していない。本遺構の南側は調査外であり、この範囲にカマドが存在する可能性が高い。

重複関係 本遺構と重複関係にある遺構はない。

出土遺物 床直上から胴部下半分をケズリ調整した土師器甕が出土した。

SB4

位置 A2グリッド

平面形・規模 (4.5) m × (2.0) m が残存し、やや丸みをおびた方形と推定される。

壁・堆積土 残存している壁高は約0.2mで、なだらかに立ち上がる。覆土は全2層を確認し、1層下部には少量の炭化物が混入している。

床面 黄褐色土ブロックを含む2層が貼り床になると考えられる。また、床面には主柱穴となる可能性があるピット2基を確認している。

カマド 確認していない。本遺構の北側は調査外にあり、この範囲にカマドが存在する可能性が高い。

重複関係 本遺構は南接するSB5と重複関係にあり、SB4がSB5を切る。このことから遺構構築の時間的推移はSB5構築・廃絶からSB4構築・廃絶となる。

出土遺物 本遺構はSB5と重複関係にあり、出土遺物の帰属を慎重に検討する必要がある。このため明確に本遺構から出土したといえる遺物は土錘のみである。

SB5

位置 A2、B2グリッド

平面形・規模 3.9m × 5.0m の南北に長い長方形を呈する。

壁・堆積土 残存している壁高は約0.2mで、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は3～7層の全5層を確認し、4層と6層は炭化物層であった。炭化物には建築部材は確認されていないが、本遺構は焼失遺構と考えられる。

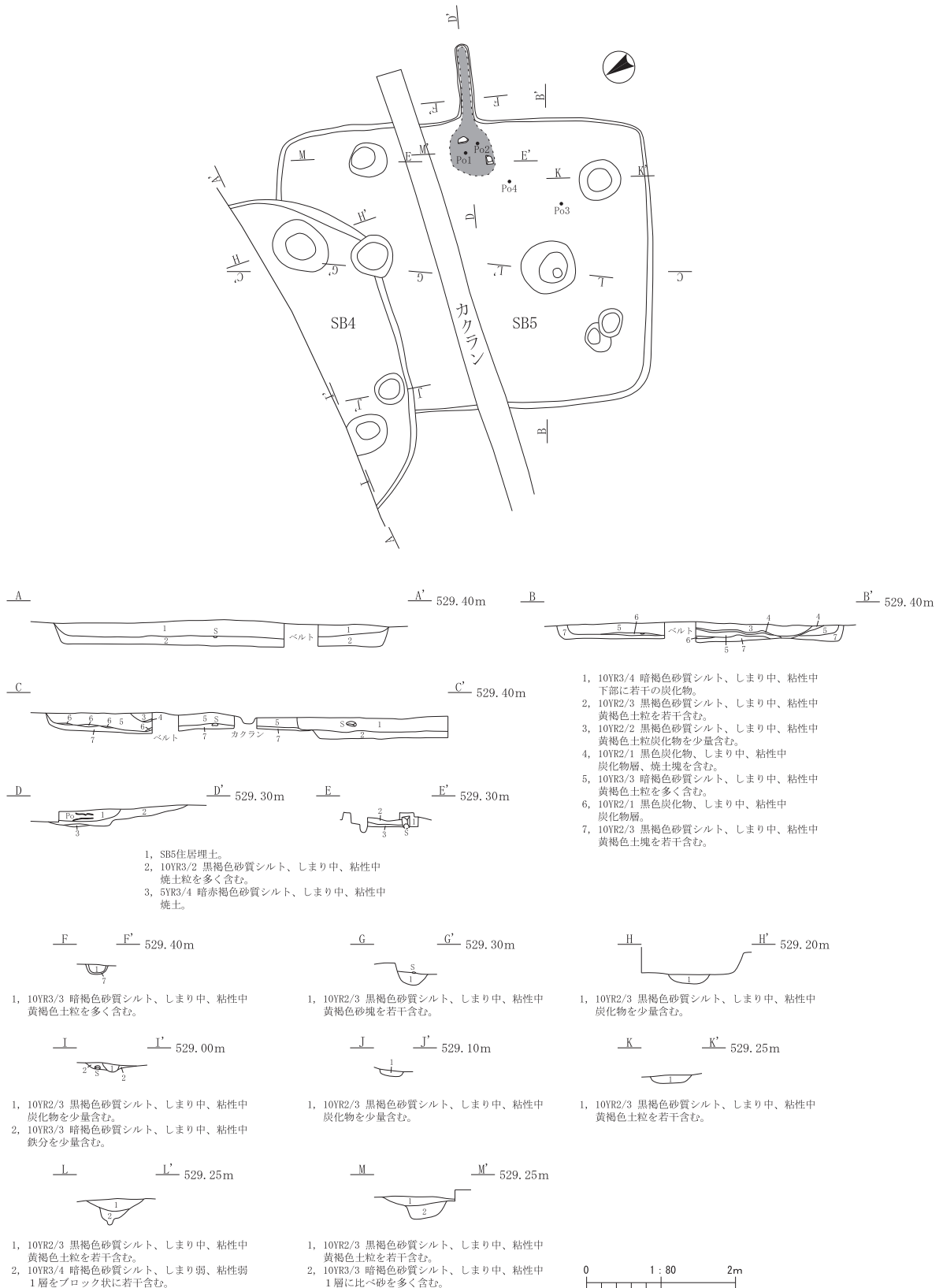
床面 貼り床は確認していない。また、床面には主柱穴となる可能性があるピット2基を確認した。

カマド 東壁中央付近に構築される。燃焼部及び煙道の残存状況は良好で、燃焼部の右袖には構築材に使われた礫が残存し、左袖部分にはカマド構築材の抜き取り痕跡が見られた。

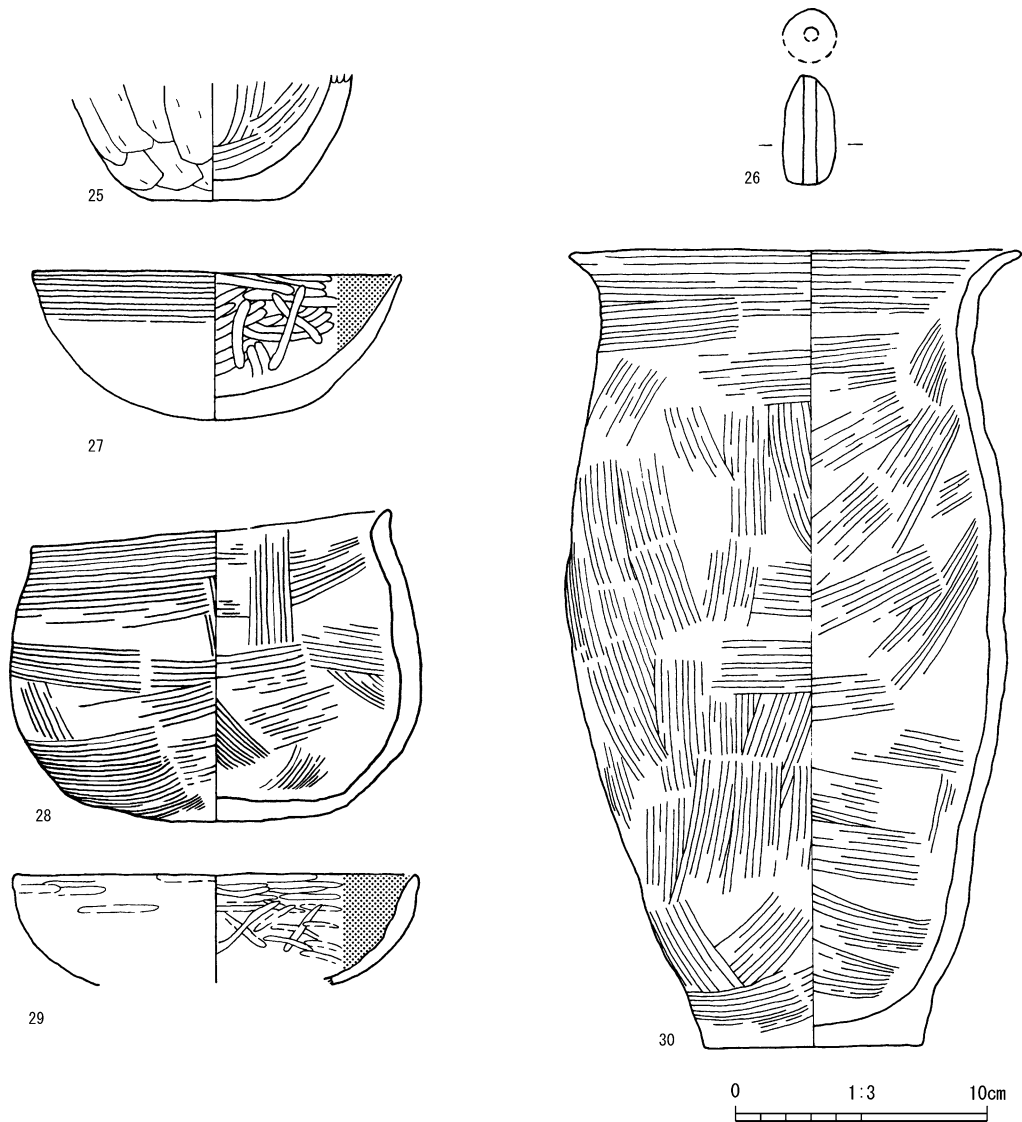
重複関係 本遺構は南接するSB4と重複関係にあり、SB5がSB4に先行する。

出土遺物 SB5の床面及びカマドからは須恵器は確認されなかった。遺構に伴う土師器としては、口径の大きい坏Bと鉢、長胴の甕が共伴している。このうち坏は内面を丁寧にミガキ調整し、黒色処理されている。

第3章 栄町遺跡（第3次）発掘調査



第31図 SB4・5遺構図



第32図 SB3・4・5出土遺物

SB6

位置 B2グリッド

平面形・規模 4.7m × 4.8m の正方形を呈する。

壁・堆積土 残存している壁高は約0.4mで、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は全6層を確認した。このうち2層上面には南西から北東に向かって人為的に投げ込まれたような形で多量の礫と土器類が集積していた。これに加え、1層と2層からは少量の焼土や炭化物を確認している。

床面 黄褐色土ブロックを多く含む6層が貼り床になる。床面には主柱穴となるピット4基を確認したが、6層の貼り床上面ではピットの検出が困難であった。

カマド 東壁中央付近に構築される。構築材として右袖には砂岩の切石が使用されていたようで、手前に一部残存しており、奥には抜き取り痕跡が観察された。燃焼部及び煙道の残存状況は良好で、燃焼部の焼土からはミニチュア土器が出土している。

重複関係 本遺構と重複する遺構はないが、南西隅が攪乱によって残存していない。

出土遺物 カマド付近からは前述のミニチュア土器の他、須恵器坏 G が出土している。覆土中からは須恵器すり鉢、短頸壺や体部下半にケズリ調整が見られる土師器坏 B、高坏などが出土した。これらの遺物の多くは2層上面で礫の集積間から確認されたものである。

SB7

位置 A3グリッド

平面形・規模 当初設定した調査区では本遺構の南西隅を一部分発掘する程度であったが、開発事業での影響範囲を勘案し、調査終了直前に調査範囲を北側に拡張した。平面形は(5.6) m × (3.2) m を確認し、正方形を呈すると推定される。

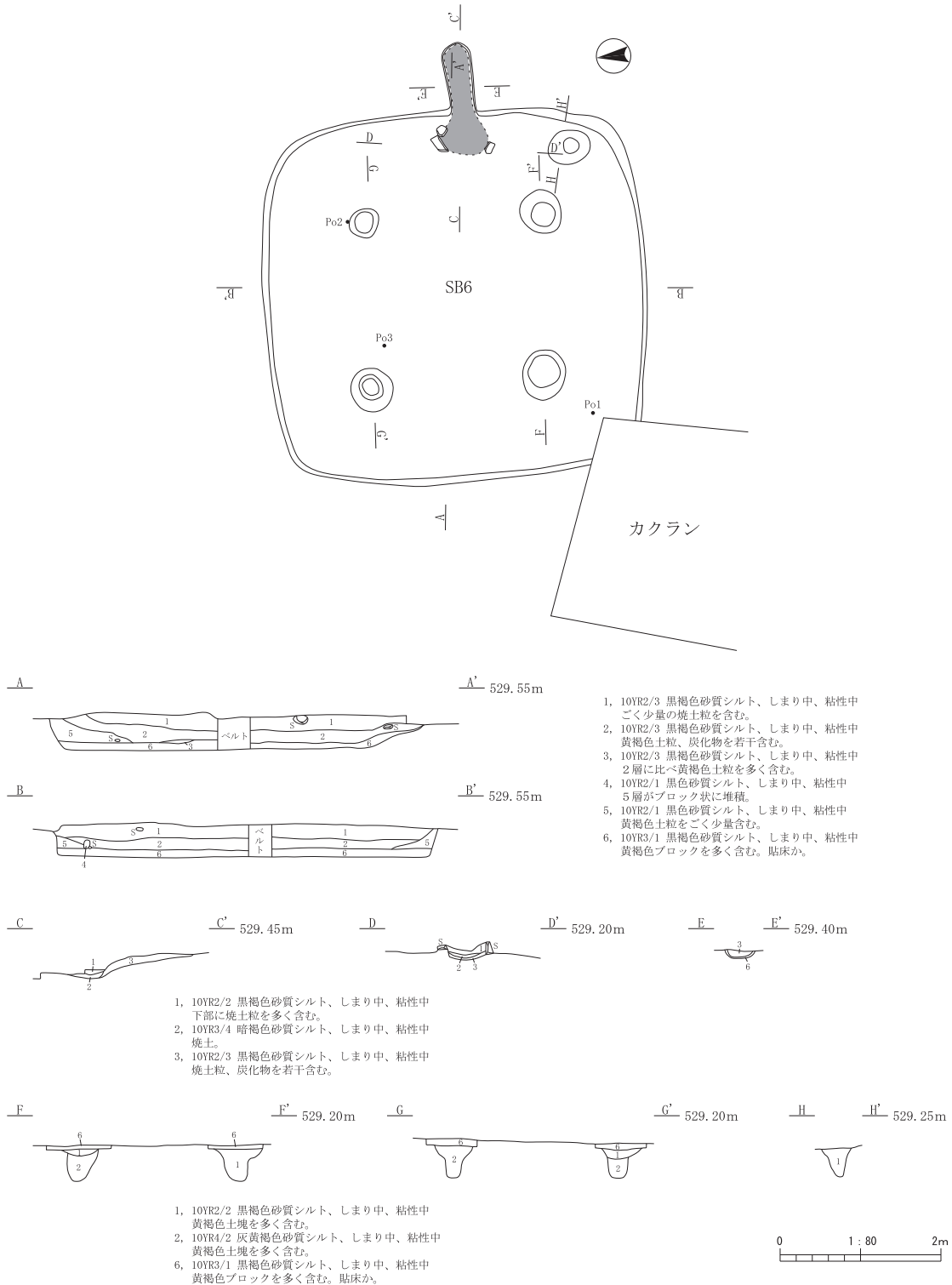
壁・堆積土 残存している壁高は約0.3m で、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は全6層を確認した。このうち4層上部からはSB6と同様に礫群と土器類が多量に、焼骨が少量出土している。特にSB7で顕著なのは、土器類に完形又は半完形品の須恵器坏、須恵器坏蓋が多いことである。

床面 黄褐色土ブロックを多く含む6層が貼り床になると考えられる。床面には支柱穴となりそうなピット2基を確認した。

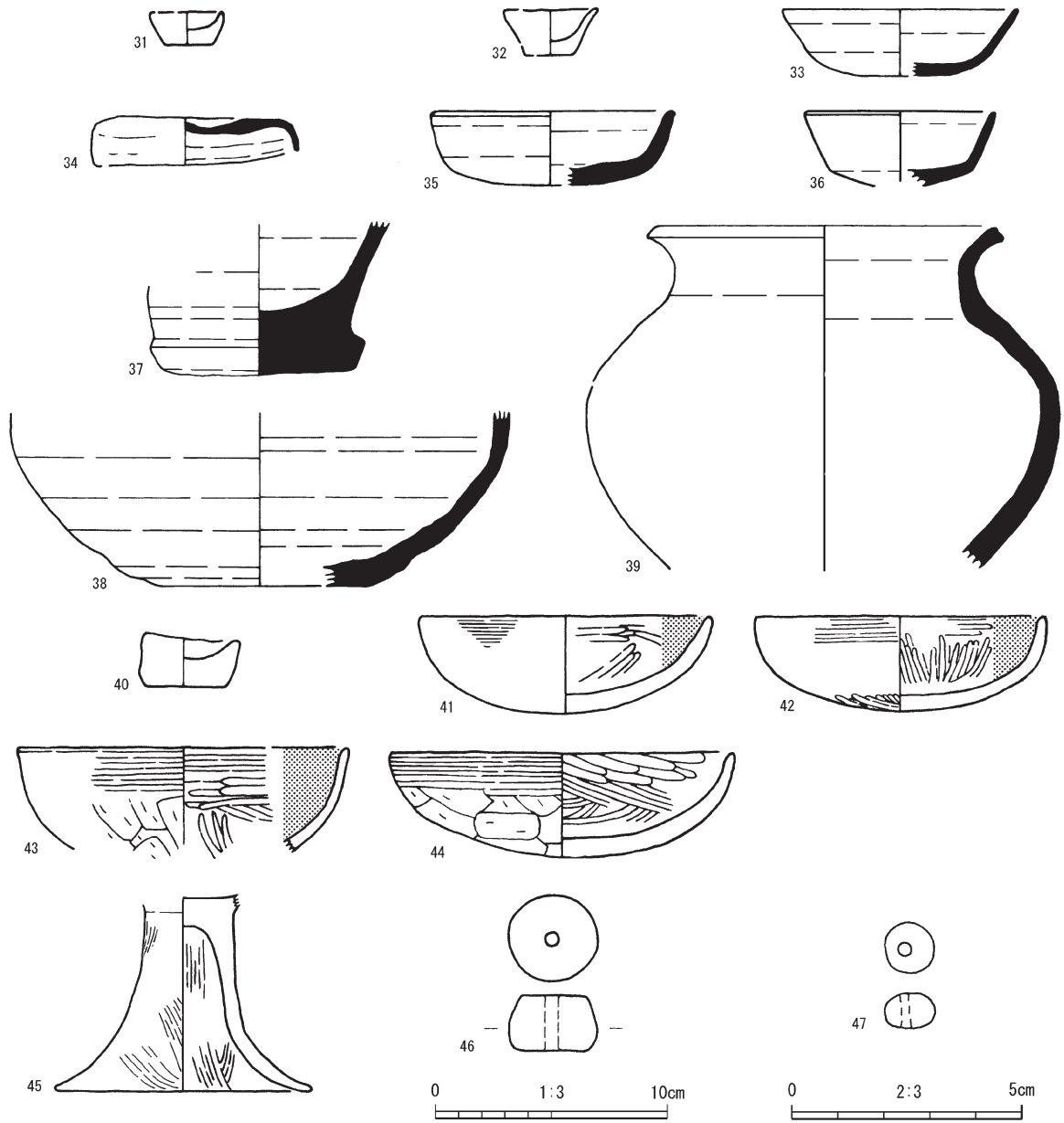
カマド 確認していない。調査区外にカマドが存在する可能性が高い。

重複関係 本遺構の南東隅付近を P72 が切っている。

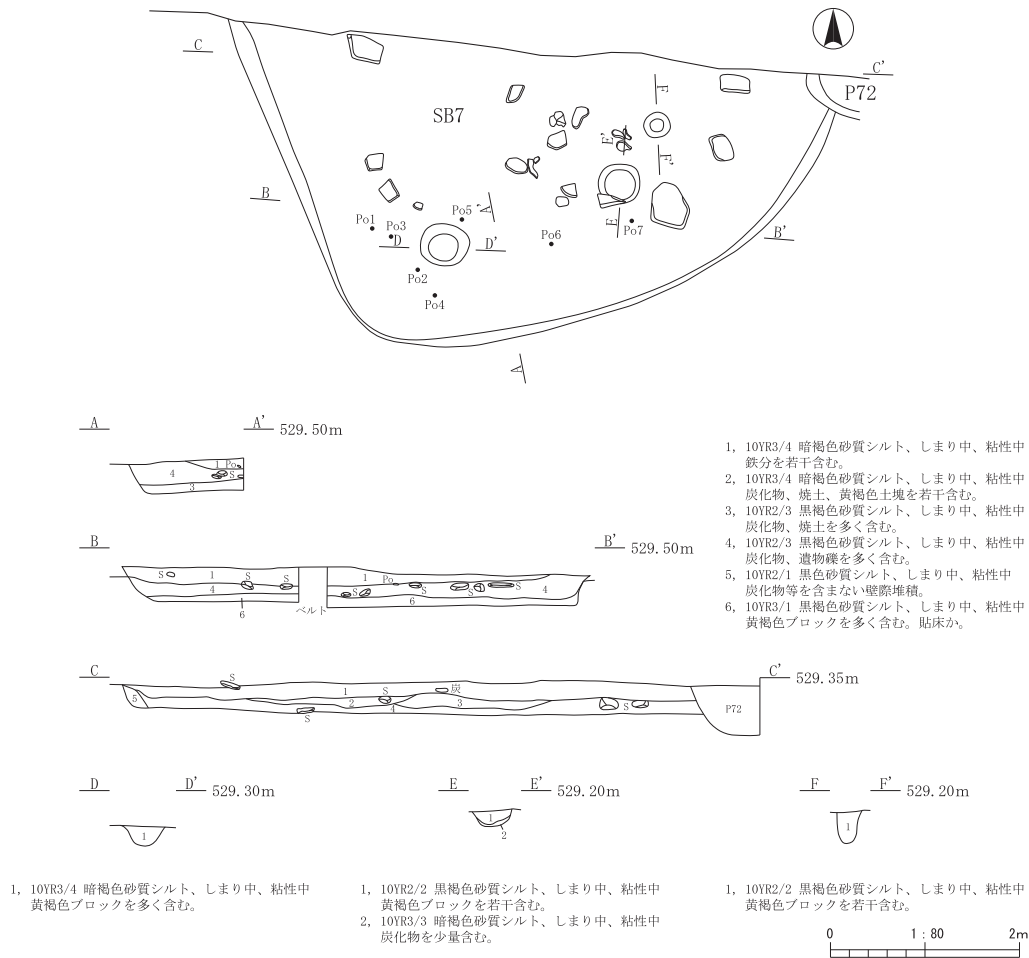
出土遺物 床面及びカマド付近からは体部下半に稜を持つ土師器坏 D や、鉢、甕が出土した。また、覆土4層上部からは廃棄されたと推察できる礫間から須恵器主体の土器類が多量に出土している。これらは須恵器坏蓋のうち、かえりを持つ坏蓋 A とかえりを持たない坏蓋 B が混在し、また坏身も高台を持たない坏 A と高台を持つ坏 B が混在する様相を見せる。坏蓋 B は直径約15cm以上、坏 B は直径約14cm、坏 A は直径約12~13cmに分布の中心があり定型的といえる。



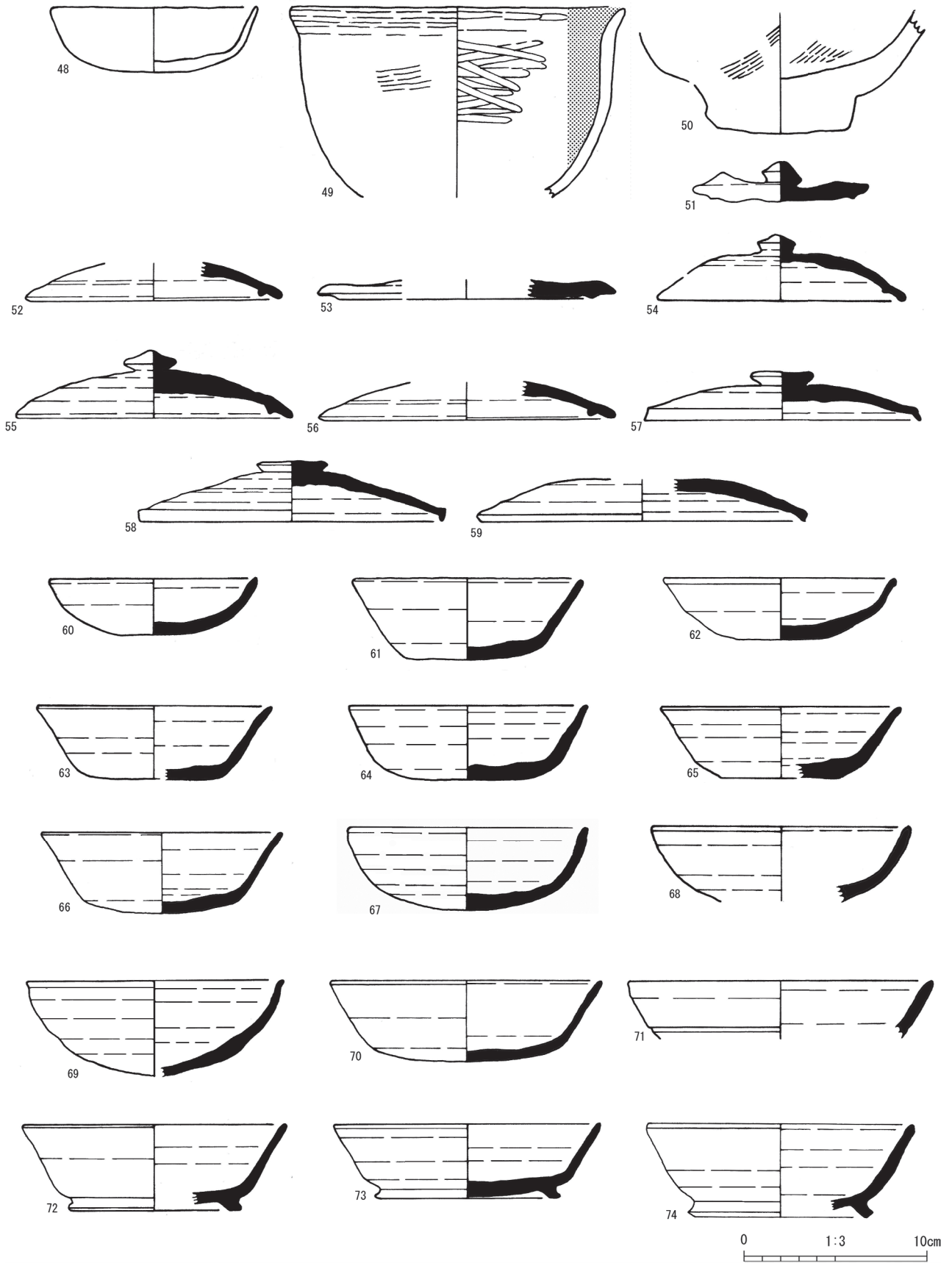
第33図 SB6遺構図



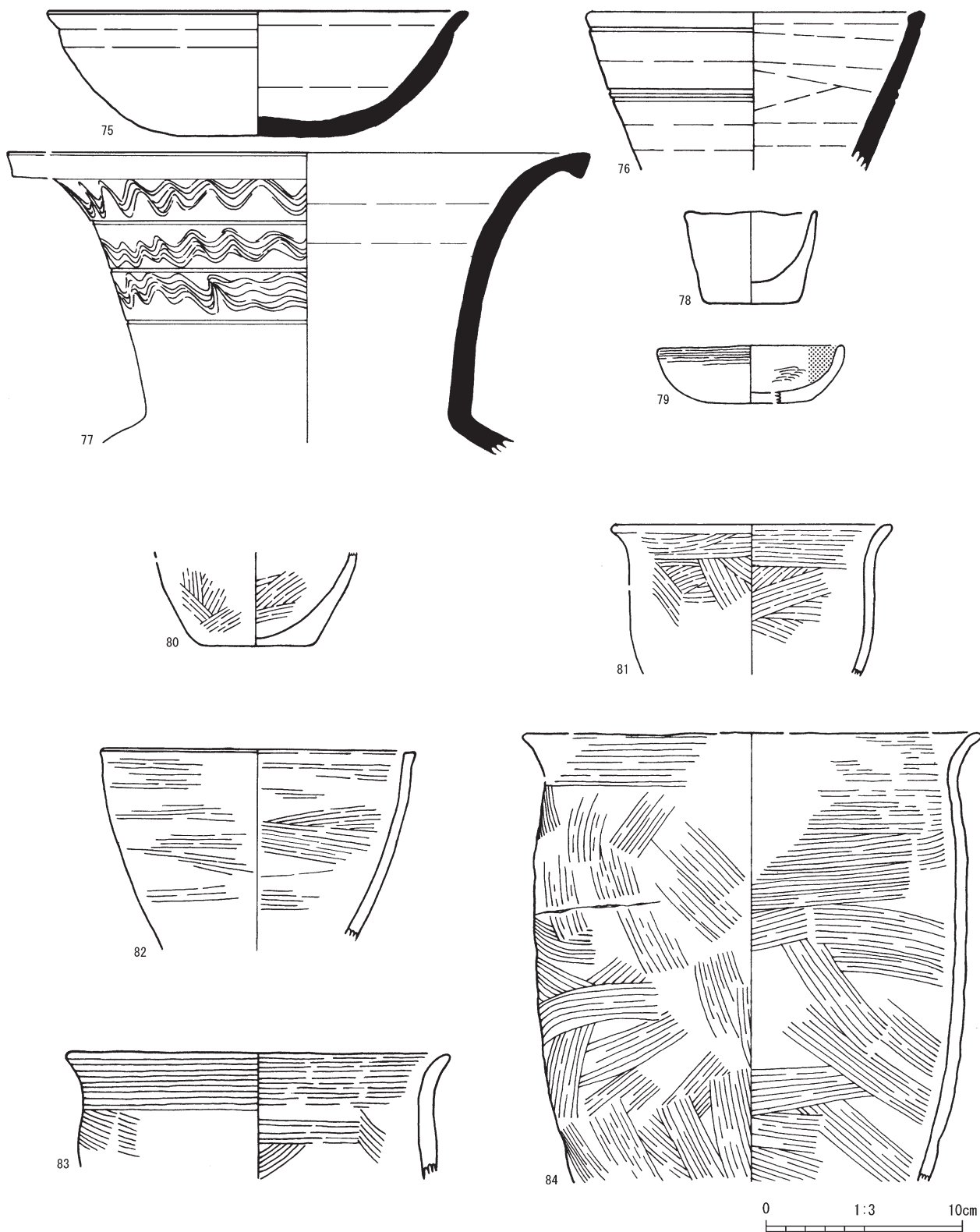
第34図 SB6出土遺物



第35図 SB7遺構図

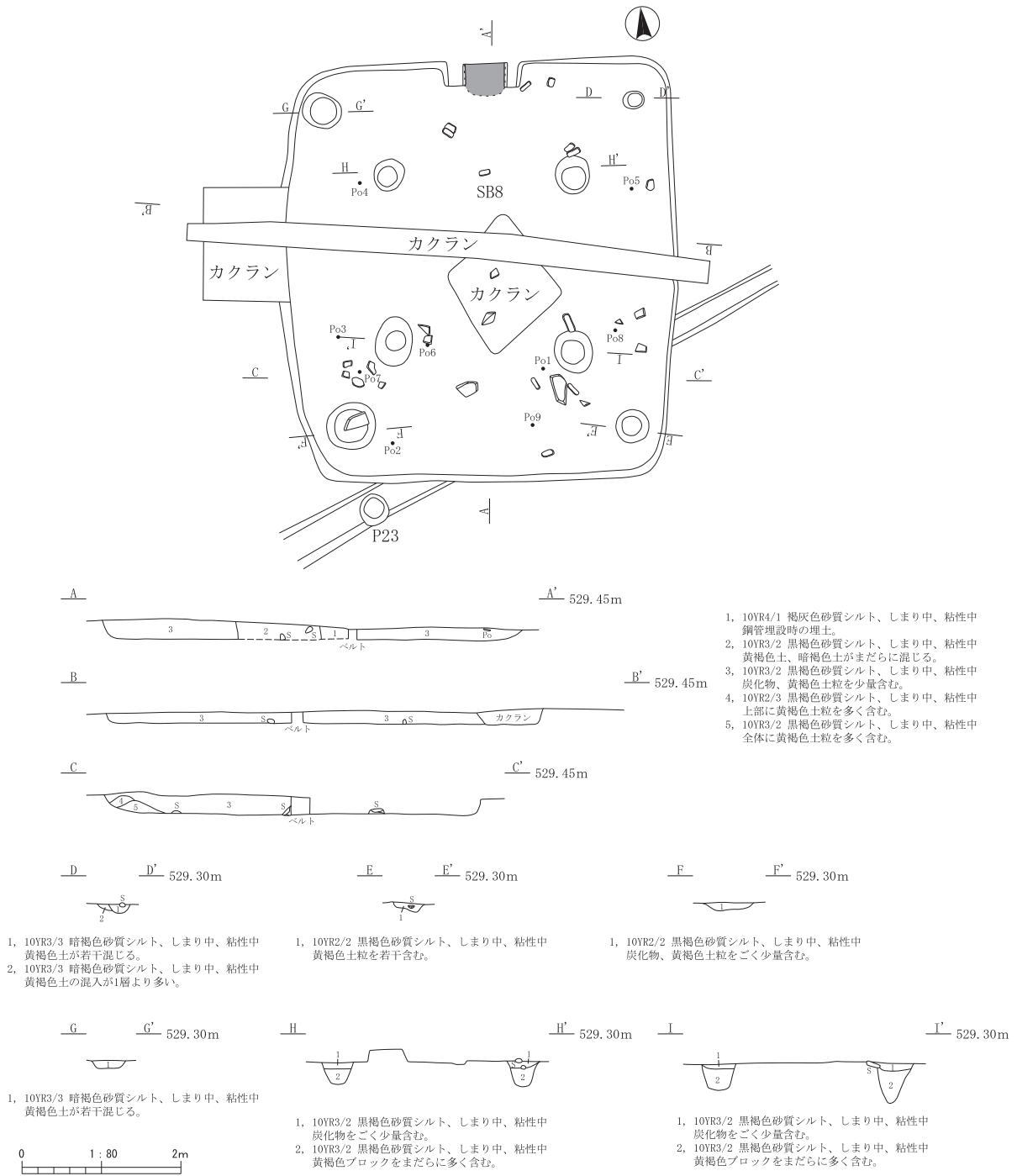


第36図 SB7出土遺物（その1）

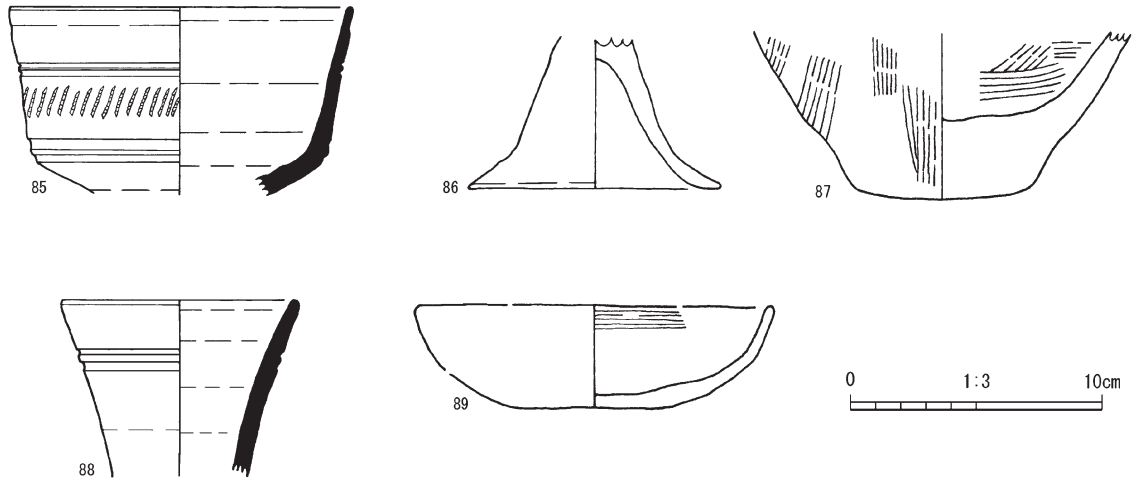


第37図 SB7出土遺物（その2）

第3章 栄町遺跡（第3次）発掘調査



第38図 SB8遺構図



第39図 SB8出土遺物

SB8

位置 A3、A4、B3、B4グリッド

平面形・規模 平面形は5.3m × 4.7mで、ほぼ正方形を呈する。遺構中央部には東西に近現代の鋼管敷設による攪乱が見られる。また西壁中央付近、遺構中央付近も近代以降の攪乱により影響を受けていた。

壁・堆積土 残存している壁高は約0.2mで、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は全5層を確認した。

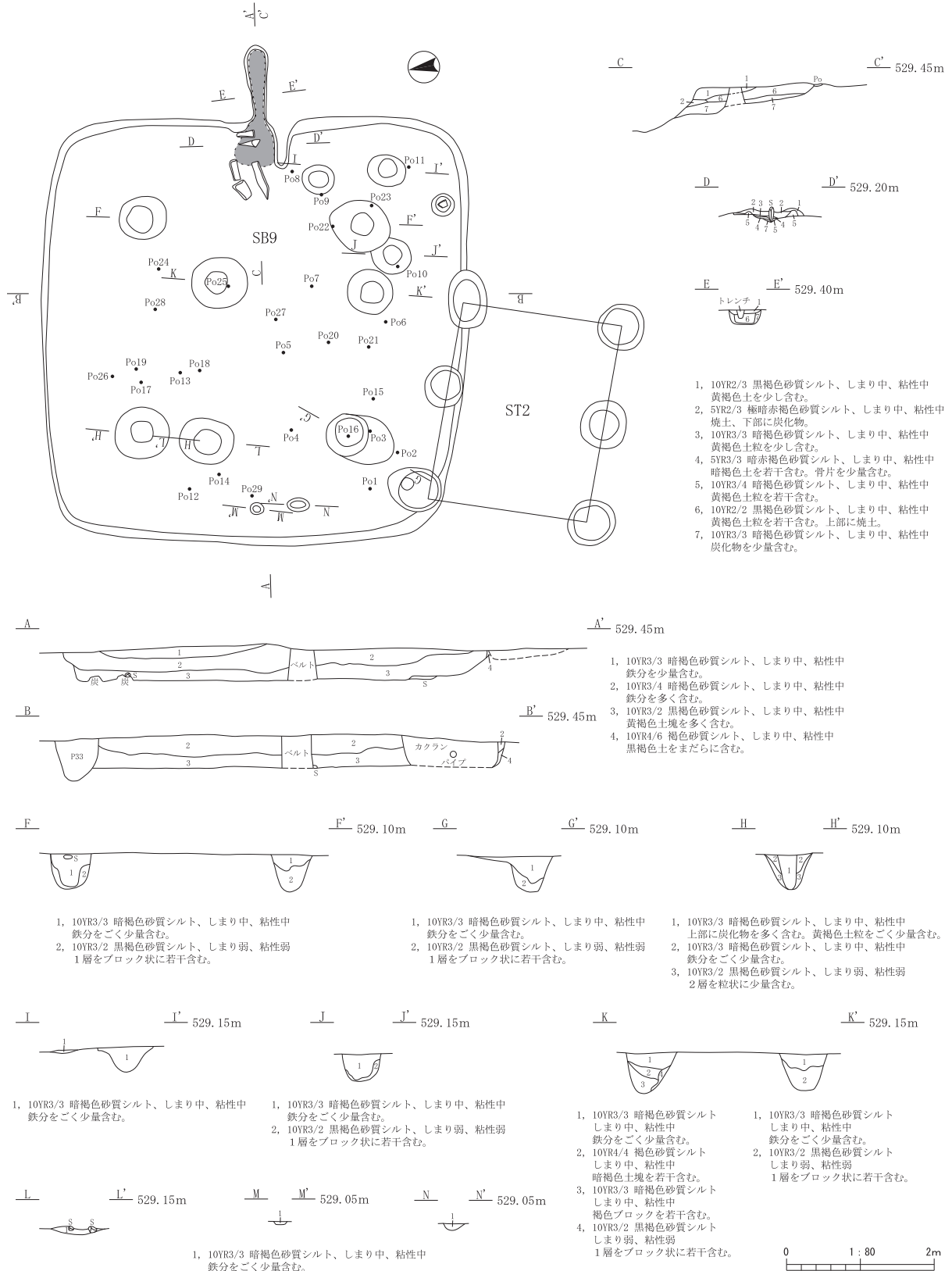
床面 貼り床は確認されていない。床面には支柱穴となりそうなピット4基を確認したほか、遺構四隅にも床面にピットが存在する。

カマド 北壁中央付近に濃密な焼土の分布が確認された。袖石や支柱、煙道といった他の竪穴建物跡にみられるカマドの特徴は見られていないが、この箇所にかマドが存在した可能性がある。また、西壁中央付近の攪乱箇所でも、覆土中に焼土が主体的に混入している。このことから西壁中央にかマドが存在した可能性もある。

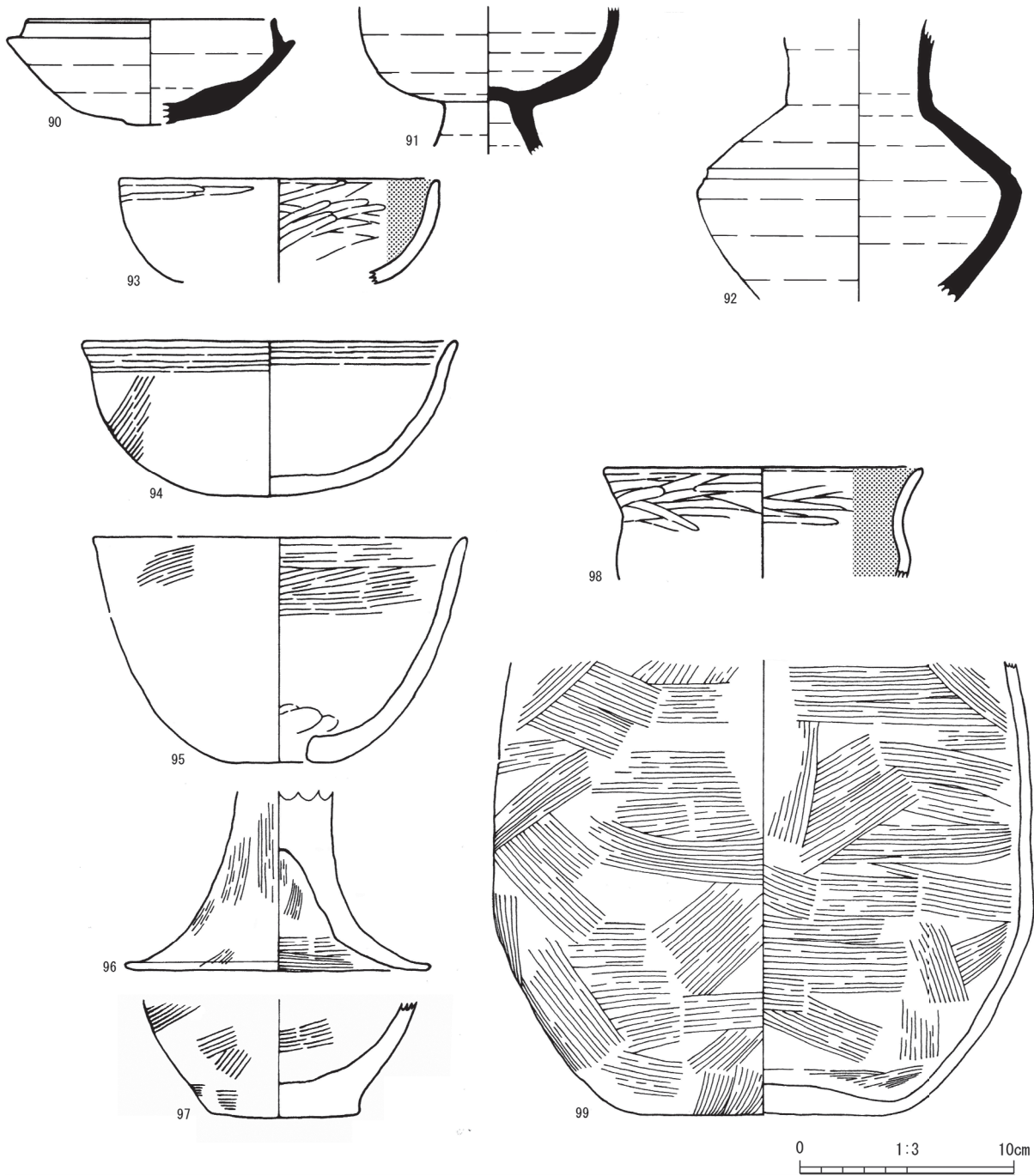
重複関係 本遺構は調査区内を南西から北東にはしる溝跡を切っている。また本遺構は、近世以降の攪乱、鋼管敷設範囲に切られる。

出土遺物 SB8には良好に残存しているカマドは確認できず、したがって他の竪穴建物跡のようなカマド付近からの土器の出土もない。床面からは体部に工具押し付けによる斜線状の意匠をもつ深さのある須恵器鉢、接合部が中実にならない土師器高坏の脚部などが出土している。なお、前者の鉢について類例を調査したところ、湖西市西笠子64号窯灰原中層＝Ⅱ層に同様の器形、意匠をもつ鉢が見られる（東海土器研究会2000）。

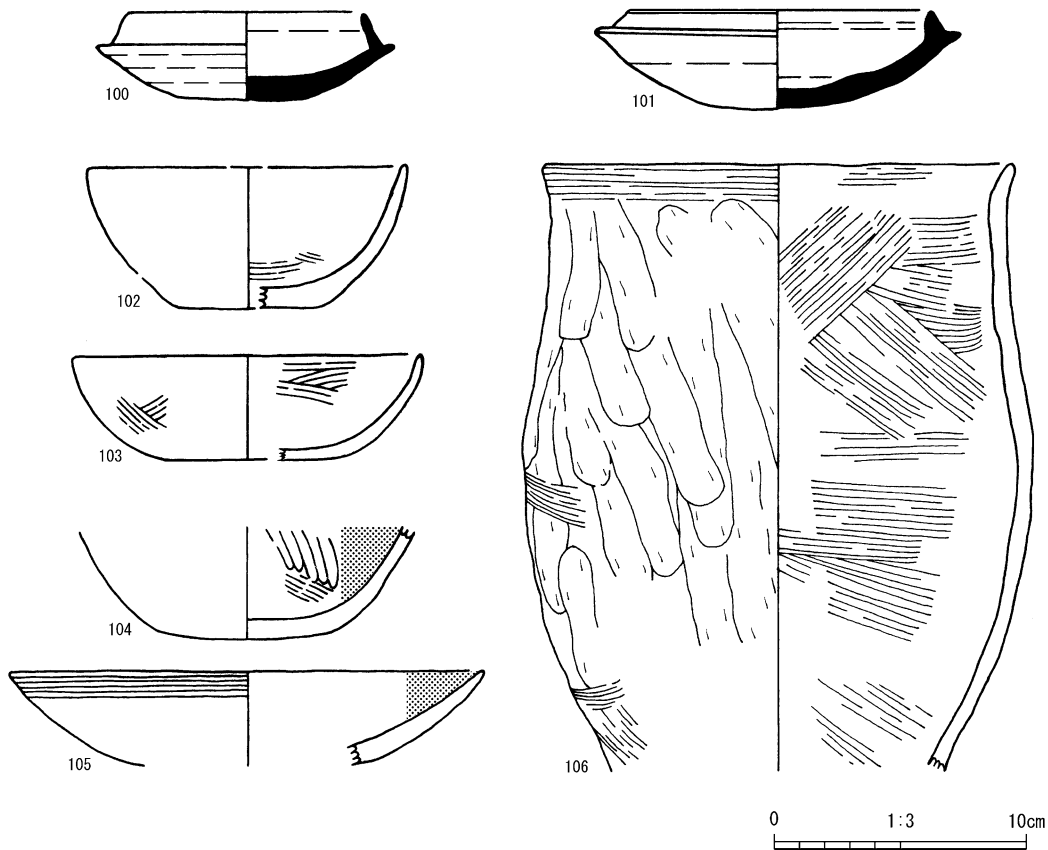
第3章 栄町遺跡（第3次）発掘調査



第40図 SB9遺構図



第41図 SB9出土遺物（その1）



第42図 SB9出土遺物（その2）

SB9

位置 A3、B3グリッド

平面形・規模 平面形は5.8m × 短軸5.8m の正方形を呈する。SB9はSB12とともに、今回の発掘調査で確認された最大規模の竪穴建物跡である。

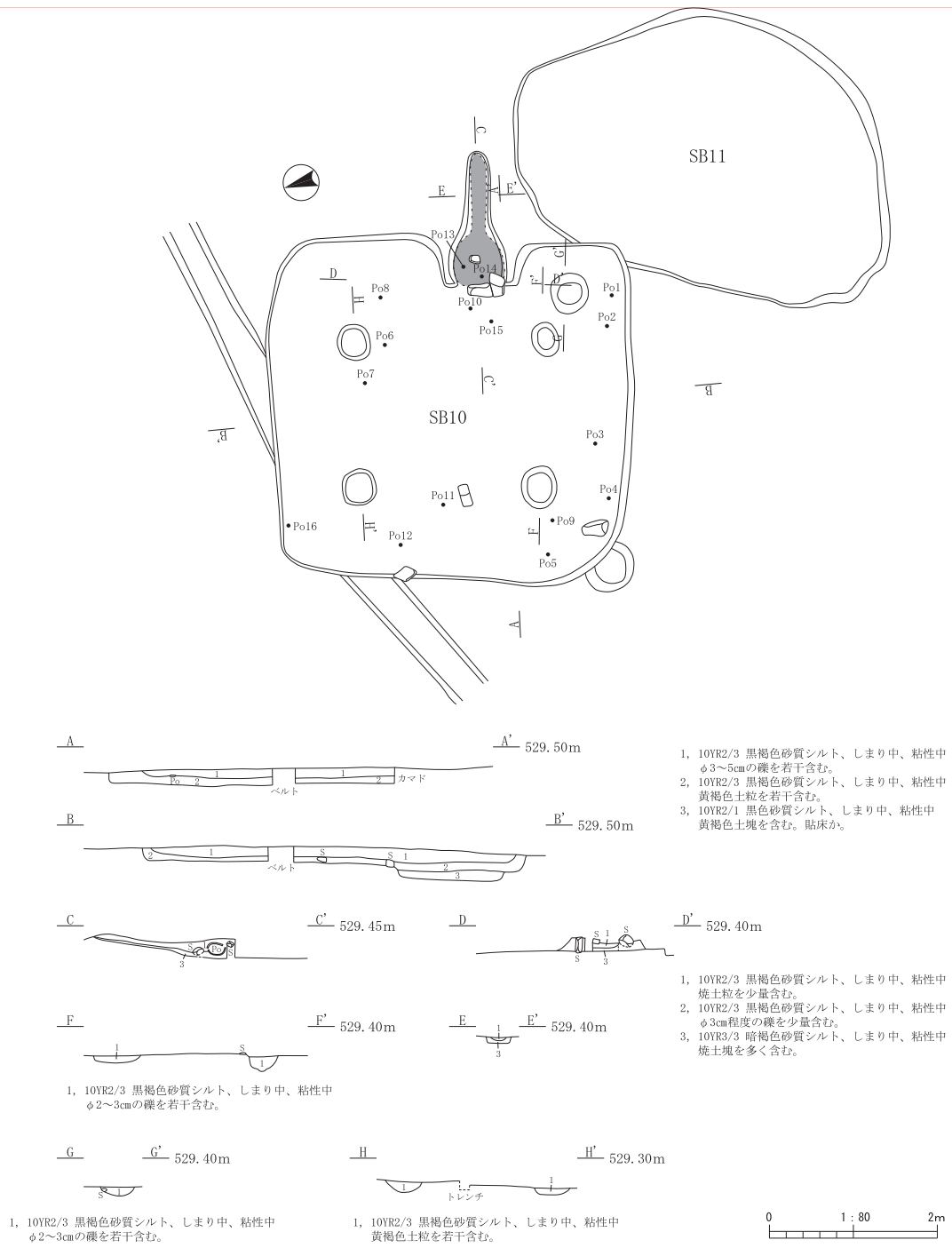
壁・堆積土 残存している壁高は約0.4mで、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は全7層を確認した。カマド以外の遺構内覆土の堆積は単純で、2層と3層がほぼ水平に堆積する。

床面 貼り床は確認されていない。床面直上には多くの土器類のほか、建築部材であるような炭化木材が西壁付近に散乱していた。この炭化材以外は覆土中及び床面に炭化材・焼土が確認されないことから本遺構自体は焼失遺構ではないと推定される。加えて本遺構の西に存在するSB5が焼失遺構と推定されるが、比較的小さな炭化物しか出土していないことから、SB9の炭化物はSB5に由来する可能性が高い。炭化物を除去し床面を精査した結果、主柱穴となりそうなピットを確認した。

カマド 東壁中央にカマドを確認した。支柱石や煙道も良好に存在しているが、両袖は確認できていない。

重複関係 本遺構は南西隅でST2と重複関係にある。

出土遺物 床面及びカマド付近からは須恵器坏H、高坏のほか、土師器の坏B、鉢、甌、甕などが出土している。いずれも確実に住居廃絶時に埋没したと考えられ、良好なセット関係にある。また、覆土中



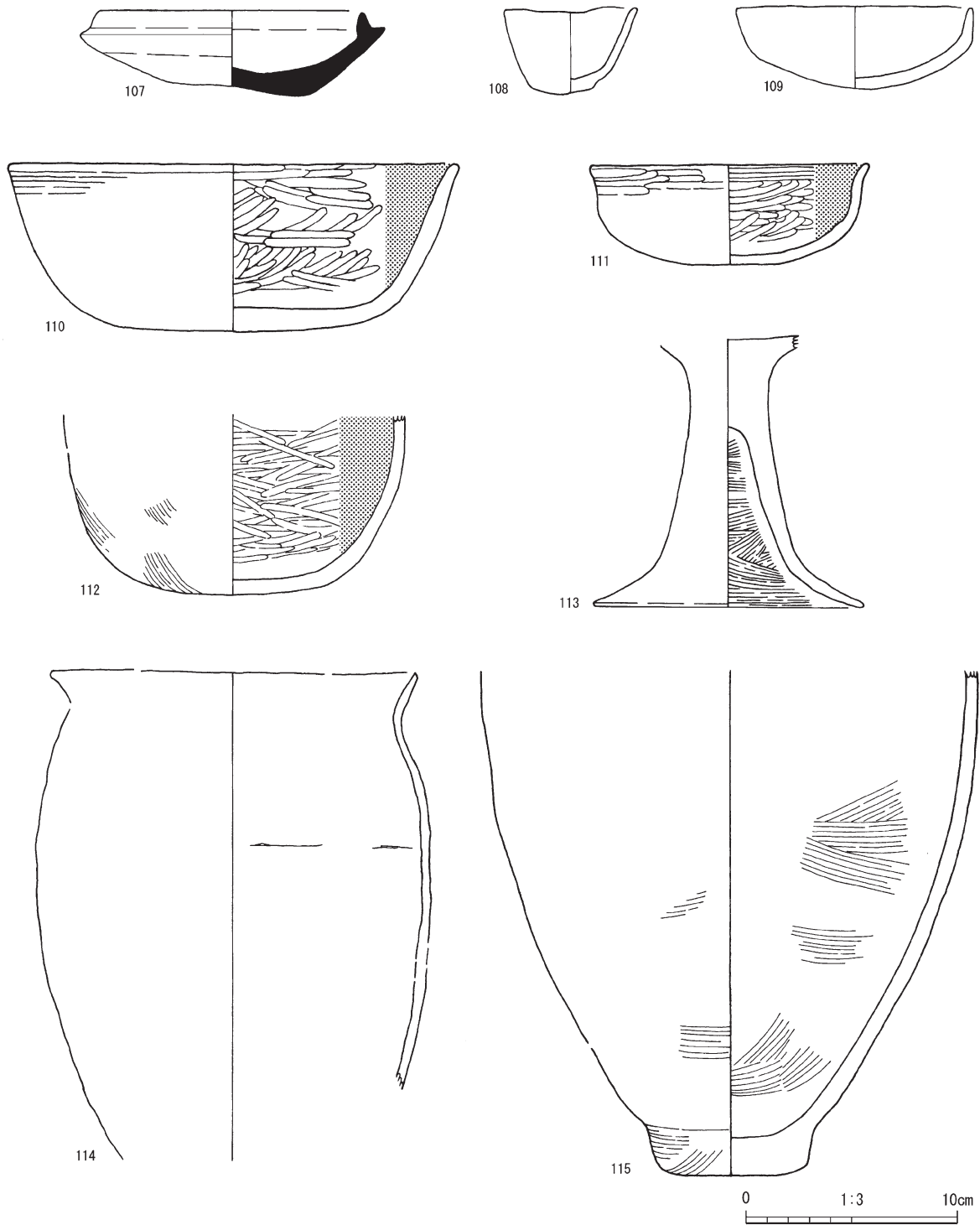
第43図 SB10遺構図

からも床面及びカマド出土土器とほぼ同内容の須恵器・土師器が出土しており、これらも一括として本遺構の土器の様相と捉えることができる。

SB10

位置 B2、B3、C2、C3グリッド

平面形・規模 平面形は4.1m × 4.3m の正方形を呈する。本遺構は、今回の発掘調査で確認された豎

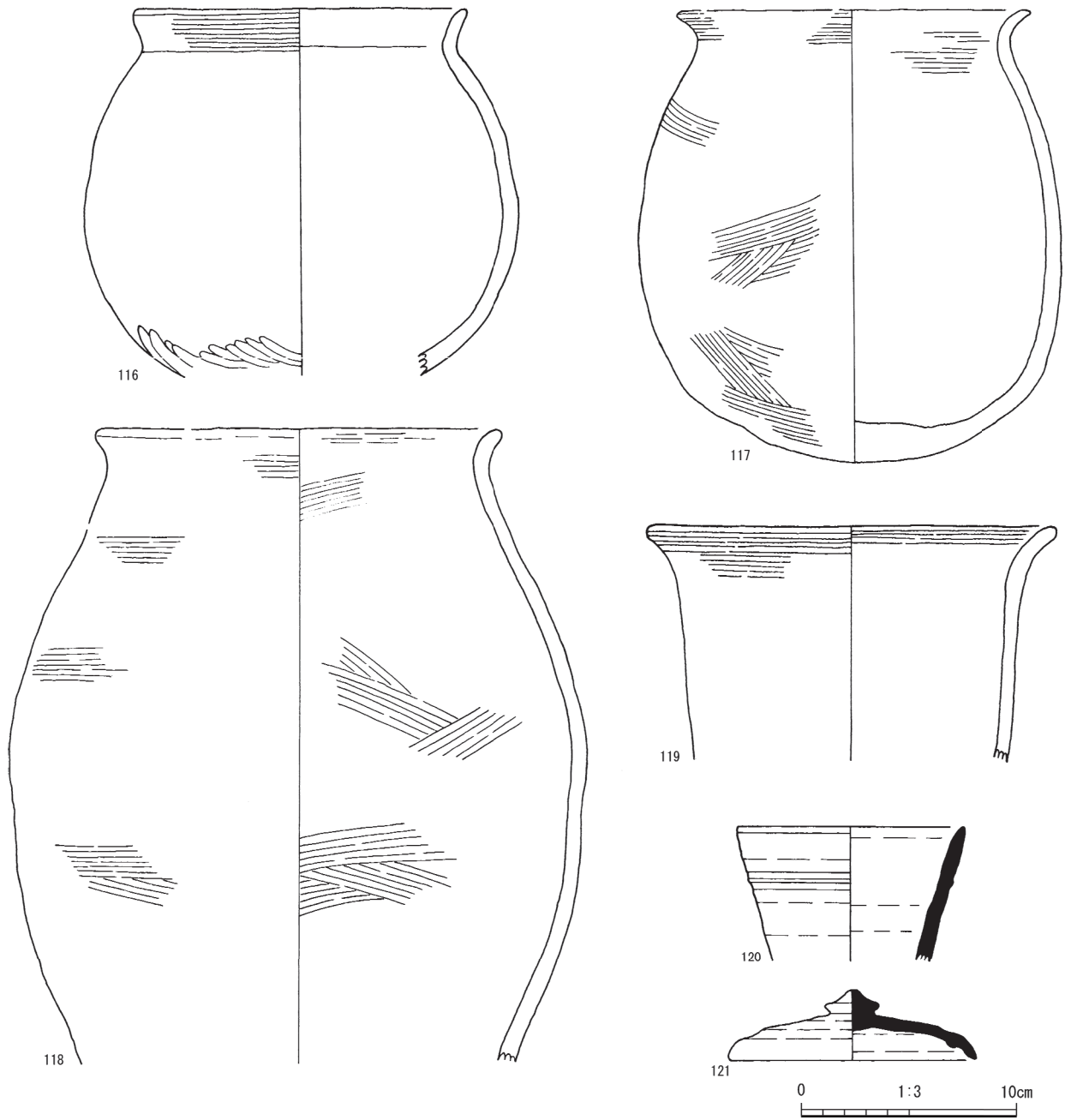


第44図 SB10出土遺物

穴建物跡では比較的小規模である。

壁・堆積土 残存している壁高は約0.2mで、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は全3層を確認した。このうち3層は本遺構北3分の1の床面で確認され、貼り床になる可能性がある。

床面 部分的に分布する3層が貼り床になる可能性がある。床面には主柱穴となりそうなピット4基を確認した。

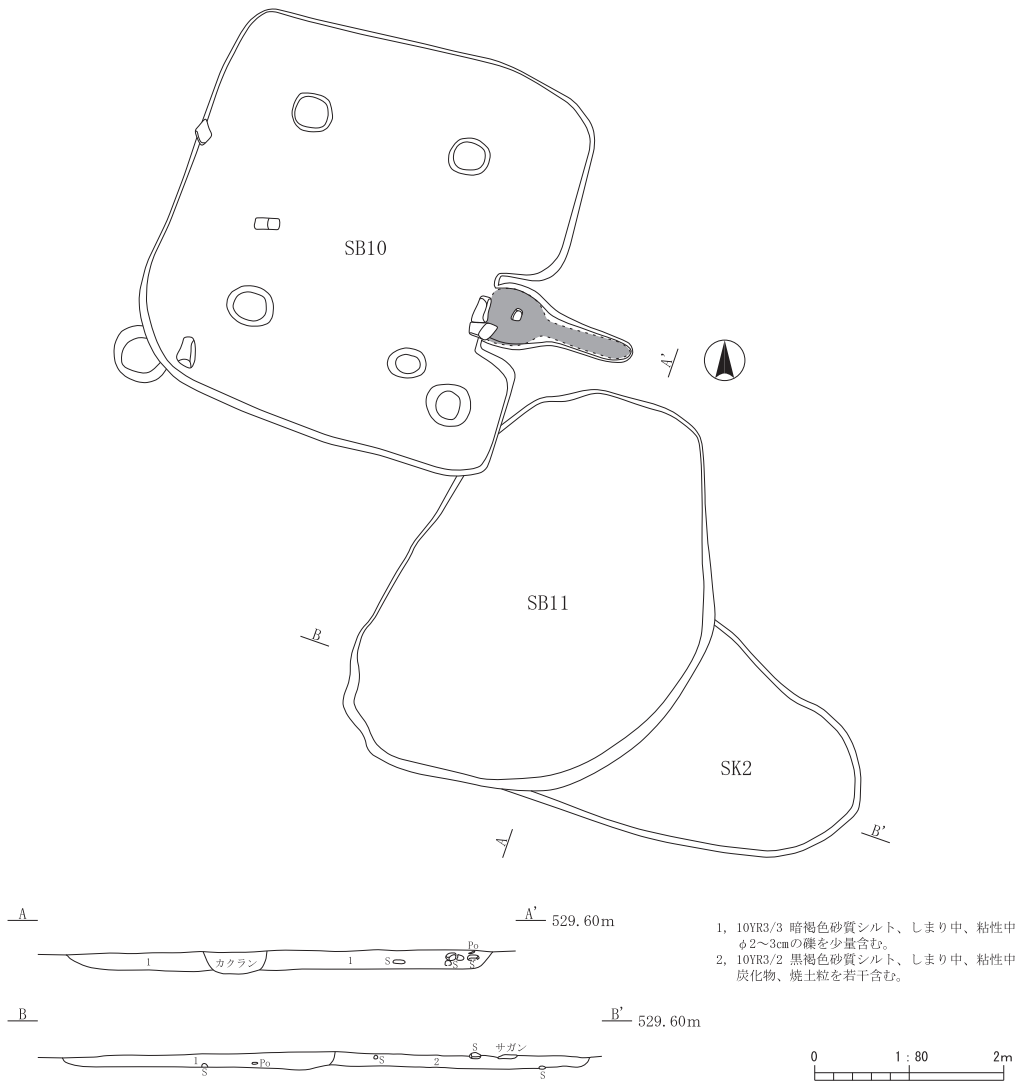


第45図 SB10・11出土遺物

カマド 東壁中央でカマドを確認した。SB10のカマドは両袖、煙道が良好に残存している。

重複関係 溝跡及びSB11を切っている。

出土遺物 カマド付近からは体部に丸みをもつ土師器甕が出土している。また、床面及びカマド付近から出土し遺構廃絶時の一括資料とされる遺物として、須恵器坏H、土師器坏D、高坏L脚部などが確認された。



第46図 SB11遺構図

SB11

位置 C2、C3グリッド

平面形・規模 平面形は長軸4.3m × 短軸3.0m の楕円形を呈する。遺構検出時に本遺構付近からある程度の遺物出土があり、竪穴建物跡として平面・断面で確認しながら精査したが、火処及び床面遺構も確認されなかったため、他の竪穴建物跡とは異なる。

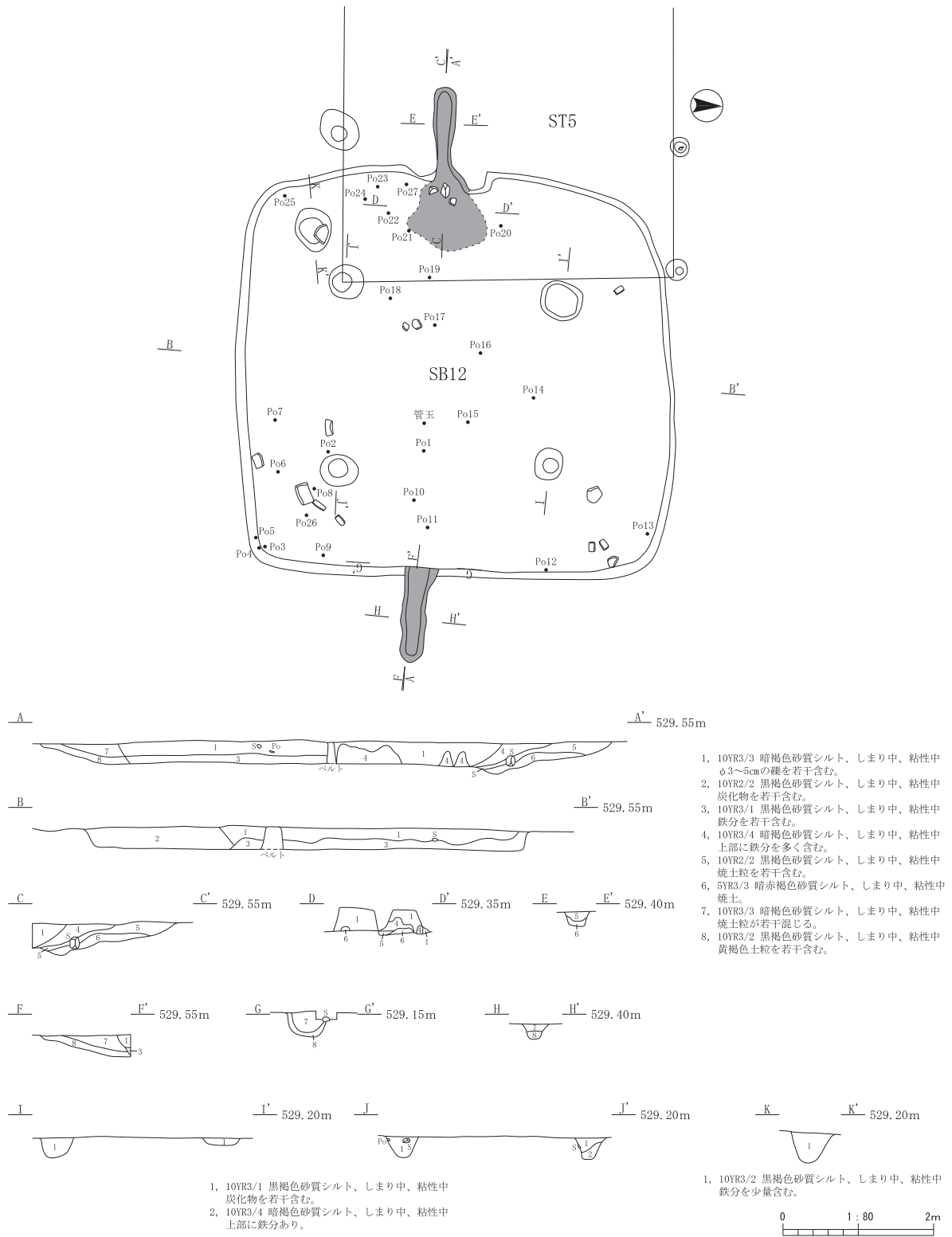
壁・堆積土 残存している壁高は約0.2m で、立ち上がりはなだらかである。覆土は全1層を確認した。

床面 覆土は単層であり、床面遺構は確認していない。

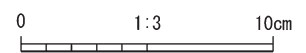
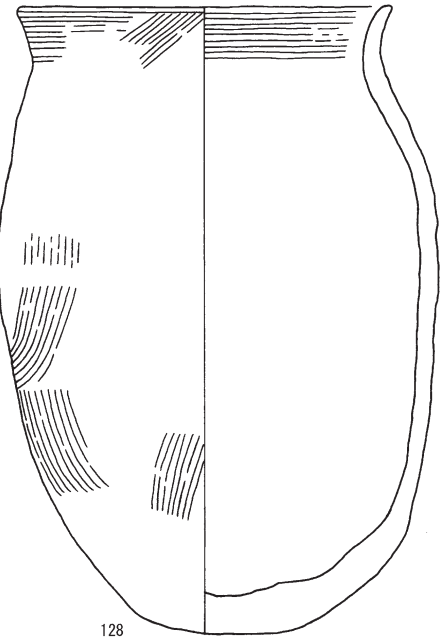
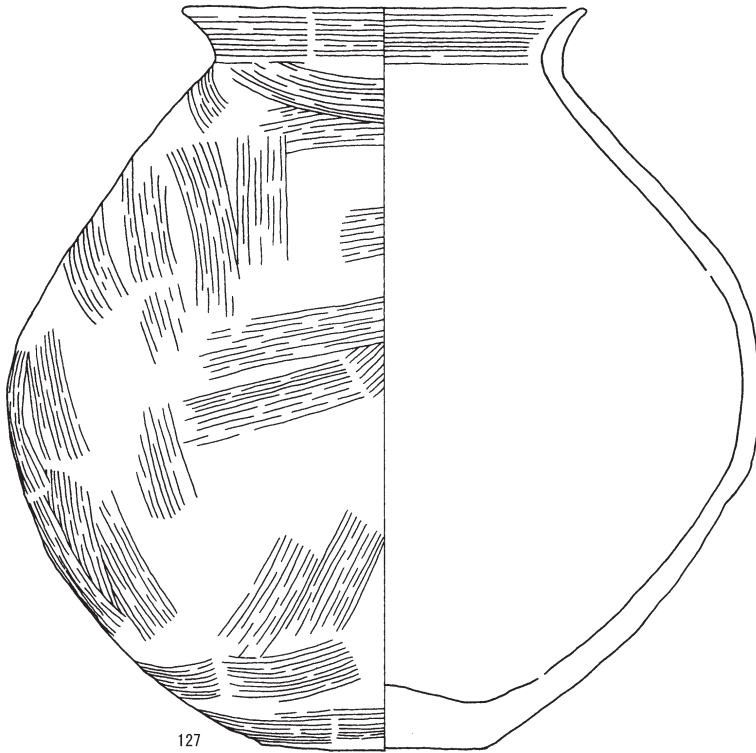
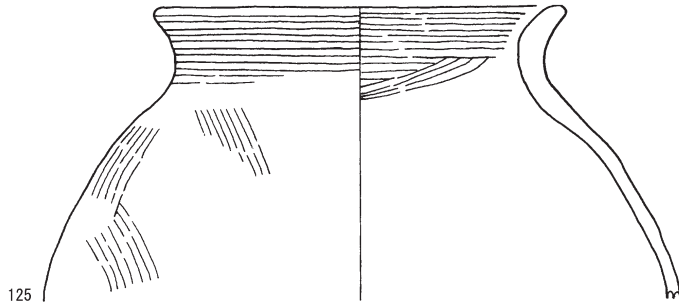
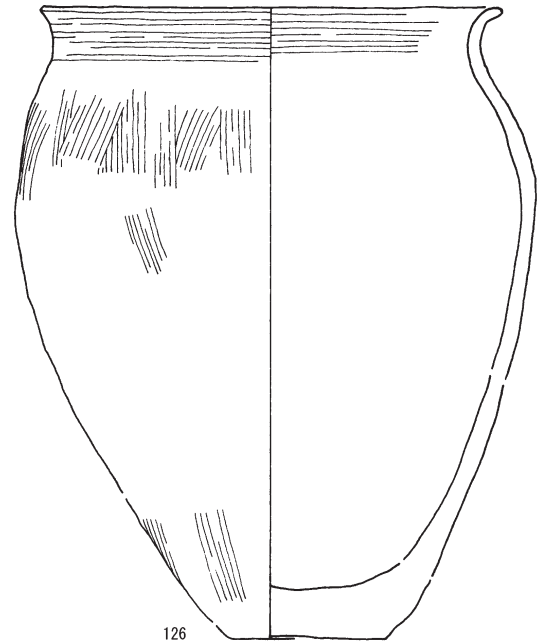
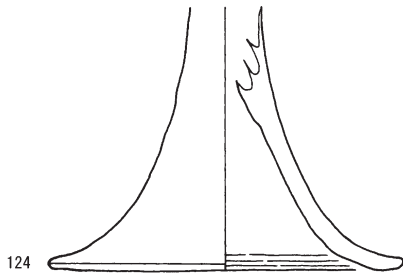
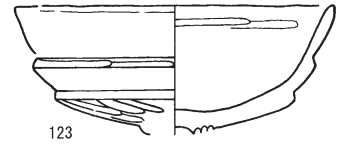
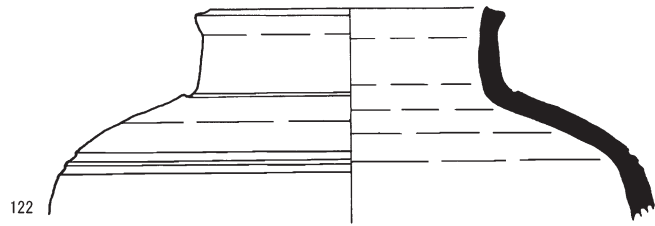
カマド 確認していない。

重複関係 SK2を切り、SB10に切られている。

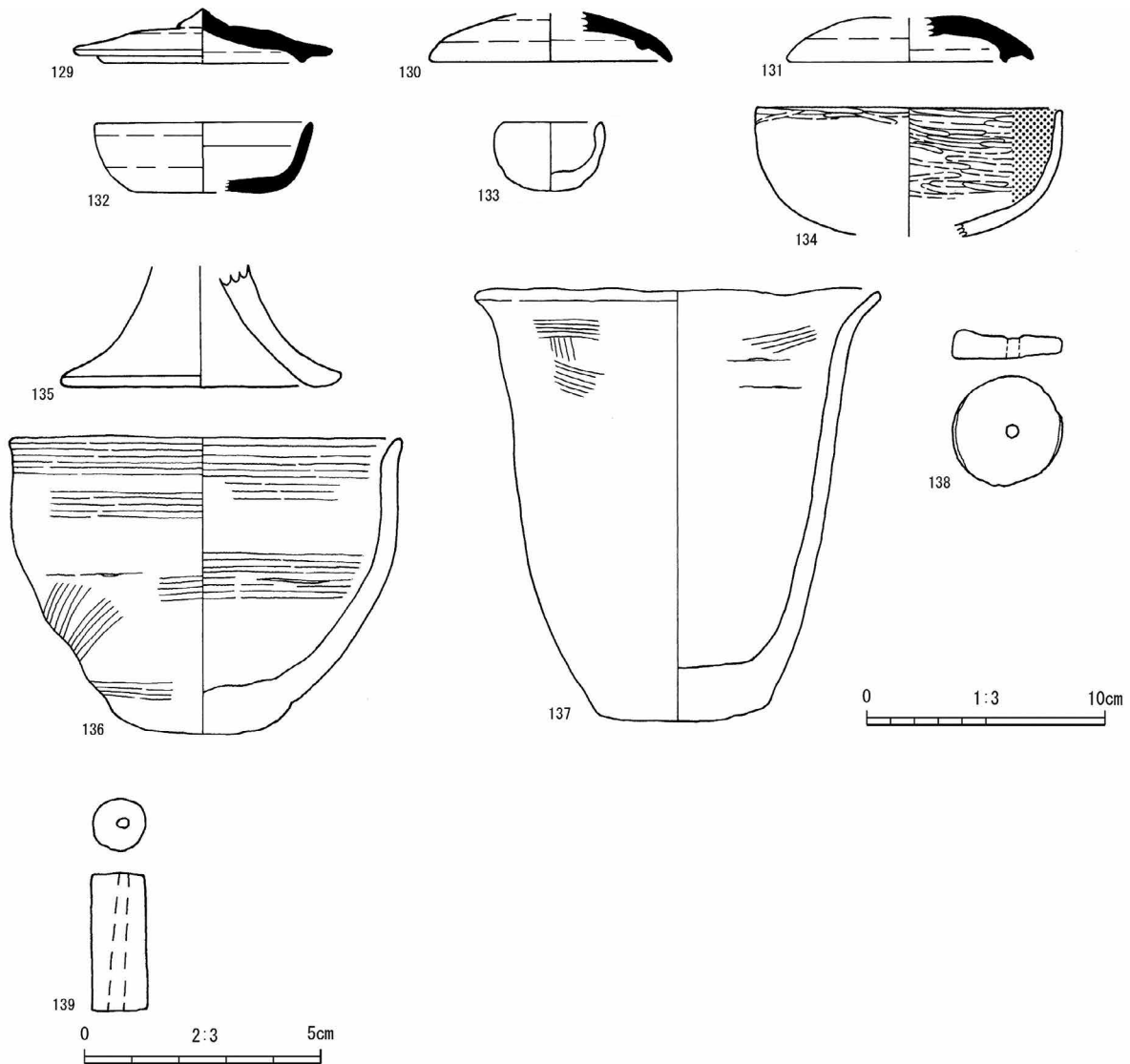
出土遺物 直径11.4cmの須恵器坏蓋 A が出土した。この坏蓋は内面に小さなかえりを有する。この他に図示できる大きさの遺物は出土していない。



第47図 SB12遺構図



第48図 SB12出土遺物（その1）



第49図 SB12出土遺物（その2）

SB12

位置 B3、B4、C3、C4グリッド

平面形・規模 平面形は5.4m × 5.8mの正方形を呈する。SB12はSB9とともに、今回の発掘調査で確認された最大規模の竪穴建物跡である。後述のとおり本遺構ではカマドの作りかえが行われているため、竪穴建物自体の拡張又は重複を念頭において精査を進めたが、堆積状況及び床面遺構の状況からこれらの可能性は低いと判断した。このため、調査時に付番した遺構名SB13は欠番としている。

壁・堆積土 残存している壁高は約0.2mで、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は全8層を確認した。このうち上部に鉄分を含む4層は遺構西半に分布し、不規則な堆積状況を示す。

床面 貼り床は確認していない。床面には主柱穴となりそうなピット4基を確認した。

カマド 東壁中央及び西壁中央からそれぞれ煙道が延びる。精査の結果、東壁の煙道は燃焼室及び袖等の施設が残存しておらず、西壁の煙道は燃焼室等の残存が確認されたことから、東壁中央に構築されたカマドが古く、これを壊して西壁のカマドが構築されたことが判明した。

重複関係 SB10と重複関係にある遺構はない。

出土遺物 床面及びカマド付近からは、体部下半が有段の土師器高坏Iのほか、土師器甕A、甕Dが確認された。また覆土中からは、内面にかえりを持つ須恵器坏蓋A、土師器甕のほか管玉が出土している。

SB14

位置 A1グリッド

平面形・規模 平面形は(3.2)m×(0.7)mを確認した。南東隅を確認しており、方形を呈すると推定される。

壁・堆積土 残存している壁高は約0.3mで、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は全1層を確認した。

床面 貼り床及び床面遺構は確認していない。

カマド 確認していない。

重複関係 SB14はP1に切られる。

出土遺物 鋼管敷設位置の床面から、体部下半に最大径を持つ土師器長胴甕が出土した。

SB15

位置 C4、D4グリッド

平面形・規模 近代のレンガ構造物構築時に削平されており、平面形及び規模は不明である。本遺構確認の手がかりは土師器甕が3点出土していること、カマド燃焼室の火床として焼土の分布が確認されたことである。

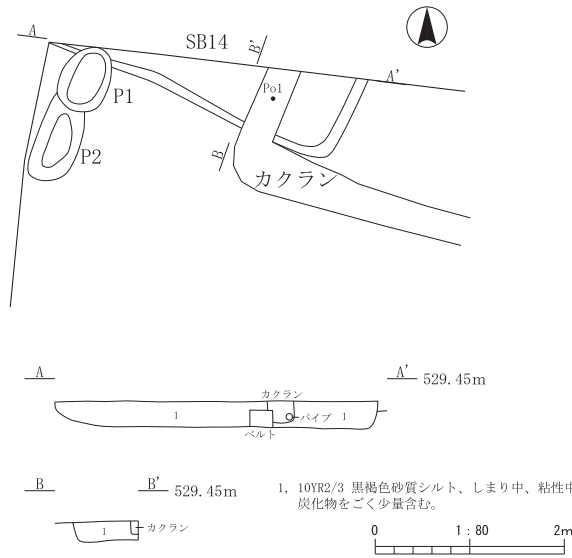
壁・堆積土 壁及び堆積土は残存していない。

床面 貼り床及び床面遺構は確認していない。

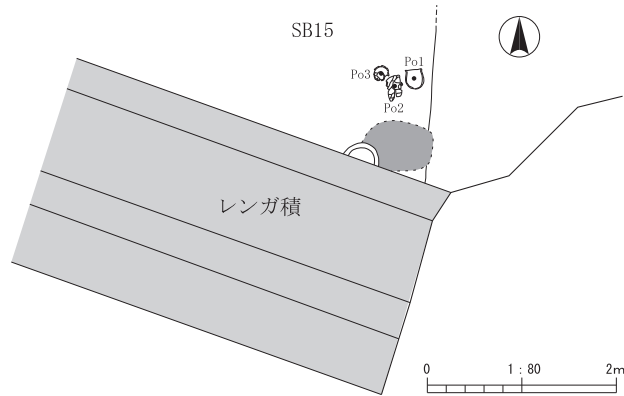
カマド 焼土の分布を確認した。

重複関係 不明である。

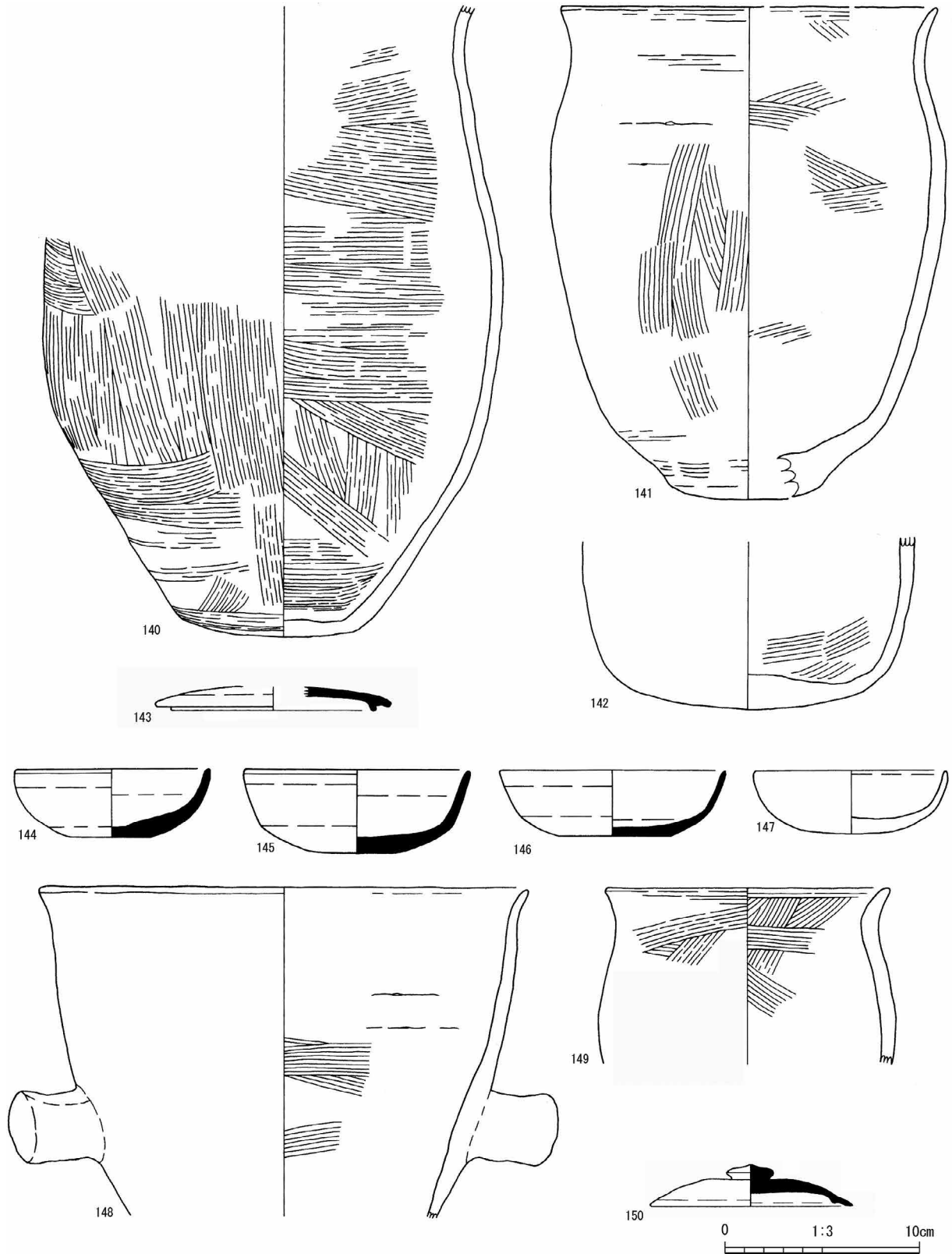
出土遺物 土師器甕が3点出土し、このうち2点を図化した。



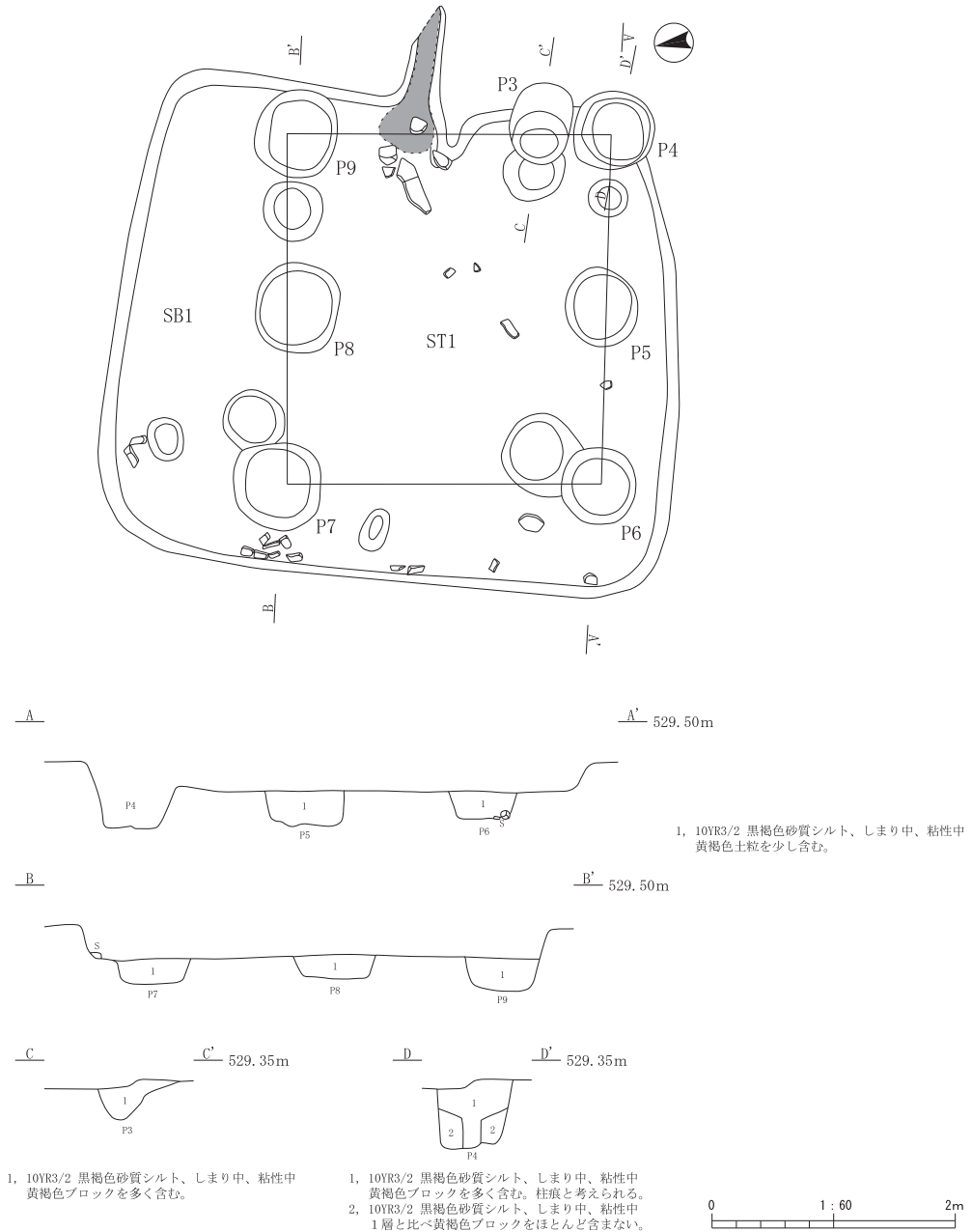
第50図 SB14遺構図



第51図 SB15遺構図



第52図 SB14・15、SK2・3出土遺物



第53図 ST1遺構図

ST1

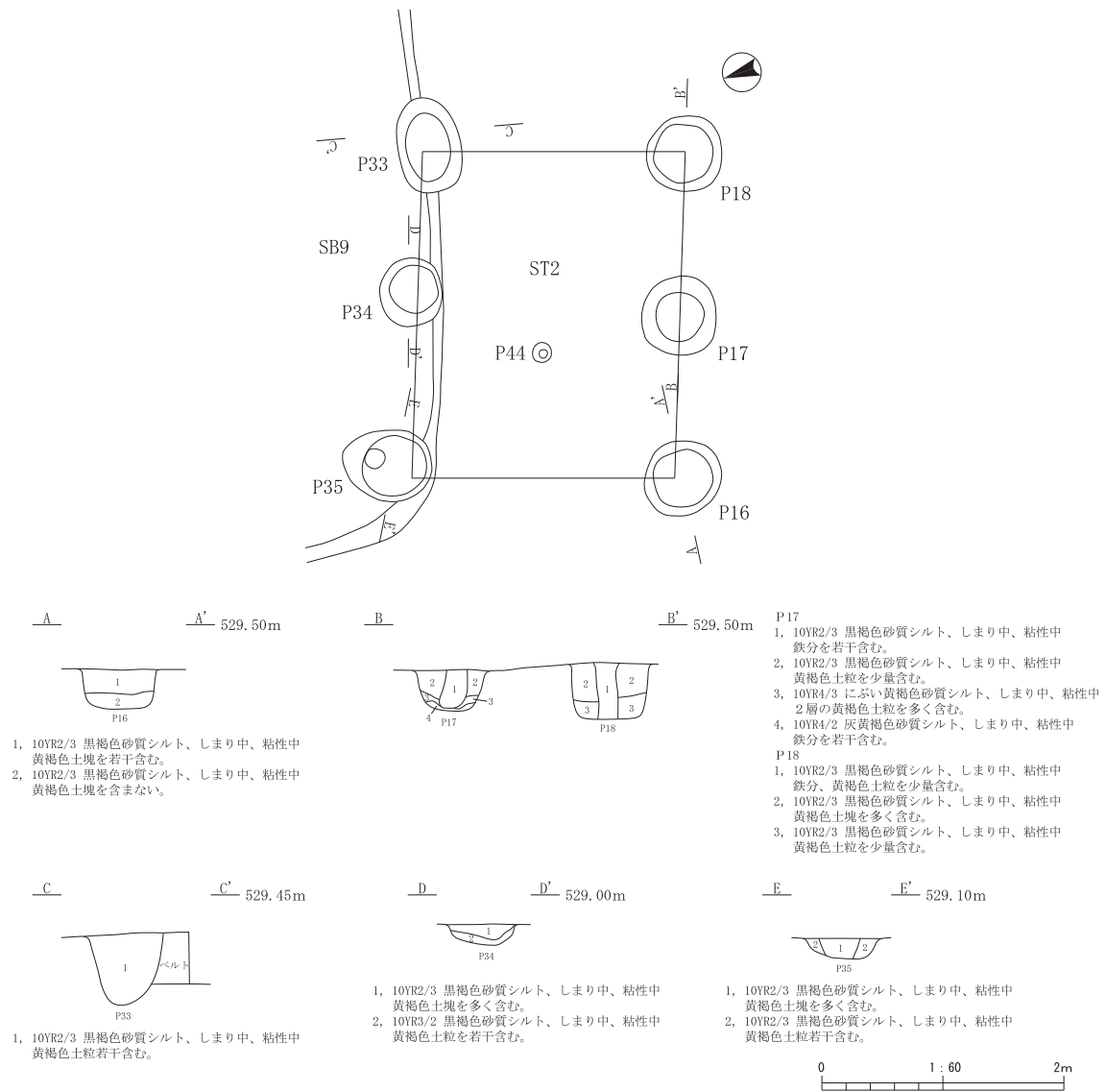
位置 B1グリッド

平面形・規模 東西2間×南北1間

柱穴 直径50~65cm、柱痕跡はP4を除いては確認できていない。

柱間 東西約1.5m、南北約2.7m

重複関係 SB1と重複関係にあり、SB1を切る。



第54図 ST2遺構図

ST2

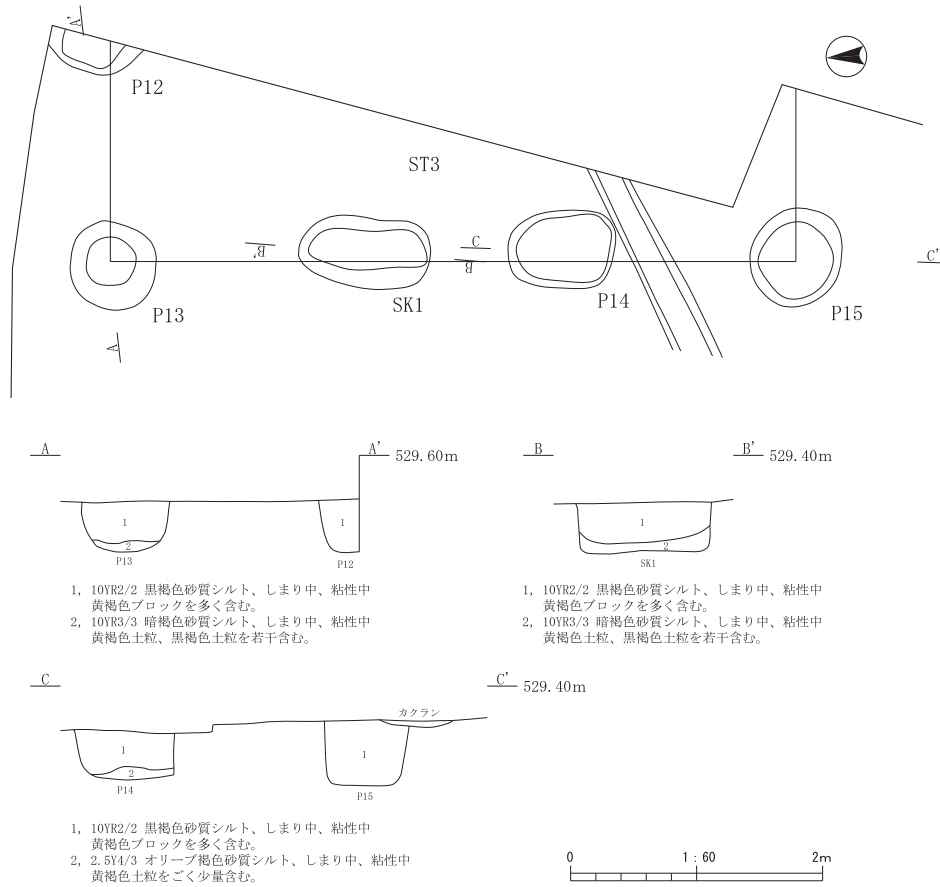
位置 B2、B3グリッド

平面形・規模 東西2間×南北1間

柱穴 直径50~65cm、P17、P18で柱痕跡が確認される。

柱間 東西約1.8m、南北約2.9m

重複関係 SB9と重複関係にある。



第55図 ST3遺構図

ST3

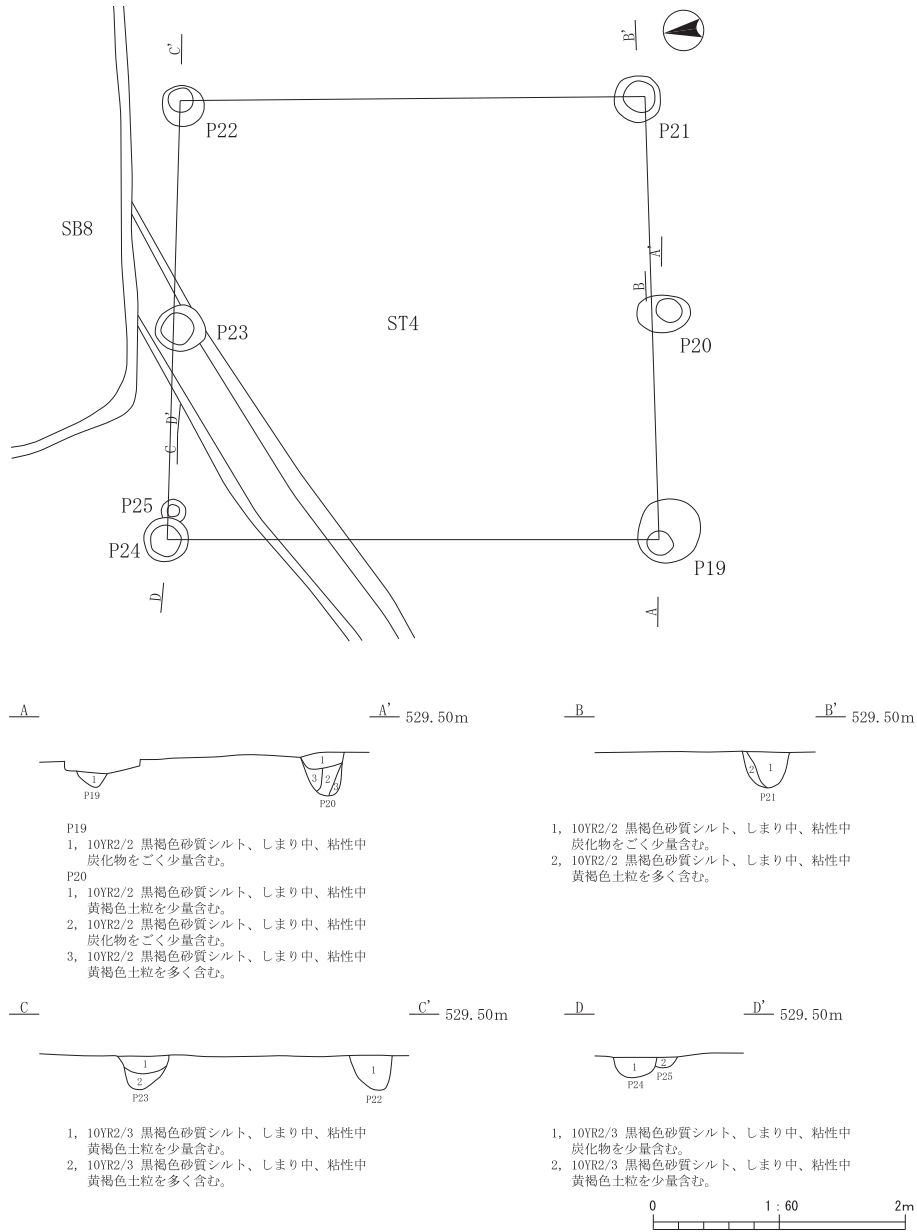
位置 A4、B4グリッド

平面形・規模 東西1間×南北3間が確認された。調査区外に展開するため、正確な規模は不明である。

柱穴 直径約70cm、柱痕跡は確認されていない。

柱間 東西約2.4m、南北約1.8m

重複関係 重複関係にある遺構はない。



第56図 ST4遺構図

ST4

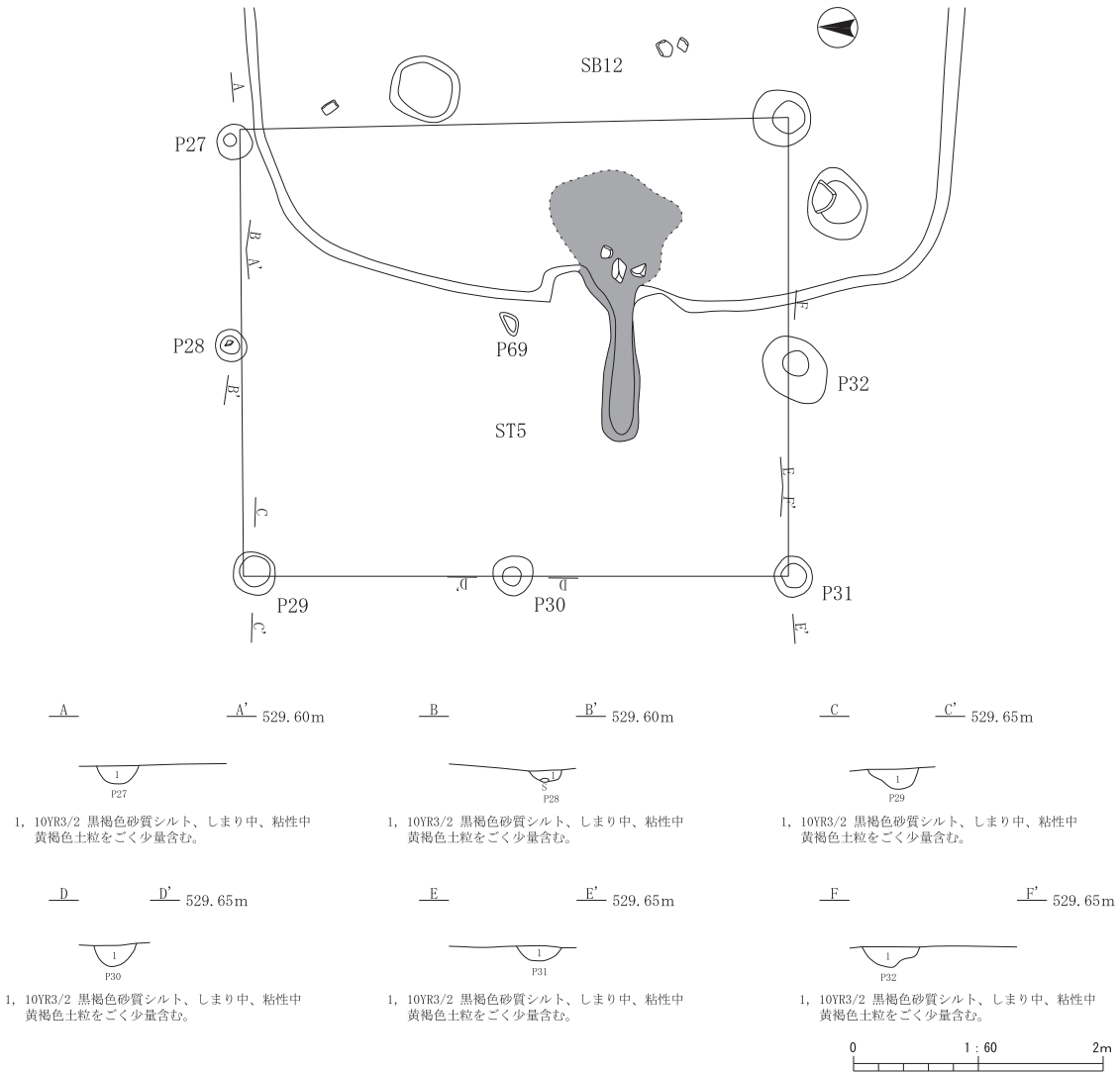
位置 B3、B4グリッド

平面形・規模 東西2間×南北1間

柱穴 直径約40cm、柱痕跡は確認されていない。

柱間 東西約2.3m、南北約5.0m

重複関係 溝跡と重複関係にあり、これを切る。



第57図 ST5遺構図

ST5

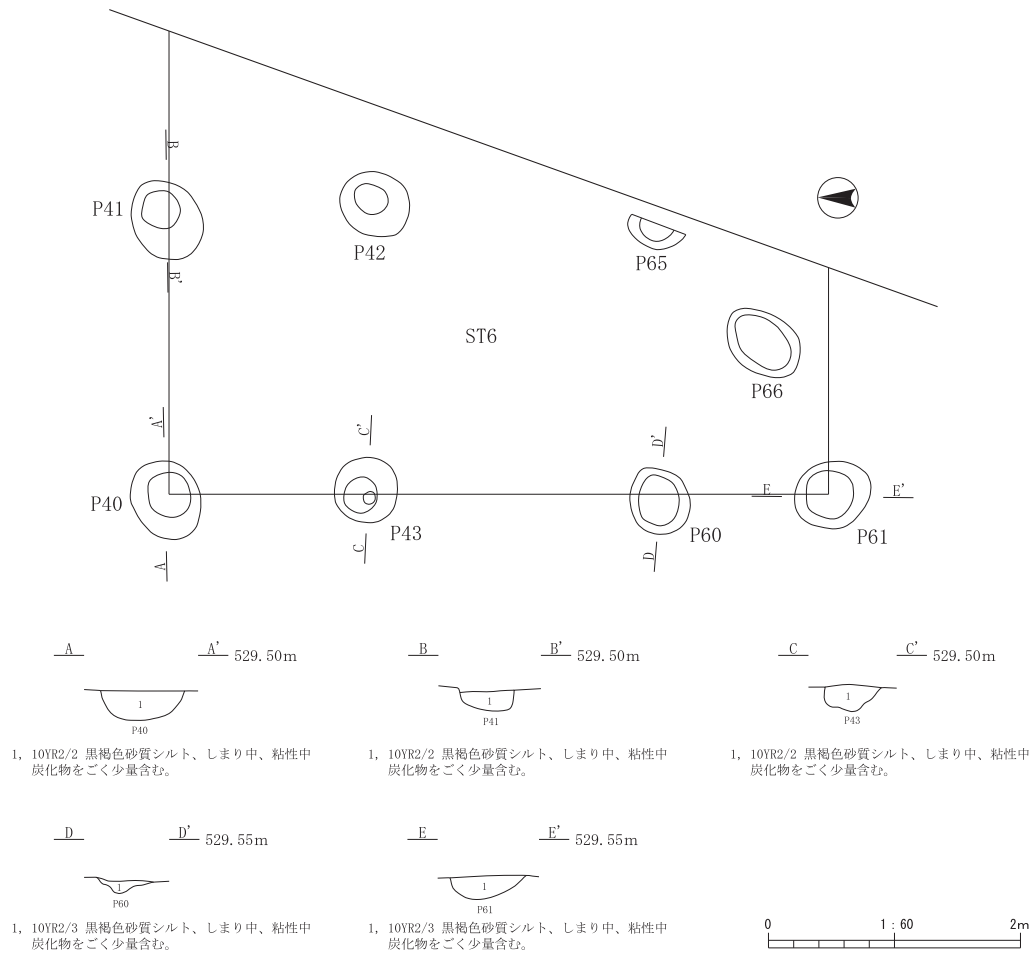
位置 C3グリッド

平面形・規模 東西2間×南北2間

柱穴 直径約35~40cm、柱痕跡は確認されていない。

柱間 東西約2.4m、南北約2.9m

重複関係 SB12と重複関係にある。



ST6

位置 B4、C4グリッド

平面形・規模 東西1間×南北3間

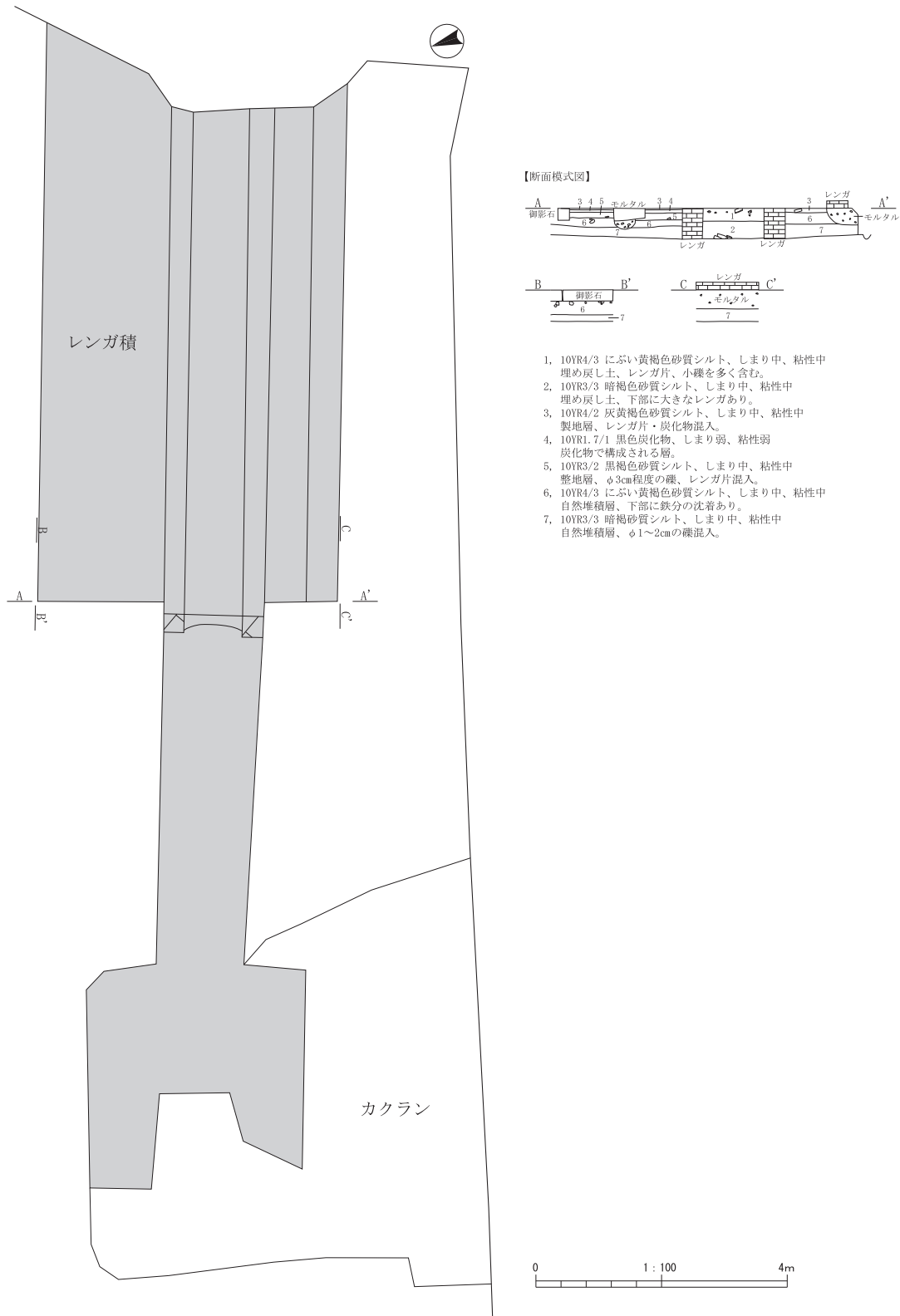
柱穴 直径約40~60cm、柱痕跡は確認されていない。

柱間 東西約2.2m、南北約2.3m

重複関係 重複関係にある遺構はない。

溝跡

調査区内を南西から北東にかけて幅約50cmの溝跡が確認された。他の全ての遺構に切られることから、今回の調査で最も古い遺構と判明したが時期比定につながる遺物の出土はない。



第59図 レンガ構造物遺構図

その他の遺構

今回の発掘調査では、竪穴建物跡及び掘立柱建物跡以外の遺構は比較的少なく、わずかに土坑とピットが確認された程度であった。

土坑は、柱穴として構築するには規模が大きく楕円形等の平面形を呈した遺構を認定している。SK2、SK3からは図示できる土器類が出土した。このうち、SK3出土の須恵器坏蓋は内面にかえりを持つ坏蓋Aであり、他の遺構とほぼ同時期に比定される。

掘立柱建物跡以外のピットはC2グリッドに集中しており、ここでは径50cm程度のピットがまとまって確認されたため、掘立柱建物などが存在していた可能性もある。しかし、近代遺構や攪乱等の影響で残存していないため、掘立柱建物跡としての組み合わせはできなかった。

近代遺構

位置 C2、C3、D3、D4グリッド

重複関係 SB15を切る。

特徴 今回の調査区内南側で検出された遺構で、全体をレンガで構築している。調査区より東側は後年の攪乱により本遺構も影響を受けたため残存していない。周辺の土地利用の来歴から、明治期には付近一帯に官営製材所が開設され、これが焼失した以降も工場等の用地として供されてきたことが記録にある。このため、本遺構はこれらのいずれかの時期あるいは複数の時期の所産であると考えられるが、今回の発掘調査で詳細な時期比定に直結する成果はなかった。

レンガは一段に長手と小口を交互に積む。レンガの大きさは小口11.0cm、長手22.0cm、厚さ6.0cmで刻印等は確認できていない。焼成は良好であるが、やや剥落等が見られた。また、南北の上端付近の角は花崗岩の切石で構築される。この花崗岩は断面形が19.0cm×19.0cmで統一されるが、長さは1 m程度のものやその半分程度のものなどが混在し、設置に規則性はない。

平面形は2列のレンガ列とその周囲の堆積層からなり、西端は一辺約4 mのコンクリートが基礎状に構築される。この西端部分から南側には石炭の燃え滓のような厚い堆積層が確認できた。

断面観察をした結果、レンガ列の外側の堆積層は人為的に転圧されて造りだされていることがわかり、一部にモルタル等が露出する。これに対し、レンガ列の内側は本遺構廃絶時以降に埋没しており、底部付近にレンガ片等が混入する。

以上のような所見から用途復元を試みたが、本遺構の用途については確定していない。今後、古写真等収集等を通して明治期以降の一帯の土地利用とともに検討する必要がある。

第7表 栄町遺跡遺構観察表

名称	位置 (グリッド)	規模 (m)			平面形	主軸方向 (長軸方向)	炉・カマド
		主軸 (長軸)	直行軸 (短軸)	壁高			
SB1	A1、B1	4.0	4.5	0.3	方形	N75° W	東壁中央にカマド
SB2	B1、B2、C1	(3.2)	(5.5)	0.3	(方形)	N19° E	未確認
SB3	C1	(2.8)	(2.2)	0.2	(方形)	不明	未確認
SB4	A2	(4.5)	(2.0)	0.2	(方形)	N86° E	未確認
SB5	A2、B2	3.9	5.0	0.2	(方形)	N62° E	東壁中央にカマド
SB6	B2	4.7	4.8	0.4	方形	N89° E	東壁中央にカマド
SB7	A3	(5.6)	(3.2)	0.3	(方形)	N78° E	未確認
SB8	A3、A4、B3、B4	5.3	4.7	0.2	方形	N4° E	北壁中央にカマド
SB9	A3、B3	5.8	5.8	0.4	方形	N81° E	東壁中央にカマド
SB10	B2、B3、C2、C3	4.1	4.3	0.2	方形	N71° W	東壁中央にカマド
SB11	C2、C3	4.3	3.0	0.2	(方形)	N21° E	確認されず
SB12	B3、B4、C3、C4	5.4	5.8	0.2	方形	N88° E	東壁中央・西中央にカマド
SB14	A1	(3.2)	(0.7)	0.3	(方形)	N66° W	未確認
SB15	C4、D4	不明	不明	不明	不明	不明	未確認
ST1	B1	3.8	3.5	-	2間×1間	N83° W	確認されず
ST2	B2、B3	3.6	2.9	-	2間×1間	N73° W	確認されず
ST3	A4、B4	(7.2)	(2.3)	-	(3間×1間)	N3° E	確認されず
ST4	B3、B4	5.0	4.7	-	2間×1間	N8° E	確認されず
ST5	C3	5.8	4.8	-	2間×2間	N4° W	確認されず
ST6	B4、C4	(6.9)	(4.9)	-	(3間×1間)	N5° W	確認されず

() は残存している部分の規模。

第8表 栄町遺跡出土土器観察表

No.	遺構名	出土位置	種別	器種	残存部位	口径 (cm)	頸部径 (cm)	最大径 (cm)	最大径 部位	底径 (cm)	器高 (cm)	技法の特徴		
												外面調整	内面調整	底部
1	SB1	床	土師器	坏A3	口縁～底部	12.2	-	12.2	口縁	6.1	4.8	ケズリ+ミガキ	ナデ+ミガキ	ナデ
2	SB1	カマド	土師器	鉢A	口縁～底部	17.0	-	17.0	口縁	5.5	11.9	ナデ	ナデ	ナデ
3	SB1	カマド	土師器	甕B	口縁～底部	13.0	12.9	15.1	体部	6.0	13.0	ナデ	ナデ	ナデ
4	SB1	床	土師器	甕A	口縁～体部上半	16.2	15.0	24.3	体部	不明	(11.5)	ナデ	ナデ	不明
5	SB1	床	土師器	甕D	口縁～体部下半	15.9	14.5	18.4	体部	不明	(22.5)	ケズリ+ナデ	ナデ	不明
6	SB1	床	土師器	甕C1	口縁～底部	20.8	20.0	26.5	体部	7.8	29.3	ミガキ	ナデ	不明
7	SB1	カマド	土師器	甕D	口縁～体部下半	17.3	16.8	20.6	体部	不明	(25.6)	ナデ	ナデ	不明
8	SB1	覆土	須恵器	坏蓋A	蓋部	9.0	-	9.0	口縁	-	(1.0)	ロクロナデ+ヘラケズリ	ロクロナデ	-
9	SB1	覆土	須恵器	鉢?	体部下半～底部	不明	-	不明	不明	5.0	(4.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り
10	SB1	覆土	土師器	坏B	口縁～底部	12.8	-	12.8	口縁	6.0	(4.2)	不明	ミガキ	不明
11	SB1	覆土	土師器	坏B	口縁～底部	14.0	-	14.0	口縁	4.8	4.5	ミガキ	ミガキ	ナデ
12	SB1	覆土	土師器	鉢BⅢ	口縁～底部	12.0	-	12.0	口縁	4.8	6.4	ナデ	ナデ	ナデ
13	SB2	床	須恵器	壺	体部	不明	不明	17.4	体部	不明	(10.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
14	SB2	床	土師器	坏B	口縁～底部	11.1	-	11.1	口縁	3.8	3.7	不明	不明	不明
15	SB2	床	土師器	坏B	口縁～体部下半	14.0	-	14.0	口縁	不明	(4.5)	不明	不明	不明

第3章 栄町遺跡（第3次）発掘調査

No.	遺構名	出土位置	種別	器種	残存部位	口径 (cm)	頸部径 (cm)	最大径 (cm)	最大径 部位	底径 (cm)	器高 (cm)	技法の特徴		
												外面調整	内面調整	底部
16	SB2	床	土師器	鉢BⅢ	口縁～底部	12.0	-	12.0	口縁	5.6	5.7	ナデ	ナデ	ナデ
17	SB2	床	土師器	高坏L	脚部	不明	-	不明	不明	-	(7.4)	不明	ナデ	-
18	SB2	床	土師器	甕	体部下半～底部	不明	不明	不明	不明	7.0	(5.9)	ヘラナデ	ナデ	木葉痕
19	SB2	床	土師器	甕D	口縁～底部	18.4	16.6	20.2	体部	6.4	31.1	ナデ	ナデ	木葉痕
20	SB2	覆土	須恵器	坏A	口縁～底部	11.8	-	11.8	口縁	7.6	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り？
21	SB2	覆土	土師器	坏B	口縁～底部	12.2	-	12.2	口縁	3.0	4.4	ナデ	不明	ナデ
22	SB2	覆土	土師器	鉢AⅢ	口縁～体部下半	11.2	-	11.8	体部	不明	(5.1)	不明	不明	不明
23	SB2	覆土	土師器	鉢BⅢ	口縁～体部	10.7	-	10.7	口縁	不明	(5.0)	不明	不明	不明
25	SB3	覆土	土師器	甕	体部下半～底部	不明	不明	不明	不明	5.0	(4.9)	ヘラケズリ	ナデ	ナデ
27	SB5	床	土師器	坏B	口縁～底部	14.4	-	14.4	口縁	6.0	5.7	ナデ	ミガキ	不明
28	SB5	カマド	土師器	鉢AⅢ	口縁～底部	13.9	-	15.9	体部	3.6	12.2	ナデ	ナデ	ナデ
29	SB5	覆土	土師器	坏B	口縁～体部下半	15.8	-	15.8	口縁	不明	(4.6)	ミガキ	ミガキ	不明
30	SB5	カマド	土師器	甕D	口縁～底部	17.3	14.5	17.3	口縁	8.4	31.2	ナデ	ナデ	木葉痕
31	SB6	カマド	土師器	ミニチュア	口縁～底部	3.2	-	3.2	口縁	2.1	1.5	ナデ	ナデ	ナデ
32	SB6	カマド	土師器	ミニチュア	口縁～底部	4.0	-	4.0	口縁	2.0	2.0	ナデ	ナデ	不明
33	SB6	カマド	須恵器	坏G	口縁～底部	9.8	-	9.8	口縁	3.8	2.8	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
34	SB6	覆土	須恵器	蓋	蓋部	8.8	-	8.8	口縁	-	2.1	ロクロナデ	ロクロナデ	-
35	SB6	覆土	須恵器	坏G	口縁～底部	10.4	-	10.4	口縁	4.2	3.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り
36	SB6	覆土	須恵器	高坏	口縁～底部	8.2	-	不明	不明	-	(3.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	-
37	SB6	覆土	須恵器	すり鉢	体部下半～底部	不明	-	不明	不明	8.0	(6.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り
38	SB6	覆土	須恵器	鉢？	体部下半～底部	不明	-	不明	不明	9.6	(7.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り
39	SB6	覆土	須恵器	短頸壺	口縁～体部下半	14.2	12.8	20.2	体部	不明	(14.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
40	SB6	覆土	土師器	ミニチュア	口縁～底部	4.0	-	4.0	口縁	3.5	2.3	ナデ	ナデ	ナデ
41	SB6	覆土	土師器	坏B	口縁～底部	12.3	-	12.3	口縁	4.5	4.2	ナデ	ミガキ	ナデ
42	SB6	覆土	土師器	坏B	口縁～底部	12.3	-	12.3	口縁	4.6	4.1	ナデ+ミガキ	ミガキ	ナデ
43	SB6	覆土	土師器	坏B	口縁～体部下半	14.2	-	14.2	口縁	不明	(4.5)	ケズリ+ナデ	ナデ+ミガキ	不明
44	SB6	覆土	土師器	坏B	口縁～底部	14.8	-	14.8	口縁	3.5	4.5	ケズリ+ナデ	ナデ+ミガキ	ケズリ
45	SB6	覆土	土師器	高坏	脚部	不明	-	不明	不明	-	(8.3)	ナデ	ナデ	-
48	SB7	床	土師器	坏D2	口縁～底部	11.0	-	11.0	口縁	5.0	3.5	不明	不明	不明
49	SB7	床	土師器	甕C？	口縁～体部下半	18.0	-	18.0	口縁	不明	(10.0)	ナデ	ミガキ	不明
50	SB7	床	土師器	甕	体部下半～底部	不明	不明	不明	不明	7.1	(6.5)	ナデ	ナデ	木葉痕
51	SB7	覆土	須恵器	坏蓋A	蓋部	9.3	-	9.3	口縁	-	2.1	ロクロナデ	ロクロナデ	-
52	SB7	覆土	須恵器	坏蓋A	蓋部	14.0	-	14.0	口縁	-	(2.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	-
53	SB7	覆土	須恵器	坏蓋A	蓋部	16.0	-	16.0	口縁	-	(1.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	-
54	SB7	覆土	須恵器	坏蓋A	蓋部	13.7	-	13.7	口縁	-	3.6	ロクロナデ+ヘラ切り	ロクロナデ	-
55	SB7	覆土	須恵器	坏蓋A	蓋部	14.8	-	14.8	口縁	-	3.7	ロクロナデ+ヘラ切り	ロクロナデ	-
56	SB7	覆土	須恵器	坏蓋A	蓋部	16.0	-	16.0	口縁	-	(2.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	-
57	SB7	覆土	須恵器	坏蓋B	蓋部	14.8	-	14.8	口縁	-	2.7	ロクロナデ+ヘラ切り	ロクロナデ	-
58	SB7	覆土	須恵器	坏蓋B	蓋部	16.6	-	16.6	口縁	-	3.3	ロクロナデ+ヘラ切り	ロクロナデ+ナデ	-
59	SB7	覆土	須恵器	坏蓋B	蓋部	17.8	-	17.8	口縁	-	(2.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	-
60	SB7	覆土	須恵器	坏G	口縁～底部	11.2	-	11.2	口縁	4.0	3.0	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り
61	SB7	覆土	須恵器	坏A	口縁～底部	12.4	-	12.4	口縁	6.0	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り
62	SB7	覆土	須恵器	坏A	口縁～底部	12.5	-	12.5	口縁	5.0	3.3	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り
63	SB7	覆土	須恵器	坏A	口縁～底部	12.6	-	12.6	口縁	6.0	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り
64	SB7	覆土	須恵器	坏A	口縁～底部	12.8	-	12.8	口縁	5.4	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り
65	SB7	覆土	須恵器	坏A	口縁～底部	12.9	-	12.9	口縁	6.4	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り
66	SB7	覆土	須恵器	坏A	口縁～底部	13.0	-	13.0	口縁	8.0	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り
67	SB7	覆土	須恵器	坏A	口縁～底部	12.9	-	12.9	口縁	3.2	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り
68	SB7	覆土	須恵器	坏A	口縁～体部下半	13.8	-	13.8	口縁	不明	(4.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
69	SB7	覆土	須恵器	坏A	口縁～底部	13.8	-	13.8	口縁	5.0	5.1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り
70	SB7	覆土	須恵器	坏A	口縁～底部	14.6	-	14.6	口縁	8.0	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り

第3章 栄町遺跡（第3次）発掘調査

No.	遺構名	出土位置	種別	器種	残存部位	口径 (cm)	頸部径 (cm)	最大径 (cm)	最大径 部位	底径 (cm)	器高 (cm)	技法の特徴		
												外面調整	内面調整	底部
71	SB7	覆土	須恵器	坏A	口縁～体部下半	16.4	-	16.4	口縁	不明	(3.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
72	SB7	覆土	須恵器	坏B	口縁～底部	14.2	-	14.2	口縁	9.2	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
73	SB7	覆土	須恵器	坏B	口縁～底部	14.2	-	14.2	口縁	9.6	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り
74	SB7	覆土	須恵器	坏B	口縁～底部	14.2	-	14.2	口縁	9.2	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
75	SB7	覆土	須恵器	鉢	口縁～底部	21.0	-	21.0	口縁	8.0	6.2	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り
76	SB7	覆土	須恵器	すり鉢	口縁～体部上半	16.8	-	16.8	口縁	不明	(8.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
77	SB7	覆土	須恵器	甕A	口縁～体部上半	29.3	16.2	不明	不明	不明	(14.5)	波状文	ロクロナデ	不明
78	SB7	覆土	土師器	ミニチュア	口縁～底部	6.7	-	6.7	口縁	4.8	4.6	ナデ	ナデ	ナデ
79	SB7	覆土	土師器	坏B	口縁～底部	9.4	-	9.4	口縁	5.0	2.9	ナデ	ミガキ	不明
80	SB7	覆土	土師器	鉢BⅢ	体部下～底部	不明	-	不明	不明	5.8	(4.7)	ナデ	ナデ	ナデ
81	SB7	覆土	土師器	鉢BⅢ	口縁～体部上半	14.0	-	14.0	口縁	不明	(7.7)	ナデ	ナデ	不明
82	SB7	覆土	土師器	甕C?	口縁～体部下半	15.9	-	15.9	口縁	不明	(10.0)	ナデ	ナデ	不明
83	SB7	覆土	土師器	甕D	口縁～体部上半	19.2	17.5	不明	不明	不明	(5.8)	ナデ	ナデ	不明
84	SB7	覆土	土師器	甕D	口縁～体部下半	22.4	20.6	22.4	口縁	不明	(22.6)	ナデ	ナデ	不明
85	SB8	床	須恵器	鉢	口縁～底部	13.6	-	13.6	口縁	不明	(7.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
86	SB8	床	土師器	高坏	脚部	不明	-	不明	不明	-	(6.0)	不明	不明	-
87	SB8	床	土師器	甕	体部下～底部	不明	不明	不明	不明	6.8	(6.2)	ナデ	ナデ	ナデ
88	SB8	覆土	須恵器	瓶	口縁～体部	9.2	不明	不明	不明	不明	(6.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
89	SB8	覆土	土師器	坏D2	口縁～底部	14.0	-	14.0	口縁	6.0	4.0	ナデ	ナデ	ナデ
90	SB9	床	須恵器	坏H	口縁～底部	11.4	-	13.0	体部	6.8	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り
91	SB9	床	須恵器	高坏	体部～脚部	不明	-	不明	不明	-	(6.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	-
92	SB9	床	須恵器	壺	頸部～体部	不明	6.4	14.7	体部	不明	(13.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
93	SB9	床	土師器	坏B	口縁～体部	14.5	-	14.5	口縁	不明	(4.8)	ミガキ	ミガキ	不明
94	SB9	床	土師器	鉢BⅡ	口縁～底部	17.5	-	17.5	口縁	6.5	7.1	ナデ	ナデ	ナデ
95	SB9	床	土師器	甕C	口縁～底部	16.9	-	16.9	口縁	5.0	10.2	ナデ	オサエ+ナデ	-
96	SB9	床	土師器	高坏L	脚部	不明	-	不明	不明	-	(8.2)	ナデ	ナデ	-
97	SB9	床	土師器	甕	体部下～底部	不明	不明	不明	不明	7.0	(5.3)	ナデ	ナデ	ナデ
98	SB9	床	土師器	鉢BⅢ	口縁～体部上半	14.4	-	14.4	口縁	不明	(5.0)	ヘラミガキ	ミガキ	不明
99	SB9	床	土師器	甕	体部～底部	不明	不明	不明	不明	11.6	(21.2)	ナデ	ナデ	ナデ
100	SB9	覆土	須恵器	坏H	口縁～底部	9.4	-	11.4	体部	4.6	3.3	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り
101	SB9	覆土	須恵器	坏H	口縁～底部	11.8	-	14.0	体部	6.0	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り
102	SB9	覆土	土師器	坏B	口縁～底部	12.4	-	12.4	口縁	6.0	5.4	不明	ナデ	ナデ
103	SB9	覆土	土師器	坏B	口縁～底部	13.4	-	13.4	口縁	6.0	4.0	ナデ	ナデ	ナデ
104	SB9	覆土	土師器	坏B	口縁～底部	不明	-	不明	不明	4.2	(4.2)	不明	ミガキ	ナデ
105	SB9	覆土	土師器	高坏?	口縁～体部	18.2	-	不明	不明	不明	(3.5)	ナデ	ミガキ	不明
106	SB9	覆土	土師器	甕D	口縁～体部下半	18.4	17.8	20.0	体部	不明	(23.9)	ケズリ+ナデ	ナデ	不明
107	SB10	床	須恵器	坏H	口縁～底部	12.4	-	14.3	体部	6.0	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り
108	SB10	床	土師器	ミニチュア	口縁～底部	6.2	-	6.2	口縁	3.0	4.1	ナデ	ナデ	不明
109	SB10	床	土師器	坏D2	口縁～底部	11.2	-	11.2	口縁	4.0	3.9	不明	不明	不明
110	SB10	床	土師器	鉢BⅡ	口縁～底部	20.8	-	20.8	口縁	12.0	7.9	ナデ	ミガキ	ナデ
111	SB10	床	土師器	坏A3	口縁～底部	13.1	-	13.1	口縁	4.2	4.7	ミガキ	ミガキ	不明
112	SB10	床	土師器	鉢	体部下～底部	不明	-	不明	不明	9.0	(8.4)	ナデ	ミガキ	ナデ
113	SB10	床	土師器	高坏L	体部下～脚部	不明	-	不明	不明	-	12.8	ナデ	ナデ	-
114	SB10	床	土師器	甕D	口縁～体部下半	17.3	15.6	18.5	体部	不明	(22.9)	不明	不明	不明
115	SB10	カマド	土師器	甕D	体部～底部	不明	不明	不明	不明	7.0	(23.8)	ナデ	ナデ	ナデ
116	SB10	覆土	土師器	甕AⅢ	口縁～体部下半	15.2	14.4	20.0	体部	不明	(16.7)	ナデ+ミガキ	不明	不明
117	SB10	カマド	土師器	甕AⅢ	口縁～底部	16.4	14.6	19.7	体部	9.0	21.0	ナデ	ナデ	ナデ
118	SB10	覆土	土師器	甕C2	口縁～体部下半	18.6	17.3	26.3	体部	不明	(29.0)	ナデ	ナデ	不明
119	SB10	覆土	土師器	甕C?	口縁～体部	18.6	16.0	18.6	口縁	不明	(10.8)	ナデ	ナデ	不明
120	SB10	覆土	須恵器	瓶	口縁～頸部	10.4	不明	不明	不明	不明	(6.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
121	SB11	覆土	須恵器	坏蓋A	蓋部	11.4	-	11.4	口縁	-	3.2	ロクロナデ	ロクロナデ	-

第3章 栄町遺跡（第3次）発掘調査

No.	遺構名	出土位置	種別	器種	残存部位	口径 (cm)	頸部径 (cm)	最大径 (cm)	最大径 部位	底径 (cm)	器高 (cm)	技法の特徴		
												外面調整	内面調整	底部
122	SB12	床	須恵器	短頸壺	口縁～体部上半	10.6	11.6	不明	不明	不明	(8.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	不明
123	SB12	床	土師器	高坏 I	口縁～底部	12.5	-	不明	不明	-	(5.0)	ミガキ	ミガキ	-
124	SB12	床	土師器	高坏 L	脚部	不明	不明	不明	不明	-	(10.3)	不明	不明	-
125	SB12	床	土師器	甕	口縁～体部上半	15.6	14.2	不明	不明	不明	(11.5)	ナデ	ナデ	不明
126	SB12	床	土師器	甕 F	口縁～底部	17.8	16.7	20.3	体部	6.0	24.6	ナデ	ナデ	木葉痕
127	SB12	床	土師器	甕 A I	口縁～底部	15.4	13.5	29.3	体部	8.8	28.9	ナデ	ナデ	ナデ
128	SB12	床	土師器	甕 D	口縁～底部	14.6	13.5	17.2	体部	6.0	24.5	ナデ	ナデ	ナデ
129	SB12	覆土	須恵器	坏蓋 A	蓋部	10.6	-	10.6	口縁	-	2.2	ロクロナデ	ロクロナデ	-
130	SB12	覆土	須恵器	坏蓋 A	蓋部	10.0	-	10.0	口縁	-	(2.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	-
131	SB12	覆土	須恵器	坏蓋 A	蓋部	10.2	-	10.2	体部	-	(1.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	-
132	SB12	覆土	須恵器	坏 G	口縁～底部	9.0	-	9.0	口縁	6.0	2.9	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り
133	SB12	覆土	土師器	ミニチュア	口縁～底部	4.2	-	4.5	体部	2.0	2.9	ナデ	ナデ	ナデ
134	SB12	覆土	土師器	坏 B	口縁～体部下半	12.6	-	12.6	口縁	不明	(5.3)	ミガキ	ミガキ	不明
135	SB12	覆土	土師器	高坏	脚部	不明	不明	不明	不明	-	(5.0)	不明	不明	-
136	SB12	覆土	土師器	鉢 B I	口縁～底部	16.2	-	16.2	口縁	6.0	12.4	ナデ	ナデ	ナデ
137	SB12	覆土	土師器	甕 D	口縁～底部	16.6	14.5	16.6	口縁	6.8	17.9	ナデ	ナデ	ナデ
140	SB14	覆土	土師器	甕 D	体部上半～底部	不明	不明	不明	不明	9.0	(31.9)	ナデ	ナデ	ナデ
141	SB15	床	土師器	甕 D	口縁～底部	18.8	17.9	20.0	体部	7.7	25.0	ナデ	ナデ	ナデ
142	SB15	床	土師器	鉢?	体部～底部	不明	不明	不明	不明	9.0	(8.7)	不明	ナデ	ナデ
143	SK2	覆土	須恵器	坏蓋 A	蓋部	12.0	-	12.0	口縁	-	(1.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	-
144	SK2	覆土	須恵器	坏 G	口縁～底部	9.8	-	9.8	口縁	4.0	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り+ナデ
145	SK2	覆土	須恵器	坏 G	口縁～底部	11.4	-	11.4	口縁	4.0	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り
146	SK2	覆土	須恵器	坏 G	口縁～底部	11.4	-	11.4	口縁	5.6	3.3	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り
147	SK2	覆土	土師器	坏 B	口縁～底部	9.7	-	9.7	口縁	4.0	3.2	不明	ナデ	不明
148	SK2	覆土	土師器	甕 B	口縁～体部下半	24.8	23.6	24.8	口縁	不明	(17.4)	不明	ナデ	不明
149	SK2	覆土	土師器	甕	口縁～体部上半	14.4	13.2	15.0	体部	不明	(8.8)	ナデ	ナデ	不明
150	SK3	覆土	須恵器	坏蓋 A	蓋部	10.2	-	10.2	口縁	-	2.1	ロクロナデ	ロクロナデ	-

() は残存している部位の法量。

第9表 栄町遺跡石製品・土製品観察表

No.	遺構名	出土位置	種別	名称	直径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	技法の特徴
24	SB2	覆土	土製品	紡錘車	4.4	2.6	43.5	
26	SB4	覆土	土製品	土錘	2.1	4.3	10.1	
46	SB6	覆土	土製品	紡錘車	3.7	2.6	43.4	
47	SB6	覆土	土製品	白玉	1.0	0.7	0.8	孔径0.2cm
138	SB12	覆土	土製品	紡錘車	4.7	1.2	23.1	孔径0.5cm
139	SB12	覆土	石製品	管玉	1.1	2.8	6.2	孔径0.15cm

6 自然科学分析

栄町遺跡（第3次）発掘調査では、各竪穴建物跡から出土した炭化物を用いて、自然科学的手法により放射性炭素年代測定（AMS法）及び樹種同定を実施した。

明科遺跡群栄町遺跡（第3次）の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

明科遺跡群栄町遺跡（長野県安曇野市明科中川手）は、犀川の右岸、後背の山地から流下する会田川と犀川の合流部付近に位置する。周辺には、犀川が形成した段丘が分布しており、本遺跡は縄文時代前期末～中期に形成したとされる段丘面（低位段丘Ⅲ堆積物、関；1994）上に立地する。本遺跡では、これまでに隣接地点の発掘調査により6世紀頃の集落が確認されている。今回の発掘調査では同時期の竪穴建物跡が多数検出されたことにより、この集落の広がりが明らかとされた。

本報告では、栄町遺跡第3次調査において検出された竪穴建物跡の年代、出土炭化材の樹種および木材利用の検討を目的として、放射性炭素年代測定及び樹種同定を実施した。

I 放射性炭素年代測定

1 試料

試料は、第3次調査で検出された竪穴建物跡（SB1、SB5、SB7、SB9、SB10）より、それぞれ出土した炭化材5点である。これらの炭化材の観察では、SB1炭化材が約1cm角程度の破片、SB5炭化材が径約2.5cm、長さ約10cm程度の半裁～ミカン割状、SB9炭化材が長さ約4cm、幅約3cm、厚さ約6mm程度の薄い（柾目）板状、SB10炭化材が広い目が板目となる分割材状を呈する。なお、SB7炭化材は暗褐色～暗褐色土中に認められた小破片である。

測定試料は、上記した炭化材の観察範囲内の外側年輪部より採取し、さらに同一試料の状態が良いと判断される箇所より後述する「II 炭化材（樹種）同定」用の試料を採取している。

2 分析方法

試料に土壌や根などの目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時

間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²C の測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma；68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0.0（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C 濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴C の半減期5,730±40年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。

第10表 放射性炭素年代測定及び暦年較正結果

試料	測定年代 (yrBP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	暦年較正結果						相対比	Code. No.							
				σ	cal	AD	558	-	cal			AD	604	cal	BP	1,392	-	1,346
SC11 SB1 (炭化材)	1,490±20	-24.78±0.31	1,487±24	2σ	cal	AD	542	-	cal	AD	633	cal	BP	1,408	-	1,317	1.000	IAAA- 123212
				σ	cal	AD	444	-	cal	AD	448	cal	BP	1,506	-	1,502	0.038	
SC11 SB5 (炭化材)	1,530±20	-27.21±0.30	1,528±24	σ	cal	AD	463	-	cal	AD	483	cal	BP	1,487	-	1,467	0.178	IAAA- 123213
				2σ	cal	AD	533	-	cal	AD	581	cal	BP	1,417	-	1,369	0.784	
				σ	cal	AD	433	-	cal	AD	493	cal	BP	1,517	-	1,457	0.302	
				2σ	cal	AD	506	-	cal	AD	520	cal	BP	1,444	-	1,430	0.036	
SC11 SB7 (炭化材)	1,400±20	-27.75±0.32	1,402±23	σ	cal	AD	527	-	cal	AD	600	cal	BP	1,423	-	1,350	0.662	IAAA- 123214
				2σ	cal	AD	624	-	cal	AD	626	cal	BP	1,326	-	1,324	0.061	
				σ	cal	AD	631	-	cal	AD	657	cal	BP	1,319	-	1,293	0.939	
SC11 SB9 (炭化材)	1,460±20	-26.15±0.39	1,462±24	2σ	cal	AD	607	-	cal	AD	662	cal	BP	1,343	-	1,288	1.000	IAAA- 123215
				σ	cal	AD	582	-	cal	AD	632	cal	BP	1,368	-	1,318	1.000	
SC11 SB10 (炭化材)	1,600±20	-22.52±0.53	1,602±24	2σ	cal	AD	560	-	cal	AD	645	cal	BP	1,390	-	1,305	1.000	IAAA- 123216
				σ	cal	AD	418	-	cal	AD	441	cal	BP	1,532	-	1,509	0.332	
				2σ	cal	AD	484	-	cal	AD	532	cal	BP	1,466	-	1,418	0.668	
				2σ	cal	AD	411	-	cal	AD	536	cal	BP	1,539	-	1,414	1.000	

暦年較正結果は、測定誤差 σ 、 2σ （ σ は統計的に真の値が68%、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲）双方の値を示す。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

3 結果および考察

竪穴建物跡から出土した炭化材の同位体効果による補正を行った測定年代（補正年代）は、SB1炭化材が $1,490 \pm 20\text{yrBP}$ 、SB5炭化材が $1,530 \pm 20\text{yrBP}$ 、SB7炭化材が $1,400 \pm 20\text{yrBP}$ 、SB9炭化材が $1,460 \pm 20\text{yrBP}$ 、SB10炭化材が $1,600 \pm 20\text{yrBP}$ を示す（第10表）。

また、暦年較正結果（ σ ）は、SB1炭化材が calAD 558-calAD 604、SB5炭化材が calAD 444-calAD 581、SB7炭化材が calAD 624-calAD 657、SB9炭化材が calAD 582-calAD 632、SB10炭化材が calAD 418-calAD 532である（第10表）。

以上の結果を参考とすると、SB7を除く4基の竪穴建物跡（SB1、SB5、SB9、SB10）出土炭化材は、6世紀頃を主体として、5世紀前半から7世紀初頭までの較正暦年代を示す。SB7炭化材は、7世紀前半～中頃とやや新しい年代を示す。これらの結果は、古墳時代後期の集落とする調査所見とおおよそ整合するといえる。

II 炭化材（樹種）同定

1 試料

試料は、Iの放射性炭素年代測定に供した炭化材5点である。試料の詳細は、結果とともに第11表に示す。

2 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡及び走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本及び独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995、1996、1997、1998、1999）を参考にする。

第11表 樹種同定結果

遺構名	地点名 (試料名)	形状	種類 (分類群)
SC11 SB1	SW区	小破片	マツ属複雑管束亜属
SC11 SB5	炭サンプル2	分割材状（半裁～ミカン割状）	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
SC11 SB7	北拡張区 灰サンプル	小破片	カエデ属
SC11 SB9	炭化物サンプル No.1	分割材状（柾目板状）	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
SC11 SB10	SW区 炭化物サンプル2	分割状（板目板状）	ヒノキ科

3 結果

同定結果を第11表に示す。炭化材は、針葉樹2分類群（マツ属複維管束亜属、ヒノキ科）と、広葉樹2分類群（コナラ属コナラ亜属クヌギ節、カエデ属）に同定された。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属（*Pinus subgen. Diploxylon*） マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エビセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1-15細胞高。

・ヒノキ科（Cupressaceae）

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1-10細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus subgen. Quercus sect. Cerris*） ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-2列、道管は孔圏外で急激に径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと同複合放射組織とがある。

・カエデ属（*Acer*） カエデ科

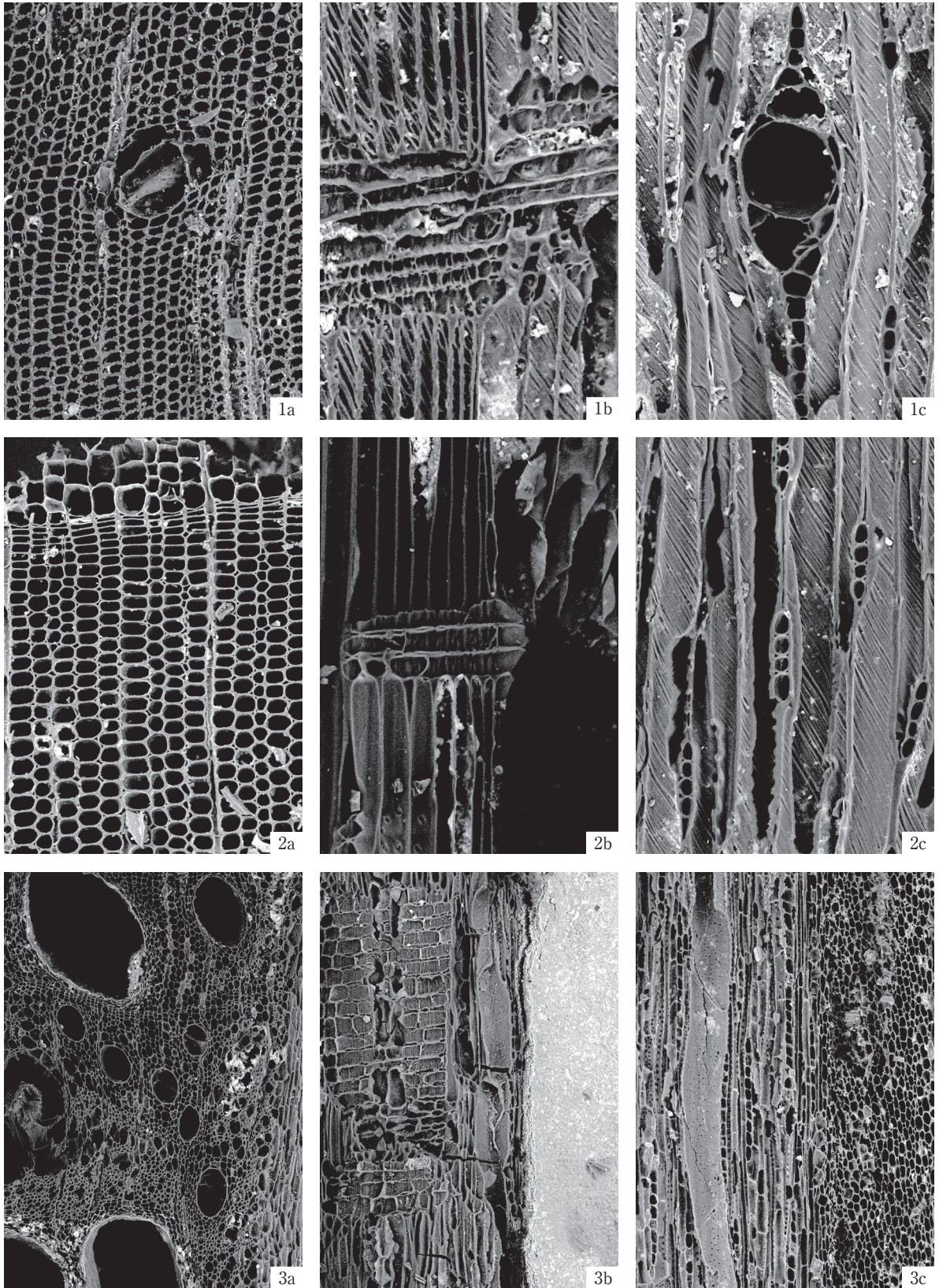
散孔材で、道管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独または2～3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-3細胞幅、1-30細胞高。木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

4 考察

古墳時代後期とされる竪穴建物跡から出土した炭化材には、計4分類群の樹種が確認された。各分類群の木材の材質をみると、針葉樹のマツ属複維管束亜属は、軽軟で加工は容易であるが、強度や保存性は高い。ヒノキ科は、ヒノキ、サワラ、アスナロなどの有用材が含まれ、いずれも木理が通直で割裂性や耐水性が高く、加工が容易である。広葉樹のクヌギ節とカエデ属は、重硬で強度が高いが、加工はやや困難な部類に入る。クヌギ節とカエデ属は、二次林や河畔林の構成種であり、マツ属複維管束亜属も二次林を構成する種類である。一方、ヒノキ科は、本地域では山地の沢筋などにサワラが分布する。

SB5、SB7、SB9については、分析結果から強度の高い木材の利用が推定される。一方、針葉樹材が確認されたSB1やSB10については、材質などを考慮すると、板状を含む分割材として利用された木材などが想定される。

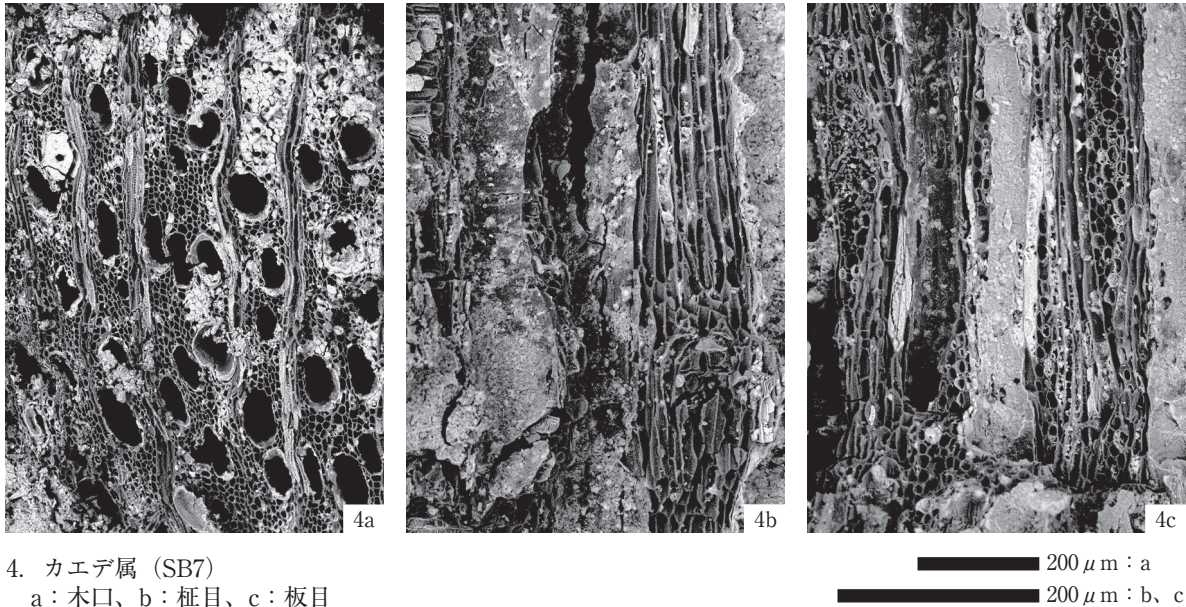
長野県内の調査事例（伊東・山田、2012）のうち、本地域周辺では、県町遺跡（松本市）の古墳時代中期末～後期初頭とされる住居跡から出土した炭化材に針葉樹のヒノキと広葉樹のコナラが確認されて



1. マツ属複維管束亜属 (SB1)
 2. ヒノキ科 (SB10)
 3. コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (SB5)
- a: 木口、b: 柀目、c: 板目

200 μm : 3a
 200 μm : 1-2a、3b、c
 100 μm : 1-2b、c

第60図 炭化材(1)



第61図 炭化材(2)

いる。広葉樹と針葉樹が混在するという特徴がうかがえ、今回の結果とも類似する。また、平出遺跡（塩尻市）の5世紀とされる住居跡から出土した炭化材は、クヌギ節やコナラ節を主体とする結果が得られており、硬く強度の高い広葉樹材を建築部材に利用するという木材利用も確認できる。

引用文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久 (編), 2012, 木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社, 449p.
- Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘 (日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
- 関 全寿, 1994, 第3章 明科町の地形・地質と遺跡. 長野県東筑摩郡明科町遺跡詳細分布調査報告書 明科町の遺跡, 明科町の埋蔵文化財第4集, 64-70.
- 島地 謙・伊東 隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
- Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

7 調査の総括

今回の発掘では古墳時代後期を中心とする集落跡を調査した。この結果、13棟の竪穴建物跡と6棟の掘立柱建物跡を有する集落が存在したことが明らかとなった。今回の調査地点は明治時代以降、工場用地等に利用されてきたため、調査前には遺構の残存状況に不安もあったが、近現代の堆積層の下部には古墳時代の遺構面が良好に残存しており大きな成果につながった。

遺構の帰属時期について

栄町遺跡（第3次）発掘調査で出土した土器類について、遺構ごとに出土数を集計した結果を第12表に示した。今回の調査で出土した土器類については、床面直上及びカマド等に帰属して出土したものを中心に各遺構廃絶時期を推定することがある程度可能と考えられる。これに加えSB6及びSB7では覆土上層に多量の礫と土器類が廃棄されており、これらは間層をはさみ床面直上の一括資料とは区別される。このため、住居埋没期も検討できる。なお、時期区分としては土師器類型で参考にした榎田遺跡古墳時代中期から後期のⅠ～Ⅴ期区分を念頭におく（長野県埋文センター1999）。

SB1からは口縁部がやや外反する土師器坏A3が1点出土した。この土器は榎田遺跡集落ではⅢ期まで継続する。土師器甕類では長胴の甕Dが見られる一方、胴部が丸みを帯びて張る器形もみられ比較的古い様相を示すといえる。このことから本遺構の下限をⅢ期と仮定する。

SB2はカマドが攪乱により残存していないものの、床面から時期比定につながる土器類が出土している。ここからは土師器坏Bが出土しているほか、鉢BⅢや接合部が中実の高坏Lが出土している。土師器甕は長胴の甕Dである。この様相から、本遺構はSB1より新しいⅤ期と考えたい。なお、本遺構の床面直上資料は北隣のSB1覆土土器と組成が類似する。

SB3は残存状況や調査範囲の制約から、良好な資料に恵まれず時期検討はできていない。

SB4も調査範囲の制約から出土時による時期の検討はできないが、遺構の切り合い関係からSB5よりも新しいことが判明している。

SB5は、覆土中に2つの炭化物層を有するため焼失遺構と考えられる。本遺構床面からは内面黒色処理した土師器坏Bが出土しておりⅤ期に帰属すると考えられる。SB4は前後関係から本遺構より新しいが、下限は不明確である。

SB6の床面及びカマド周辺からは口径がやや小さい須恵器坏Gが出土した。これに加え、カマド内にはミニチュア土器が遺棄されている。ミニチュア土器はⅡ期とⅤ期に出土量が増加することが指摘されており、須恵器坏Gとの組成構成から本遺構の帰属もⅤ期と考えられる。また、SB6の覆土2層上面からは礫群と土器類が出土した。これらは人為的に投げ込まれたように出土しているが、いずれも破損した破片資料であった。ここからはSB6帰属時期にも見られる須恵器坏Gの他、鉢、すり鉢、短頸壺、土師器坏B4点等が出土している。土師器坏BがⅤ期に特徴的であることと、須恵器の様相とのセット構成から埋没時期の上限もⅤ期に比定できる。

SB7は遺構面積の約半分しか調査範囲となっていないためカマドが検出されていない。このため、床

第12表 栄町遺跡出土土器遺構別集計表

種別	SB1		SB2		SB3		SB5		SB6		SB7	
	器種	床カマド	覆土	床カマド	覆土	覆土	床カマド	覆土	床カマド	覆土	床カマド	覆土
須恵器	坏 A				1							11
	坏 B											3
	坏 G								1	1		1
	坏 H											
	坏蓋 A		1									6
	坏蓋 B											3
	蓋									1		
	鉢											1
	鉢?		1							1		
	高坏									1		
	すり鉢									1		1
	甕 A											1
	短頸壺									1		
	壺				1							
	瓶											
須恵器 集計			2	1	1				1	6		27
土師器	坏 A3	1										
	坏 B		2	2	1		1	1		4		1
	坏 D2										1	
	鉢											
	鉢?											
	鉢 A	1										
	鉢 A Ⅲ					1	1					
	鉢 B I											
	鉢 B II											
	鉢 B Ⅲ		1	1	1							2
	高坏									1		
	高坏?											
	高坏 I											
	高坏 L				1							
	甕				1		1					1
	甕 A	1										
	甕 A I											
	甕 A Ⅲ											
	甕 B	1										
	甕 C1	1										
	甕 C2											
	甕 D	2			1			1				2
甕 F												
甕 B												
甕 C												
甕 C?										1	1	
ミニチュア									2	1		1
土師器 集計	7	3	6	3	1	3	1	2	6	3	7	
総計	7	5	7	4	1	3	1	3	12	3	34	

種別	器種	SB8		SB9		SB10		SB11	SB12		SB14	SB15	総計	
		床カマド	覆土	床カマド	覆土	床カマド	覆土	覆土	床カマド	覆土	覆土	床カマド		
須恵器	坏 A												12	
	坏 B												3	
	坏 G									1			7	
	坏 H			1	2	1							4	
	坏蓋 A							1		3			14	
	坏蓋 B												2	
	蓋												1	
	鉢	1												1
	鉢?													2
	高坏			1										2
	すり鉢													2
	甕 A													1
	短頸壺									1				2
	壺			1										2
瓶			1				1						2	
須恵器 集計		1	1	3	2	1	1	1	1	4			58	
土師器	坏 A3					1							2	
	坏 B			1	3					1			18	
	坏 D2		1			1							3	
	鉢					1							1	
	鉢?											1	1	
	鉢 A												1	
	鉢 A III												2	
	鉢 B I									1			1	
	鉢 B II			1		1							3	
	鉢 B III			1									6	
	高坏	1								1			3	
	高坏?				1								1	
	高坏 I									1			1	
	高坏 L			1		1				1			4	
	甕	1		2						1			8	
	甕 A												1	
	甕 A I									1			1	
	甕 A III						2						2	
	甕 B												1	
	甕 C1												1	
甕 C2						1						1		
甕 D				1	2				1	1	1	1	13	
甕 F									1				1	
甕 B													1	
甕 C			1										1	
甕 C?						1							2	
ミニチュア						1				1			6	
土師器 集計		2	1	7	5	8	4		6	5	1	2	86	
総計		3	2	10	7	9	5	1	7	9	1	2	144	

面直上出土土器の検討となる。土師器は坏 D2と、底部が出土していないが内面をミガキ調整・黒色処理した甗 C と推定される土器のセットが確認される。坏 D2はⅡ～Ⅳ期、甗 C はⅢ～Ⅴ期に出現する傾向があるため、本遺構の廃絶時期はⅢ～Ⅳ期と考えられる。また、SB7覆土4層上部には多量の礫と残存率の比較的高い須恵器・土師器が多く出土した。特に、須恵器の資料は良好で埋没完了の時期比定に有用である。類型別に見ると最も多いのは坏 A で11点確認された。口径分布は12.4～16.4cmであり断面形状は底部から直線的に口縁部から体部下半で丸みを帯びるものなど多様性がある。坏類ではこの他に、底部に高台を有する坏 B が3点出土した。坏 B はいずれも口径14.2cm、器高4.0～5.0cmと定型的であり、高台は外側に強く張り出し、器底部は丸みを帯びる。坏類の組成比は、坏 A : 坏 B : 坏 G = 0.73 : 0.2 : 0.07である。坏蓋は内面にかえりをもつ坏蓋 A が6点、内面にかえりを持たず外周端面が折れ曲がる坏蓋 B が3点出土した。坏蓋の組成比は坏蓋 A : 坏蓋 B = 0.67 : 0.33となる。この一括資料には古墳時代に特徴的で坏身の口縁部下に蓋受けをもつ坏 H やこれと対応する坏蓋が存在しないこと、坏 A 及び坏 B、坏蓋 A 及び坏蓋 B が共伴しており、坏では A 類、坏蓋では A 類が約7割の組成比であることが特徴である。土師器として時期比定を検討できるものには坏 B 及び甗 C と考えられる土器類がある。これらの土師器は古墳時代Ⅴ期に特徴とされるものであるから、SB7覆土4層上部資料群も SB6覆土2層上面資料群と同じⅤ期と考えられるが、須恵器類が卓越すること、須恵器坏 B や坏蓋 B が一定割合で組成を構成することから下限を古墳時代以降にまで引き下げることが可能と考えられる。

SB8は比較的後世の攪乱が多く入った遺構であり、図示できる遺物も他の堅穴建物跡に比較して少ない。このため帰属時期は不明確である。

SB9は床面から須恵器坏 H、土師器坏 B 及び甗 C が出土した。このうち坏 B はⅤ期、須恵器坏 H 及び土師器甗 C は下限をⅤ期におけるため、本遺構の帰属時期もⅤ期と考えたい。

SB10からは須恵器坏 H、土師器坏 A3及び坏 D2が出土した。このうち土師器坏類は坏 A3の下限がⅢ期、坏 D2がⅡ～Ⅳ期とされている。このような傾向は今回の調査では SB1と類似しているため、本遺構の廃棄の段階は SB1と同時期と考え下限をⅢ期としたい。

SB12の床面・カマドからは坏類が出土していない。特徴的な土器としては土師器の高坏 I がある。この土器は須恵器模倣高坏と考えられ、断面形態に丸みを帯びた体部下半に2段の明確な稜を作出する。坏部だけの出土であるため脚部の形態が不明であるが、体部下半に稜をもつ高坏はⅡ～Ⅳ期に見られる。この他、カマドから出土した土師器甕類には、体部が砲弾型を呈するものや、体部の断面形がソロバン形に近く中央に最大径を持つものなどが見られる。いずれもやや古くⅡ～Ⅲ期に特徴的である。これらの特徴から、本遺構の帰属時期も SB1、SB10と同様に下限をⅢ期としたい。

次に、遺構間接合資料について検討する。今回の発掘調査では遺構間接合した土器が6点確認された。これらはいずれも2遺構間の接合であり、3以上の遺構間で接合した例はない。図示できた資料は SB9帰属の91及び100、SB12帰属の122である。帰属遺構の認定については、接合した土器片から得られた最も古い（つまり最初の）割れが起こったであろう場所を、割れの順序と破片の出土遺構から推定している。また、破片資料について割れた瞬間からほとんど時間をおかず埋没が開始したと仮定する前

提で、それぞれの破片の出土層位から遺構間の前後関係を考える。例えば、割れと同時に埋没が開始したとする前提の接合資料である土器片ア及びイがあったとする。このうちアは遺構 A 床面、イは遺構 B 覆土から出土したとすると、この土器が割れて埋没が開始した瞬間に遺構 A は床面が露出している段階、すなわち埋没開始以前であったのに対し、遺構 B は以降廃絶後の埋没過程にあったと推察される。したがってこの例では遺構の時間差として遺構 B が古く遺構 A が新しいと導ける。今回の発掘調査について、このような関係から第13表のような時間差を想定できた。

第13表 遺構間接合土器

接合 No.	No.	種別	器種	遺構・層位	遺構・層位	遺構の新旧関係
①	91	須恵器	高坏	SB5覆土	SB9床	SB5が古く、SB9が新しい
②	100	須恵器	坏 H	SB7覆土	SB9床、覆土	SB7が古く、SB9が新しい
③	122	須恵器	短頸壺	SB8床	SB12床	SB8と SB12は使用時期が同時
④	-	須恵器	壺	SB2覆土	SB5覆土	SB2と SB5は埋没時期が同時
⑤	-	須恵器	壺	SB6床	SB10覆土	SB10が古く、SB6が新しい
⑥	-	須恵器	甕	SB7覆土	SB9床	SB7が古く、SB9が新しい

以上のような特徴から、今回の発掘調査で得られた遺構の年代間を整理すると、SB1、SB8、SB10、SB12の段階、SB7床面の段階、SB2、SB4、SB5、SB6、SB9の段階、SB6覆土 2 層上面、SB7覆土 4 層上部の段階に大別できそうである。また、遺構間接合資料の分析や炭化材の移動から SB5が古く SB9が新しいなど大別段階内でも時間差が想定できる。

調査の成果と今後の課題

今回の調査の総括として明らかになった点は以下のとおりである。

- ① 竪穴建物跡13棟、掘立柱建物跡 6 棟の古墳時代集落跡を確認した。
- ② 会田川を挟んで北側に位置する潮地区には、古墳時代後期の古墳群が点在する。従来この古墳群造営集団の集落跡は未確認であったが、今回の発掘調査によって本集落である蓋然性が高まった。
- ③ 集落の存続時期は古墳時代後期を中心とするが、後続する時期にも須恵器の投げ込みがなされた遺構が確認された。この投げ込まれた土器群は、本遺跡より南側に所在する明科廃寺創建時期まで下ると考えられ、寺院造営との関連が示唆される。
- ④ 明治期に官営製材所が開設され、火災によって焼失した痕跡が確認できた。また近代以降のレンガ造の構造物も確認された。

また、今後の課題とされる点は以下のとおりである。

- ① 栄町遺跡に北接する古殿屋敷からは、古墳時代中期の土器が出土している。集落としての存続期間を検討するうえで、時間的に点から線へと集落の展開を整理する必要がある。これは、後続する時代についても同様で、明科廃寺及び潮古墳群と栄町遺跡との関連性は重要である。
- ② 今回の調査では、古墳時代後期から奈良時代初頭にかけての須恵器が一定量確認されている。犀川対

第3章 栄町遺跡（第3次）発掘調査

岸には、明科廃寺に瓦を供給したと推定されるおそらく瓦陶兼業の桜坂古窯が所在する。栄町遺跡や潮古墳群に供給された在地産の須恵器の供給源が明科地域内であるかどうかの研究も、周辺地域の調査の進展によるところが大きい。



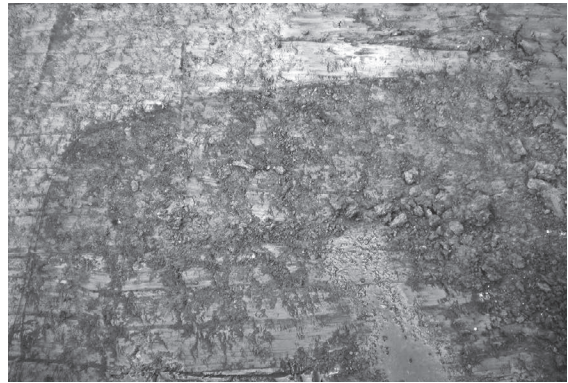
調査区遠景（東から）



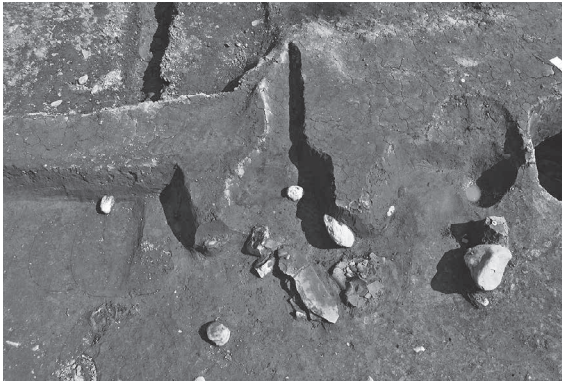
発掘調査前調査区（南から）



発掘調査前調査区（西から）



遺構検出状況



SB1 カマド（西から）



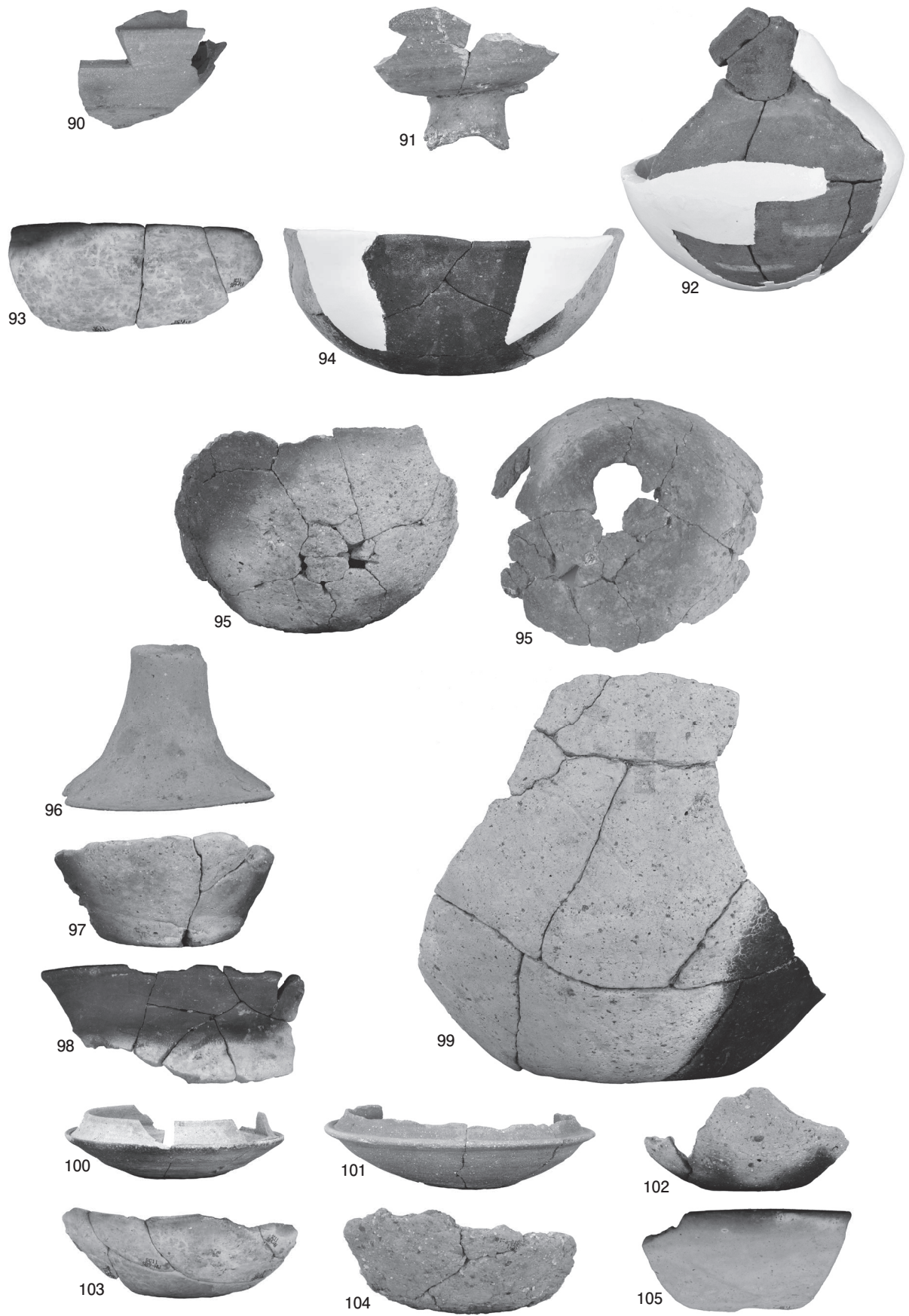
SB1 完掘（西から）



SB1 カマド遺物出土状況（西から）



SB1 カマド遺物出土状況（西から）

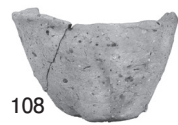




106



107



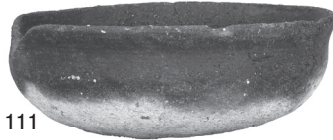
108



109



110



111



113



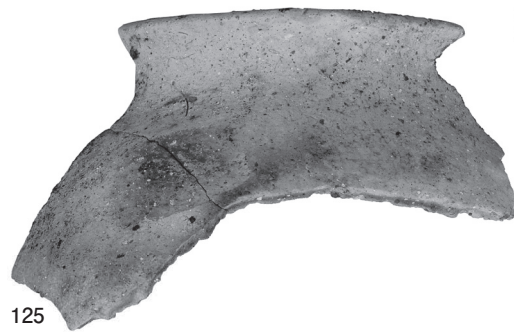
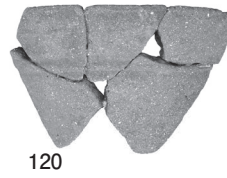
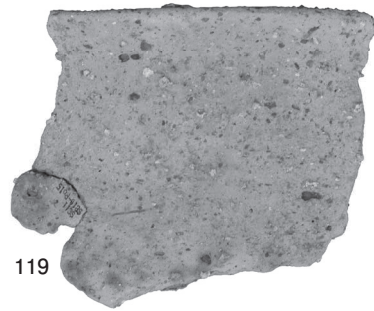
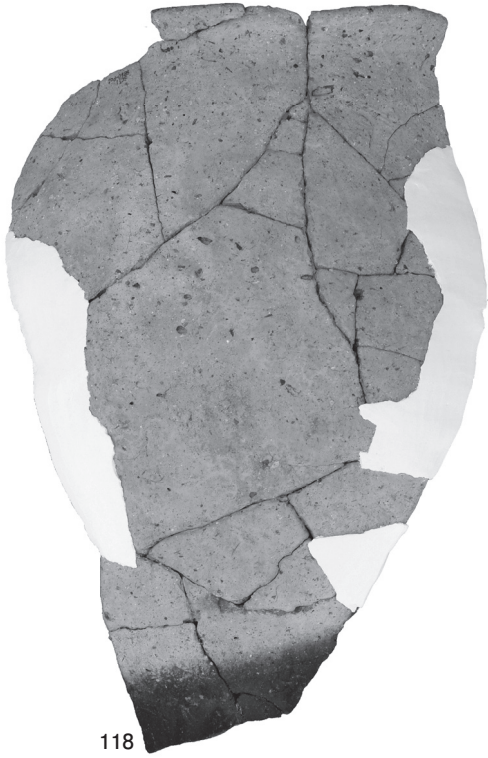
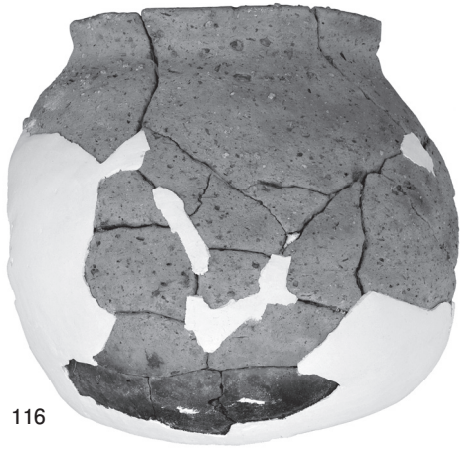
112

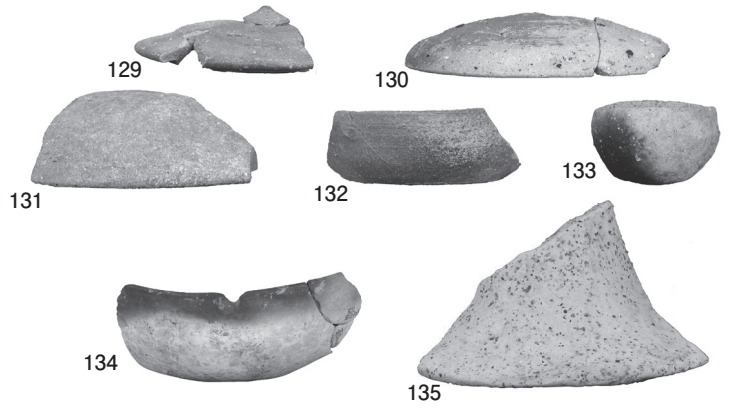
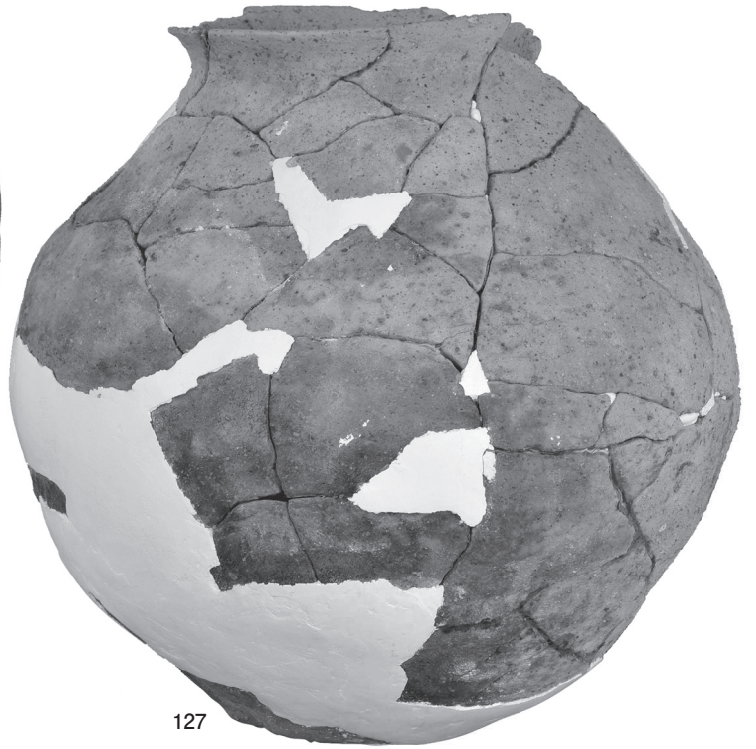


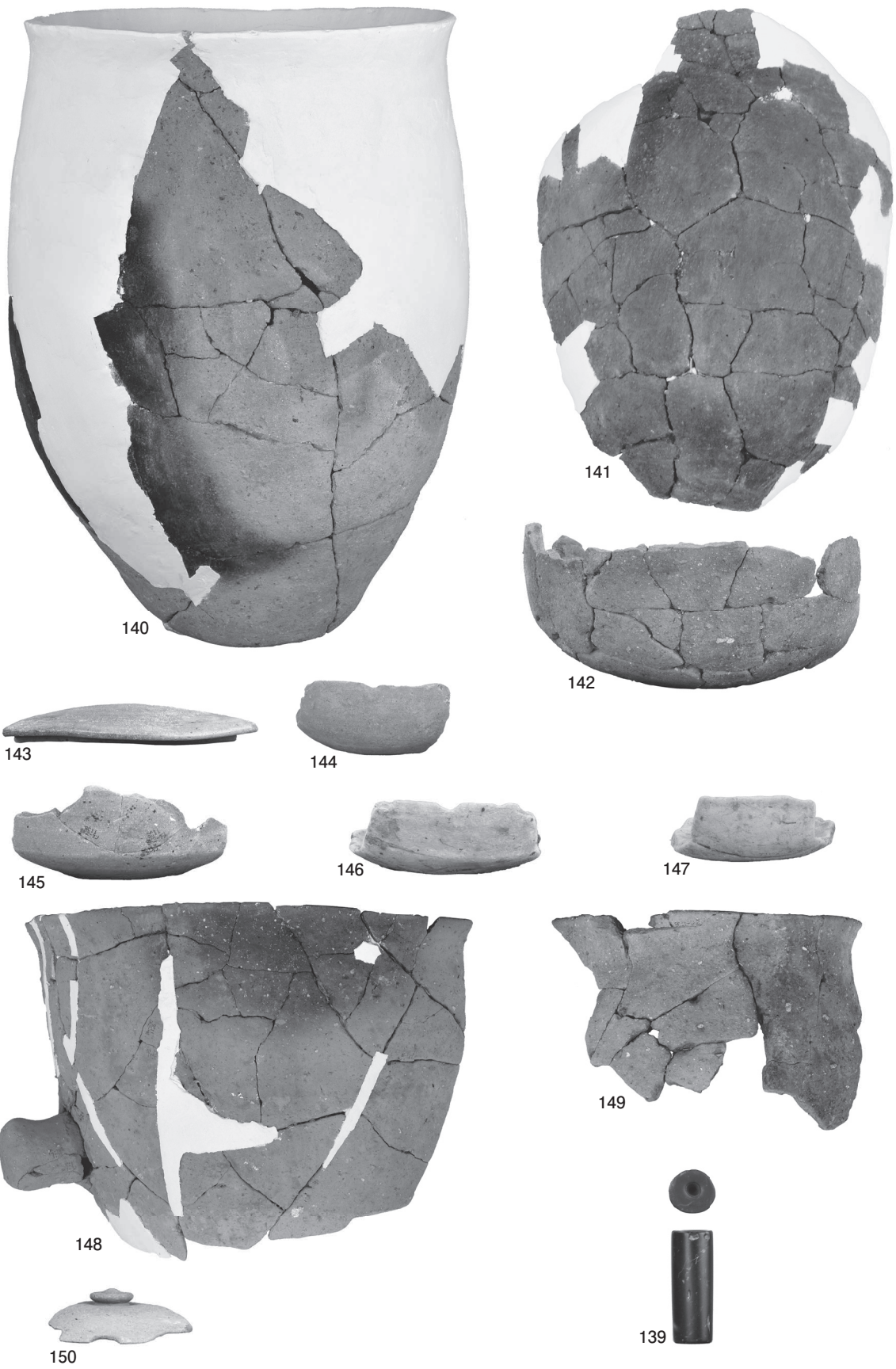
114



115







引用・参考文献（五十音順）

- 明科町史編纂会 1984 『明科町史 上巻』 明科町史刊行会
 明科町史編纂会 1985 『明科町史 下巻』 明科町史刊行会
 明科町教育委員会 1979 『長野県東筑摩郡明科町こや城遺跡発掘調査報告書』 明科町教育委員会
 明科町教育委員会 1991 『ほうろく屋敷遺跡—川西地区県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書—』 明科町の埋蔵文化財第3集 明科町教育委員会
 明科町教育委員会 1997 『塩田若宮遺跡—明科町立明北小学校体育館建て替え工事に伴う緊急発掘調査報告—』 明科町の埋蔵文化財第10集 明科町教育委員会
 明科町教育委員会 2000 『明科廃寺址—個人住宅建替に伴う緊急発掘調査報告書—』 明科町の埋蔵文化財第7集 明科町教育委員会
 明科町教育委員会 2001 『ほうろく屋敷遺跡Ⅳ—個人住宅建築工事に伴う第4次緊急発掘調査報告—』 明科町の埋蔵文化財第11集 明科町教育委員会
 明科町教育委員会 2002 『栄町遺跡—「子どもと大人の交流学習施設」建設に伴う緊急発掘調査—』 明科町の埋蔵文化財第6集 明科町教育委員会
 明科町教育委員会 2004 『上手屋敷遺跡第2次調査—町営住宅建設に伴う緊急発掘調査報告書—』 明科町の埋蔵文化財第12集 明科町教育委員会
 明科町教育委員会 2005 『潮神明宮前遺跡Ⅱ—町道拡幅改良工事に伴う緊急発掘調査報告書—』 明科町の埋蔵文化財第13集 明科町教育委員会
 安曇野市教育委員会 2011 『平成21年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書—塩田若宮遺跡（第2次）—』 安曇野市の埋蔵文化財第4集 安曇野市教育委員会
 安曇野市教育委員会 2012 『平成22年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書—東小倉遺跡採集資料整理報告—』 安曇野市の埋蔵文化財第5集 安曇野市教育委員会
 飯山市教育委員会 1991 『小佐原遺跡・関沢遺跡』 飯山市埋蔵文化財調査報告第25集 飯山市教育委員会
 太田喜幸、河西清光 1966 「長野県東筑摩郡明科町七貴緑ヶ丘遺跡調査」『松本諏訪地区新産都市地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告』 長野県考古学会 pp.139-156
 桐原健 2010 「信濃における八稜鏡の所有者」『信濃』62-9 pp.19-27 信濃史学会
 東海土器研究会 2000 『須恵器生産の出現から消滅 猿投窯・湖西窯編年の再構築』 東海土器研究会
 長野県埋蔵文化財センター 1989 『吉田川西遺跡—中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3（塩尻市内その2）—』 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書3 長野県埋蔵文化財センター
 長野県埋蔵文化財センター 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4—松本市内その1—総論編』 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書4 長野県埋蔵文化財センター
 長野県埋蔵文化財センター 1993 『北村遺跡—中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11（明科町内）—』 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14 長野県埋蔵文化財センター
 長野県埋蔵文化財センター 1999 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12—長野市内その10—榎田遺跡』 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書37 長野県埋蔵文化財センター
 長野県埋蔵文化財センター 2000 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書28—更埴市内その7—更埴条里遺跡・屋代遺跡群（含む大境遺跡・窪河原遺跡）』 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書54 長野県埋蔵文化財センター
 長野県埋蔵文化財センター 2009 『御社宮司遺跡 中村・外垣外遺跡—一般国道20号（坂室バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（茅野市内）—』 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書88 長野県埋蔵文化財センター
 長野県埋蔵文化財センター 2011 『上五明条里水田址—主要地方道長野上田線力石バイパス建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書2（坂城町内）—』 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書97 長野県埋蔵文化財センター
 長野県編 1988 『長野県史 考古資料編 全1巻(4)遺構・遺物』 長野県史刊行会
 長久智子 2010 「9世紀における瑞花双鳥文八稜鏡の初源形式」『愛知県陶磁資料館研究紀要15』 pp.95-118 愛知県陶磁資料館
 原明芳 1998 「信濃の古代墳墓」『長野県考古学会誌』86 pp.1-49 長野県考古学会
 原明芳 2001 「墓に埋められた品々」『中世土器研究論集—中世土器研究会20周年記念論集—』 pp.157-166 中世土器研究会

引用・参考文献（五十音順）

- 原明芳 2009 「平安時代に出現する木棺墓からみえる信濃の在地社会」『信濃』61-4 pp.57-73 信濃史学会
- 松本市教育委員会 1991 『松本市里山辺 薄町・石神・鎌田遺跡—県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査概報—』松本市文化財調査報告 No.91 松本市教育委員会
- 松本市教育委員会 1994 『出川南遺跡 IV・平田里古墳群緊急発掘調査報告書』松本市文化財調査報告 No.115 松本市教育委員会
- 吉田恵二、中村耕作編 2012 『長野県安曇野市穂高古墳群2011年度発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学実習報告第46集 國學院大學文学部考古学研究室

報告書抄録

ふりがな	へいせい23ねんどあづみのしまいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこくしょ	
書名	平成23年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書	
副書名	明科遺跡群古殿屋敷（第1次） 明科遺跡群栄町遺跡（第3次）	
巻次		
シリーズ名	安曇野市の埋蔵文化財	
シリーズ番号	第6集	
編著者名	土屋 和章、鳥羽 嘉彦、山下 泰永	
編集機関	安曇野市教育委員会	
所在地	〒399-7102 長野県安曇野市明科中川手2914番地1 TEL0263-62-3090	
発行年月日	西暦2013年3月31日	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'"	東経 °'"	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
あかしな いせきぐん ふるとのや しき 明科遺跡群 古殿屋敷	ながのけんあづみのしあ かしなながわて4232ば ん1 長野県安曇野市明科中川 手4232番1	20220	5-413	36° 21' 26"	137° 55' 47"	20110705 ～ 20110715	24㎡	排水路 布設
あかしな いせきぐん さかえち ょういせき 明科遺跡群 栄町遺跡	ながのけんあづみのしあ かしなながわて6824ば ん38ほか 長野県安曇野市明科中川 手6824番38外	20220	5-411	36° 21' 24"	137° 55' 44"	20110818 ～ 20111222	800㎡	公共施設 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
明科遺跡群 古殿屋敷	墓	平安時代	木棺墓1	青銅製八稜鏡、緑釉陶器、 灰釉陶器、土師器	平安時代の木棺墓から、 青銅製八稜鏡、緑釉陶器、 灰釉陶器等が出土。
明科遺跡群 栄町遺跡	集落	古墳時代	竪穴建物跡13、掘立柱建 物跡6、溝跡1、土坑・ ピット	須恵器、土師器、土製品、 管玉	古墳時代後期を中心とし た集落跡で竪穴建物跡等 を調査。

要約	<p>古殿屋敷では、平安時代（10世紀半ば）の木棺墓から青銅製八稜鏡をはじめ、緑釉陶器、灰釉陶器、土師器等の遺物が出土した。本遺跡は、中近世及び古墳時代の遺構の存在が知られていたが、平安時代の遺構が確認されたのは今回が初である。また、安曇野市内で八稜鏡を伴う木棺墓から遺物が一括で出土した例も他にない。当該時期の安曇野市内での墓制を考察するのに重要な資料である。</p> <p>栄町遺跡からは、古墳時代後期を中心とした時期の集落で竪穴建物跡及び掘立柱建物跡を調査した。竪穴建物跡の残存状況は良好で、カマド付近及び床面から出土した土器は、安曇野市内において該期の土器編年上重要な資料である。また、遺構分布から付近一帯に集落が展開すると考えられる。</p>
----	--

安曇野市の埋蔵文化財第6集

平成23年度
安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書
明科遺跡群古殿屋敷（第1次） 明科遺跡群栄町遺跡（第3次）

2013

発行 平成25年（2013）3月31日
安曇野市教育委員会
長野県安曇野市明科中川手2914番地1
電話 0263-62-3090
印刷 藤原印刷株式会社